
BLEACH in DAWN - 夜明け前 -

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B L E A C H i n D A W N - 夜明け前 -

【Nコード】

N 6 2 8 6 D

【作者名】

切香

【あらすじ】

ソウル・ソサエティに藍染率いる破面が攻め込み、全土を揺るがすダーク・ファンタジー。殉職命令を胸に秘め、隊長十人は最前線へと赴く。そして遂に迎えた存亡の危機に、日番谷の取った行動は？日番谷&一護中心、戦記長編。

「1」夕闇1 蠢く夢

それは幾筋もの雷に似ていた。

闇の中に立ち上がった、まばゆい光の柱。

その光は消えず、煌々と空を貫いている。

俺は、激しく体を揺さぶられながら、その光を呆と見つめていた。
ぜえ、ぜえ、という烈しい息遣いが耳を打つ。

俺を肩に担いでいる男は一心不乱に、光の柱から離れるため奔っているのだ。

そして、かの男は喘ぐ息の合間から、途切れ途切れの叫びを漏らした。

獣のように、赤子のように。

泣いているのだ。慟哭している

何を泣く？何を逃げているんだ。

俺は悲しくなんてない。

辛くも、恐ろしくもない。

ただ揺さぶられたせいだろうか、体の中が熱いんだ。

まるで体の中に、別の生き物が息づいているようだ。

ぞろりと、それがまた、蠢いた。

「・・・日番谷隊長」

上から声が聞こえ、俺はハッと目を開いた。

横たわった俺の上に、見慣れた副官の顔が覗き込んでいる。

「そこはあたしが寝る席ですよ、隊長」

「・・・あ？」

上半身を起こして、辺りを見回す。

そこでやっと、自分が執務室に置かれた、長椅子の上で眠ってしまったことに気づいた。

「うるせえ。ここはお前のベッドじゃねえ」

ため息をついて、長椅子から立ち上がり隊長席へと向かった。

背中に、松本の視線を感じる。

「珍しいですね、執務室で寝入るなんて。・・・疲れてるんですか？」

「別に、疲れてなんかねーよ。それより何か用か」

隊長席に背中を落ち着けると、俺は机に肘をついて、松本を見返した。

心配なんて、似合わないことをされても困る。

松本は俺の問いに、コクリと頷いた。

「臨時の隊首会を執り行う、と通達が来ました。

各隊の隊長は全員、一番隊舎に集合だそうです」

「今すぐか」

もう一度頷いた松本の表情は、曇っている。

先だつての事件を思い浮かべているんだろう、無理もねえ。

俺は、机の上に山積みになっている仕事を諦めて、立ち上がった。

そして、椅子の裏に立てかけてあった、氷輪丸を手取る。

？

俺は思わず、胸に手を当てた。

何かが自分の意思に反し、胸の奥で蠢いたような。

しかしそれは一瞬のことで、すぐに消えた。

なんか、こんな夢を見たような・・・

思い出せない。

きな臭い予感がふつと頭をよぎったが、それも夢のように消えた。

【2】夕闇2 空蟬

通りは、夕焼けに煌々と照らされていた。

精霊廷の周囲には、高く張り巡らされた城壁が見える。

その更に向こうに、朱色の太陽が、今まさに沈もうとしていた。

切れ切れの雲が、影のように太陽の周囲に漂っている。

なるほど、白いものも更に明るいものが在れば、闇になるんだと思う。

一番隊舎に向かう大通りの左右には、白壁・黒瓦の隊舎が整然と並んでいる。

通りには、上下を黒で固めた死神たちが、行き交う。

唯一茜色に染まらない黒い姿が、スイツ、スイツとすれ違う様は、まるで影絵のようだった。

仕事を終えた第一陣で、足取りは昼間に比べると穏やかで、談笑も漏れる。

「あつ、日番谷隊長、お疲れ様です！」

「日番谷隊長、お先に失礼します！」

同僚で連れ立ち、夕飯を食べにゆく部下たち。

甘味処の前にたむろしている、若い女死神たち。

どの顔にも、暗い影は微塵も無い。

何千年も続いた平和な時代が、まさか壊れようとは、夢にも思っていない表情で。

あれほどのことが、あつたのに。

隊長格以外の死神は、あの大事件の「真相」を知らされていない。

紙一重の平和、か。

皮膚に当てられた一枚の刃に、気がつかないのは幸せか。それが彼ら彼女らの上に閃かぬことを、祈るばかりだ。

まるで何かに審判を下すように、巨大な一番隊の門の前に辿り着く。そこには、櫓^{たすき}がけで帯刀した、守衛たちが一分の隙もなく立ち並んでいた。

「日番谷隊長！お疲れ様です」

俺の姿を見つけると、速やかに波のような動きで頭を下げた。軽く目で挨拶を返すと、重々しい音を響かせ、門が開かれるのを見る。

人を何時間閉じ込める気だか。

当然ながら、気は重かった。

護廷十三隊。

生から死へ輪廻する、人の魂魄の監視者「死神」を統括する機関の名だ。

悪しき魂「虚」^{ホロウ}など、輪廻を乱す者には戦闘も辞さない、戦いに特化した部隊。

その本拠地「精霊廷」を未曾有の事件が襲ったのは、三ヶ月前のことだった。

旅禍の侵入に端を発した事件は、五番隊隊長・藍染の殺害という思わぬ展開を見せた。

当初描かれたのは、藍染を殺したのは旅禍の仕業で、旅禍の拘束によって騒動は収まるというシナリオ。

でも歯車は、俺たちの思いの外で動いた。

フタを開けて見れば、元凶は藍染を含めた隊長3名にあるという体

たらく。

留めることもできず、おめおめと目の前で虚圏^{ウエコムンド}へ離脱するのを許してしまった。

後に残されたのは、疑念のままに同士討ちを重ねた、セミの抜け殻のような「護廷十三隊」だった。

これから集まる護廷十三隊の隊長たちは、隊長と隊長、副隊長と副隊長が刃を交わした傷跡から、いまだ復帰していない。それぞれが、それぞれの挫折を味わった事件だった。

日番谷隊長。おぬし、一時期は誰よりも真実に迫りながら、なぜ読み間違えた。

反乱がひとまず収束した後、総隊長が俺に言った言葉は、深く俺を穿った。

その言葉は、ふたつの意味で俺を責めていた。なぜ、真実を読みきれなかったのか。

そしてなぜ、それを他の隊長に伝えなかったのか。

木を見て森を見失うな。

「森」が死神全員なら、「木」は、誰なのか。総隊長の冷静な瞳は、それが誰か見抜いていた。

日番谷隊長。雛森副隊長とは、しばらく距離をあけたほうがよいぞ。

ぎり、と。俺は奥歯をかみ締め、隊首室の扉を開けた。

【3】夕闇3 殉職命令

「やあ、日番谷隊長！」

扉を閉めた途端に、大股で歩み寄ってきた男を、俺はため息をついて見返した。

こんな能天気な声で、俺を呼ぶ隊長はひとりしかない。そしてそのひとりは、常に菓子を俺に与えたがる。

俺はできるだけ仏頂面で、その男の手のひらに置かれた饅頭まんじゅうを一瞥した。

「何asca、浮竹隊長。食いませんよ」

「まあまあ。これは『甘露』の名物だよ？」

俺が睨んでも、奴は平気な顔をして温厚に笑っている。

奴は浮竹十三番隊隊長。

生来の病弱を思わせない屈託の無い笑みと、大きな声を持つこの男は、隊長から末席まで幅広く慕われている。

真央統学院の一期生のひとりで、ゆうに二千年近い年月を生きているらしい。

俺を気に入ってるらしいのは、十四郎という名前の発音が俺の「冬獅郎」と似てるからだ。

ジウウシロウとトウシロウ。確かに似てるが、なんでそれが俺を気に入る理由になるんだろう。

「餌付けされてるねえ」

浮竹の肩越しに俺を見下ろしてきたのは、八番隊隊長の京楽春水。

女物の着物を隊首羽織の上にまとい、簪かんざしを頭に挿した気障キザな男。

上流貴族の家系で、苦勞をしらねえ女にだらしねえ男。ただ、強い。強いといえは浮竹も。

「餌付けなんかじゃない！」

冗談しか言わない男と、冗談がまるで通じない男。

そんなでも、この2人は真央統学院時代の同期だからか、馬が合うらしい。

この二人は、まだ今の十人の隊長の中では、マシな方だ。

俺は、すでに揃っている連中の顔をざっと見渡す。

狼面、仮面、眼帯男、目つきの悪い女。碌なメンツじゃねえ。

「まあ、気をつけたほうがいいねえ・・・」

うんざりした俺の表情に気づいたのかいないのか、京楽が飄々と言った。

「心あたたまるとな話じゃないのは、間違いないからねえ。

まあそんな話題だったら、今なら力ネを払ってでも聞きたいけどね」

タン・・・！

その時、木の床を杖が突く音が響き渡った。

俺たち十人の隊長は、五人ずつ二列に並び、互いに向き合う形で、その場に不動になる。

山本総隊長が杖を手に、ゆっくりと隊首席を越えて、歩み寄ってくるのが見えた。

顔といわず体と言わず、縦横無尽にはしつた古傷。

老いてもその体は鍛え上げられ、俺たちを見据える眼光は、狼のよう鋭い。

二千年もの間、護廷十三隊の頂点に立ち、死神を率いてきた男にはふさわしい外見だった。

「・・・全員で十人か」

総隊長は、俺たち一人ひとりの顔を、値踏みするかのように見回してから、低い声で呟いた。

「本日緊急に集まってもらったのは、他でもない。藍染の反乱の目的が分かった」

京楽が、ふう・・・と、ため息をつくのが聞こえた。

同時に、くぁ、と更木が大きな口を開けて欠伸をする。

「壮大な・・・実に無謀な目的じゃ。

ソウル・ソサエティだけでなく、他の空間も巻き込むほどに。

現世、羅刹界・・・そして、『王廷』までも」

王廷。

その響きに、俺たちは全員顔を上げる。

現世、ソウル・ソサエティを含め、世界には数多くの「階層」が存在する。

「王廷」は、その中でも最も高位に位置し、全てを統べる存在だ。そして王廷の頂点に立つのが「霊王」と呼ばれ、その実態を知るものはソウル・ソサエティにはいない。

いわば、確実にいることは分かっているが、姿は見えない「神」のようなものだ。

王廷に、霊王にたてつくなど、文字通り天に唾吐く行為。

今までに誰も実行はおろか、本気で思ったことすらないだろう。

だから、その後に続いた総隊長の言葉は、俺たち全員を震撼させた。

「藍染の狙いは、王廷に御座す、『霊王』を襲い、その立場を奪うことじゃ」

「そんな、馬鹿なことが・・・そもそも、王廷の周りは強固な結界で覆われ、侵入など・・・」

そう言いかけた浮竹の言葉を、総隊長は眼光のみでさえぎった。

「あるのじゃよ。ただひとつ、王廷に到達する方法が。」

それは代々、総隊長のみ伝えられてきた」

ゴクリ、と誰かが唾を飲み込む音が聞こえた。

「・・・それは？」

俺が尋ねると、総隊長はわずかにためらったが、すぐに口を開いた。

「精霊廷における死神の、霊子じゃよ」

「・・・。霊子は、死神の『核』のようなもの。それ自体が攻撃力を持つ、と言うね。」

つまり、そういうことなのかい？山爺」

京楽がまっすぐに総隊長を見た。その眼光は、俺が初めて見るほど鋭い。

「左様」

総隊長は、俺達の間には漂う動揺から目を逸らすように、瞳を閉じた。

「霊子を奪う方法はひとつ。その死神を、殺すしかない。」

そして・・・死神全員の霊子は、王廷への結界を、砕くだけの威力を持つという」

その頃には、ピンと張り詰めた糸のような緊張が、俺たちを覆っていた。

「藍染は破面を生み出し、今や精霊廷に勝るとも劣らぬ力をつけてきておる。」

あやつが破面を引き連れ、精霊廷に攻め込む日は近い」

ダン、とその杖の先が、強く床を突く。

炯炯と底光りのする、総隊長の眼光が俺たちを射た。

「王廷を。ひいては霊王をお護りするため。おぬしら十人には、死んでもらうぞ」

【4】夕闇4 伝言

それから、数分後。俺たちの中には、水を打ったような沈黙が広がっていた。

俺たちの前に映し出されていたのは、巨大なモニターだった。

早口で説明を続けていた涅槃くろうちは、そこで言葉を切った。

「・・・以上が、破面に対する戦略だヨ。質問のある者はいるかね」

「・・・は！」

質問の代わりに、更木が笑声をあげた。

「なんて弱気な策だ、笑わせるぜ。」

相手がいかに強かろうが、生き物なら殺せんだろ。

相手を超えればいい、それだけの話じゃねえか」

「ハッ、剣を振り回すしか脳がない奴が、吹いてくれるじゃないか。まあ、確かに君の頭脳では、無理な戦略かもしれんがネ」

「やめんか。山本総隊長の御前だ」

にらみ合う更木と涅槃の間に、狛村がズイと巨体をさし入れた。

「例えそれがどんな命令だろうと、自分は総隊長殿に従うまでだ」

「最もだ。与えられた任務の遂行こそが、死神の矜持。しのこの言
うな」

ほとんど抑揚のない、感情もこもらない声音で、碎蜂ソイフォンが言い放った。
話はこれ切りだ、といわんばかりに背を向ける。

「・・・総隊長」

俺は、少し離れて腕を組んだ、山本総隊長に目をやった。

「破面の駆除は、元々王属特務　王廷の任務では？」

碎蜂が、ちらりと振り返った。周囲の視線が、総隊長に集中する。

「王属特務」とは、王廷にあり、霊王を含む王家を護る専属部隊。

これまでも、死神には荷が重い王虚や破面の処理は、彼らが司っていたはずだった。

対する総隊長は、不機嫌さを隠しもせず、俺を底光りがする瞳で見据えた。

「今回の首謀者は藍染・・・護廷十三隊の元隊長じゃ。その尻拭いを王属特務にさせると？」

「・・・日番谷隊長」

狛村が俺を諫めるように前に出る。

でも、俺は総隊長から目を逸らさなかった。

「では質問を変えます。

なぜ、王廷を護る結界と、全死神の霊子の強度は同じなんスか？何のために？」

「それは自然の摂理じゃ！！不遜が過ぎるぞ、日番谷！！」

総隊長の一喝に、ビシッ、と音を立て、隊首室の窓に罅^{ひび}がはいった。この老隊長が、本気で怒りを見せることなど、ほとんどない。隊長の間にも緊張がはしった。

俺はさすがに言葉を止めたが、それでも瞳は逸らせなかった。

怒りに燃える、総隊長の瞳。

しかしその中に、何かを伝えようとするような色が、俺には伺えた。

察してくれ。

それが指し示すのは、ひとつの可能性。

俺の推測は、そんなに逸れちゃいないらしいな。

「申し訳ありませんでした。言葉が過ぎました」

俺は頭を下げると、踵を返した。

「・・・日番谷隊長」

総隊長の声に、足を止めて振り返る。

「死ぬのは、構いません。ただ王廷のためじゃない。精霊廷を護るためなら」

総隊長が口を開いたが、俺は視線を扉に戻す。

そして、誰の言葉も聞かないまま、その場を後にした。

「・・・日番谷隊長」

ゆつくりと歩いていた俺の足を止めたのは、穏やかな女の声だった。

「卯ノ花隊長。何ですか」

振り返ると、そこには優しい笑みを浮かべた四番隊隊長・卯ノ花の姿があった。

総隊長を除けば、隊長の中で最古参となる。他の隊長も、卯ノ花には一目おいていた。

「貴方が出てすぐ、隊首会は終わりました。貴方に伝言を仰せつかってきました」

「・・・はい」

その穏やかな瞳に見据えられると、途中退場したことが妙に気恥ずかしくなってくる。

それに気づいているのかいないのか、卯ノ花はにっこりと微笑んだ。

「あなたの懸念は、最中です。」

さっきの問答で、みな気づいてしまったでしょうね。

王廷は、今回の反乱については、おそらく『関与していない』。精霊廷の未曾有の危機にも関わらず

深刻な内容を、卯ノ花は歌うように口にした。

「それでも俺たちは、王廷を護るために命がけで戦わなきゃならない」

「その通りです」

卯ノ花は、この期に及んで微笑んだ。

「なぜなら、王廷の結界を破るには、死神を皆殺しにしなければなりません。」

望もつと望むまいと、死神には、王廷の敵と戦うしか手が無いのですから」

王廷の結界と死神の霊子。この絶妙なバランスは、きっと偶然でもなんでもない。

死神に王廷を護らせるために、俺達には見上げても届かない高みに居る誰かが、設定したものなのだろう。

そして、王廷が死神をどう捉えているのか。

それには、思惑が透けて見える。

だから総隊長は、俺の質問に感情を剥き出しにしたのだろう。

・・・この戦いにおいて、王廷の助力は、おそらく望めまい。

「破面は現在、現世の『空座町』からへらちやうに出没しています。

そのため、現世の死神代行・黒崎一護に監視の命が下りました」

「・・・なるほど」

黒崎一護。

3ヶ月前は、敵だった。

直接戦ったことは無いが、全死神を敵に回し、見事な戦い振りだったと聞く。

「もちろん、一人では手薄です。

彼と親しい朽木ルキアさん、そして阿散井さん。

また、十一番隊から何人が選抜される予定です」

「分かりました。ありがとうございます」

俺が頭を軽く下げると、卯ノ花も会釈し、そのまま俺の横を通り過ぎた。

通り過ぎざまに、その紅色の唇が、微笑んでいるかのように動いた。

「そうそう、総隊長からの伝言をお伝えしなければ」

「何ですか」

「『貴方はいずれ、総隊長になりうる器。そう簡単には死ねないだろう』、と」

「・・・え」

「伝えましたよ」

卯ノ花の微笑む唇に目が行っていたせいか、言葉の理解が遅れた。

「特に今は、死ぬことより、生き残ることが遥かに難しいのです。・・・貴方は、苦勞するでしょうね。」

それでも貴方に期待します、日番谷隊長」

それが、伝言の一部なのか、卯ノ花の生の声だったのかは分からない。

振り返った時には、卯ノ花はもう俺に背を向けていた。

この戦いの、背景。

それはきつと、俺が思うよりもずっと深く、そして暗い。

予感なんて信じるガラじゃない。

それでも、精霊廷に落ちる夕闇は、俺の心にも暗く差し込んだ。

【5】夕闇5 道行

俺は、足早に十番隊舎へと向かっていた。

松本が、速やかに業務を終わらせているなど、空が豚を飛ぶのと同じくらいありえない。

戦時下だろうと、こまごました雑務や騒動は待つてくれない。

今から残務に着手したら、10時は回りそうだな・・・

たたつ、と足を早め、広大な一番隊舎の角を曲がったときだった。

「おい、子供！ここは精霊廷内だ！うろついちゃいかん！」

俺の姿を見咎めたどこかの隊士が、面倒くさそうに声をかけてきた。二人組の男で、酔っ払っているのか足が少しもたついていてる。

「お！おい！」

俺の隊首羽織を見た隣の男が、青くなって声をかけた男の肩をつかんだ。

「た・・・大変申し訳ございません、日番谷隊長！」

二人揃って、慌てふためいた様子で何度も頭を下げる。

怒るのも大人気ねえけど・・・

ただでさえ、虫の居所が良くない。

というか、虫の居所どころの騒ぎじゃない心境だ。

どう言ってやろうかと思案していた時、角の向こうから豪快な笑い声が聞こえてきた。

「霊圧で、ただの子供じゃねえことは分かるだろうに。まあ、怒るなよ冬獅郎」

「児丹坊か。珍しいな、こんなトコに」

そこにいたのは、身の丈十メートルはある、恰幅のいい異常な大男だった。

精霊廷西門の門番を、過去300年にわたって続けている、有名な豪の者だ。

出会ったのは、まだ俺が死神ではなく、流魂街に住んでいたころだ。物心ついたところから捻くれてた俺と、年の割りに純情な田舎青年みたいないつは、妙に馬があった。

俺が死神になり、隊長に昇格してからも、こいつとの付き合いは変わらず続いていた。

「・・・かまわねーから、もう隊舎に戻れ」

「はっ！はい！」

俺たちのやり取りを、目を白黒させて見守っていた男二人を帰し、俺は児丹坊に向き直った。

「慈楼坊の見舞いに来てたんだ」

ああ。それを聞いて、俺は諒解する。

児丹坊には、慈楼坊という弟がひとりいる。

粕村率いる七番隊の、第四席だったはずだ。・・・旅禍の一人、石

田雨竜と戦い敗れるまでは。

霊力の要となる場所を打ち抜かれた慈楼坊が、死神に復帰することは絶望的だった。

・・・俺から見れば慈楼坊は、自分より弱いものにはとことん冷酷になれる、嫌な奴だった。

だから別段思うことは無いが、落ち込んでいる様子の児丹坊を見ているのは辛かった。

「死神に戻れないなら、精霊廷から出してやれよ。その方がいい」

それだけ言っと、俺は児丹坊の横をすり抜けた。

「なんだ？なんか元気ねえな」

俺を見下ろす視線を感じたが、そのまま軽く手を上げて、帰路につ

こうとしたとき。

にゅっ、と児丹坊の巨大な手が、俺に向かって伸びた。

その手の平は、軽く俺の胴体を鷲掴みにするくらいの大きさはある。あっと思っただときには、俺の体は宙に浮いていた。

「お・・・おい、何すんだ！」

「十番隊に帰るんだべ。送っていつてやるさ」

ひよい、と自分の肩に俺を乗せ、児丹坊は横目で俺を見た。

児丹坊の顔と、俺の全身が同じくらいのサイズだ。

「いらねえって」

「たまにやー、俺もお前とゆっくり話してえんだ。ここんトコ、遊びにもこなかったろ」

確かに。旅禍の一件の後には、ろくに休みもとってなかったのだ。

俺は諦めて、意外と強引なこの友人の肩に収まった。

高さにして、10メートル弱。

児丹坊の肩に座って空を眺めると、なんだか空さえも近く見える。ガキだったころは、乗せてくれとよくせがんだもんだった。

いつも粗野な大股で歩くこの男が、今日に限ってはゆっくりと、なるべく揺らさないような足取りだった。

「どーした、冬獅郎。なんかいつもと違うぞ」

こいつは鈍そうな外見には似合わず、妙に鋭いところがあるのだ。

「たいしたことじゃねえよ」

敵と戦って死ねと、命令が下ったとは言えない。

戒厳令が敷かれた現在、副隊長ですらこの情報は知らされないはずだ。

確かに、こんなことが表ざたになれば、皆平静ではいられないだろう。

精霊廷の死神の頂点に立つ隊長でさえ、玉砕覚悟でかななければいけない敵がいるなんて。

死ぬことが、皆怖いからか。

そこまで考えて、バカみたいだと思い直した。

流魂街の住民は皆、現世で一度死んでここにたどり着いている。

一度死んだ人間に死などない。

それでも。やはり怖いとすれば、それは何故だ？存在が失われるからか。

俺は無意識に児丹坊の横顔を見つめていたのだと思う。

「冬獅郎・・・」

俺もやはり死ぬ直前になれば、怖いと思うのだろうか。
人の魂を狩り、支配する死神の癖に。

「冬獅郎！」

突然児丹坊が大声を出した。

「な、何だよ」

「おめ、どうしちゃっただ」

やつの俺の顔くらいある目が、我に返った俺をじっと見つめている。
その目がなんだか悲しそうだ。

「何が」

「さつき俺を見たおめの顔、別人みてえだったぞ・・・なんか、死神みたいだな」

「あ？」

「・・・なんか、ぞっとしたぞ。俺は」

俺たちはつかの間、視線を交わしあった。俺は意識的にため息をつく。

「言つに事欠いて何言ってた。今の俺は死神も死神、護廷十三隊の隊長だぜ」

「そうだったな。死神は嫌えだつて、ガキの頃あんなに言つてたのによ。今や隊長様だ」

ガキのころ、か。

俺は、生まれたての赤ん坊の状態で、ソウル・ソサエティの関門にいたらしい。

ソウル・ソサエティに来たつてことは、現世で何らかの事情で死んだんだろうが、全く覚えてない。

梅ばあちゃんに拾われて、潤林安で暮らすようになってからは鮮明に覚えてるが。

でも・・・どうして、死神があんなに嫌いだったのか、よく覚えてない。

漆黒の衣装。腰に差した刀。異様な気配。歩み寄ってくる・・・
そこまで考えて、俺は考えを断ち切った。

十番隊の巨大な城門まで、あと少しだ。

「・・・児丹坊」

「なんだ？」

「もうちよつとしたら俺、ここを空けるかもしれねえ」

「・・・なんだ。任務か？」

「俺がいない間。流魂街の婆ちゃんと、零。そして、雛森を頼む」
児丹坊は無言で、俺を見た。

訝しく思つてるのがその顔にまともに出てる。

様子がおかしいと思われることなんて判っている。それでも、言っておきたかった。

ぐっ、と児丹坊は唇をかんだ。

「任しとけ！」

ニヤリと笑つて続けた。

城門が見える直前で、俺は児丹坊の肩から滑り降りた。

「・・・な、冬獅郎」

俺を見下ろし、不意に児丹坊が言った。

「あんまり遠くへ行くなよ。オラ、寂しいだろ」

【6】夕闇6 消えた「飛梅」

隊士に迎えられ、俺は十番隊舎の城門をくぐった。

ちょうどその日の最後の夕日の一投が、精霊廷を貫いたところだった。

それを最後に、藍色の空が少しずつ漆黒に染まり、星が瞬き始めた。

あと何回見ることができるか。

ふと湧いてきたそんな感傷を、振り払い、十番隊の門をくぐったその時。

「気持ち悪いです、隊長」

聞きなれた声に顔を向けると、そこには廊下から身を乗り出した松本の姿があつた。

「お帰りなさい」でも「こんばんは」でもなく。いきなり気持ち悪いたあなんだ。

「夕日の中で黄昏れてたじゃないですか。メランコリーな感じで」

「・・・うるせえ」

メランコリーの意味が分からなかったが、たぶんどうでもいい意味だ。

俺は会話を放棄した。

「雛森、来てますよ。いつものじゃないですか」

くいつ、と松本は指で十番隊の修練場を指した。

「しょうがねえな」

俺はため息をつき、そちらに視線を向けた。

まあ、さんざんストレスが溜まつてるから、発散するにはいいかもしれないが。

「・・・総隊長に言われたんじゃないですか？雛森とは距離をあけ

ろって」

声を低めた松本の声に、俺は少し驚いて顔を見返した。やつには珍しく、憂いがこもった表情をしている。

「お前まで、んなこと言うのか？ 今ほうつておいたら、雛森はどうなる」

やや慚然として、俺は松本に言い返した。

雛森が、どれほど頼りない状態か、松本が知らないわけないだろうに。

しばらく黙っていた松本は、躊躇いがちに口を開いた。

「・・・それは分かってます。でもあたしは、総隊長が正しいと思います」

「・・・松本」

「そうしないと、隊長はいつか必ず・・・」
ガシッ、と華奢な指に肩をつかまれる。

至近距離で目が合い、俺たちは互いの考えを探るような視線を向けた。

「や・・・」

沈黙の後、初めに声をあげたのは松本だった。

「やーだ、隊長。冗談ですよ。あんまり二人の仲がいいから、嫉妬してただけです」

パツ、と手を離して、松本はいつもどおりの笑顔を見せた。

「嫉妬って、お前な」

「分かってますよ。隊長と雛森は、幼馴染ですもんね。力になってあげてください」

それだけじゃないことは分かってたが、俺は敢えて突っ込まなかった。

そして。

松本の真意を理解したのは、ずっと後になってから・・・すでに、

手遅れになった後だった。

「ええい！」

木刀が激しい音を立てて交差する。

雛森は、ふわり、と宙を舞って、俺の背後の地面に着地した。肩越しに振り返ると、腕を組んで修練場の壁にもたれかかっている松本が見えた。

「破道の三十三、蒼火墜！」

凜とした声が響いた。その前にかざした両手の平から、蒼い炎がはき出される直前。

俺は身を翻らせると同時に一足飛びで雛森の懷に飛び込んだ。

「ひゃっ？」

「氷雨！」

叫ぶと同時に、体の前に右手を突き出す。

途端に、雛森の両手から迸った青い炎が、一気に凍りだす。その手の平が氷に覆われる直前、

「きよ・・・鏡門！」

雛森は飛び下がりながら結界を張り、逃れた。

「つめた・・・」

雛森が呟いて、腕まで走った氷を払い落とす。

「ちよつとお、雛森？」

松本の気が抜けた大声が修練場に響いた。

「そろそろ寒いんだけど！」

雛森の得意技は炎熱系、そして俺は氷雪系。しかし修練場内は、いまや氷原と化していた。

たしかに俺は隊長で、雛森は副隊長だ。

しかし、この実力の違いは、階級差だけから来るもんじゃない。

「やっぱり。日番谷くんはすごいね・・・力も強いけど、戦い方に迷いが無い」

そう笑いながらも、その顔色は悪い。

俺は、たった二ヶ月前、雛森が藍染に胸を貫かれたことを、思い出さないわけにはいかなかった。

「病み上がりなんだから、この辺にしとけ」

「ま・・・まだ大丈夫！」

「焦るなって」

俺の言葉に、雛森は唇をかんだ。

焦る。

それは、しょうがないだろうと俺も思う。

雛森の斬魂刀「飛梅」は、雛森が重傷を負い倒れたとき、浅打へと姿を変えた。

そして随分体が回復した今も、飛梅が再び現れることはなかった。自分の斬魂刀を持たない席官なんていない。

このままでは、休職している副隊長職への復帰も不可能だった。

俺が見る限り、霊圧が下がってるわけじゃねえ。

ただ、以前とは比べ物にならねえくらい弱くなってる。

力を弱めた理由。飛梅が失われた理由。それはこいつだけが知らない。

「わから・・・ないの」

雛森は、脇に下ろした木刀を見つめながら呟いた。

「どうやって飛梅を呼び出したのか。どうやって戦ってたのか。もう、思い出せないの・・・」

唇を噛んだ雛森にかけ言葉を探していたとき。

雛森の背後から忍び寄った松本が、しー、と俺を見て口元に手を当てた。

そして、こっそりと死覇装の襟から、背中に氷のカケラを落とすのが見えた。

途端に雛森が飛び上がる。

「ひゃあうっ！冷た！乱菊さん、何・・・」

「そういう時はね、足掻いたってムダよ！うまいモン食って寝るしかない！

隊長が奢ってくれるって」

「奢るいわれはねーが、俺も腹減った」

松本に木刀を取り上げられ、俺が肩をまわしたときだった。その場にふつと現れた気配に、俺はそちらに視線を向けた。

- - - - -

ちょこつと補足。

浅打：斬魂刀になる前の、ただの刀。死神初心者が持つ。

【7】夕闇7 出立

「・・・日番谷隊長。総隊長から伝言があります」

見下ろすと、そこには伝令が片膝をついていた。

雛森の分と合わせて木刀を仕舞いに行こうとしていた松本が足を止める。

「例の、現世への先遣隊の件。

日番谷隊長に指揮を執るよう、お伝えするようにと。出立は明朝です」

「判った。お受けすると総隊長に伝えてくれ」

「かしこまりました」

来た時と同じ俊敏な動作で、伝令がその場から消えた。

消えたのを確認して・・・俺は怒鳴った。

「松本お！」

「へっ？何であたし・・・？」

「それはこっちのセリフだ！なんで俺なんだ！」

「ちよつと・・・いくら面倒な仕事だからって、八つ当たりは子供っぽいですよ、たいちょ・・・」

「いや。更木、朽木からメンバーを選ぶって言うてたのに、何で指揮が俺に来るんだ？

絶対お前が余計な絡み方してるに違いねえ」

「嫌だなあ、疑り深い！あたしがそんな・・・」

俺がそういったとき。ひらり、と地獄蝶がその場を舞った。

「おい、松本。

さっき話した先遣隊の件、指揮が日番谷隊長、お前も同行に決まったそうだぜ。よかったな」

地獄蝶から聞こえたのは、斑目の声。そのままひらりと飛び去った。

残されたのは、俺と松本の気まづい視線。

「オイ、松本。舌打ちすんな。してーのは俺のほうだ」

「いやっ、違いますよ。精霊廷を悩ましてる藍染隊長たちの目的をですね・・・」

そこまで言った松本の口を、俺はバンツ、と掌でふさいだ。そして手を放して、後ろを振り返った。

「藍染、隊長・・・？」

雛森が俺たちを見つめていた。

瞬きを忘れたかのような大きな瞳に、俺達は何も言えなくなる。

「藍染隊長・・・現世にいるの？」

「・・・雛森」

「藍染隊長に会っても・・・戦わないよね？まだ、裏切ったとは限らないし・・・」

空気が凍りつくつてのは、こういう感覚なんじゃないかと思う。

「雛森、聞け・・・」

俺はこう続けるつもりだった。

藍染はもう、ソウル・ソサエティの敵でしかないと。戦うしかないんだと。

でも、コイツの目の下に浮かんだ隈を見ると、それがどれだけ残酷な言葉かというのが判ってしまう。

「・・・死神として、ソウル・ソサエティを護る。それが俺の役割だ」

喉もとまででかかった言葉は、別の言葉に刷りかえられた。

「うん、そうだ・・・ね」

雛森は、俺を見てたが、その目は俺を見てねえ。
修練場の隅の、闇がわかだまつてるほうを見てた。

「苦しいよ、日番谷くん・・・」

そのか細い声に、返してやれる言葉なんかねえ。
すみません。

松本のかすかな声が、俺の横を通り抜けるときに聞こえた。
そのまま松本は無言で雛森に歩み寄ると、ぼん、とその頭に掌を置いた。

いつも笑ってた女たちに、こんな顔をさせているのは、あの男。
普段隠してるはずの傷跡を見るたび、俺はやりきれなくなるんだ。

明朝。俺は、氷輪丸を背に、長い廊下を歩いていた。

背後には、影のように付き従う松本の姿。

流魂街に戻って、婆ちゃんと零の顔を見ていこうか、と思ったが、
結局やめておいた。

いくら会ったところで、悔いが無い状態なんて、作れるはずが無い。

一番隊の隊首室には、すでに他のメンバーが勢ぞろいしていた。

綾瀬川弓親、斑目一角、阿散井恋次、朽木ルキア。

俺が通されると同時に、皆深く頭を下げる。

「・・・来たな。日番谷隊長」

その一番奥に、山本総隊長の姿があった。

現世への出立に、総隊長が立ち会うなど前代未聞だ。
この任務が特別なものだと感じ取っているんだろう、他の5人の表情も緊張している。

俺の脳裏に浮かんだのは、婆ちゃんの小さな姿。

きつと今頃、潤林安の小さな家の土間に立ち、朝食を作っているだろう。

その立ち姿は、目に見えるように浮かんだ。

そして、顔いっぱい微笑む、漣の姿。

例え敵がどれほど強かろうが、あの笑顔を消させはしない。

「・・・おぬしに任せたぞ。日番谷隊長」

「はい。お任せください」

迷いは、ない。力も、充実している。

俺を見据えた総隊長が、満足げに頷いた。

そして俺は先陣を切り、穿界門の中に、足を踏み入れた。

【8】アランカル・デイ1 浦原商店にて

あ、日番谷隊長ですか？イライラされてましたねえ・・・
そりゃあもうイライラしますよ、あれではねえ・・・

まあアタシ、イライラしたことないから分らないツスけど。

浦原喜助は、怪しげな帽子の鍔の奥で、怪しげな笑みを浮かべた。

「ねーねー隊長！これ見てください、これ！」

松本サンは、ショーウィンドウの向こうを指して、日番谷隊長を手招きしてます。

しかし、ショーウィンドウの中にあるのは、やたらピラピラやフリフリがついたスケスケな下着。

日番谷隊長は、慣れてるのか予想がついてるのか見向きもしません。
「す、すごい・・・牛井にクリームシチューがかかっている・・・」

牛井屋の前で目を輝かせているのは朽木サン。

大貴族の令嬢なのに、お気の毒ですねエ・・・

「お、おい！刀があるぞ、刀が！」

髪一本ない頭をキラリと陽光に輝かせてるのは斑目サン、

「馬鹿だねえ一角、普通の刀が売ってるわけないじゃない。これ刃入れしてないよ」

美形だけど、パツン髪がそれを台無しにしているのが綾瀬川サン。
その隣の店で、ひたすらゴーグルを試着しているのが阿散井サン。
現世に来た本来の目的を、皆忘れてしまっているようですな。

「お前ら・・・」

精霊廷一、常識というものを持っている可哀想な隊長少年は、プル

ブル拳を震わせてます。

言葉を続けようとして、ふ、と視線を店の中にそらせました。中にはテレビ番組が映っているのか、ここからもチラチラと光が点滅してるのだけが見えます。

しっかり聞こえましたよ眩きが。

「ガ ダム・・・」

現世の商店街、おそるべし、です。

ドスッ

その浦原の尻を、黒崎一護が蹴飛ばした。

「てめー、実況してねーで話しかけるよ！いつまでたってもハナシが進まねーだろ！」

・・・なんなんだ、この微妙な沈黙は・・・

筋肉エプロン男・テッサイが、ちゃぶ台の周りにずらりと並んだ死神の前に、茶を置いておく。

トン、というその音がやたら大きく聞こえるくらい、死神たちは無言だった。

それにしても・・・俺は死神たちをひとりひとり、見渡す。

ブルーのワンピース姿のルキアは、まあ見慣れてるから良しとしよう。

ジーンズと派手なＴシャツ、デコに剃り込みの上刺青を入れた恋次。服の意味を疑うほど、胸と脚が出たシャツに、ミニスカート姿の乱菊さん。

銀髪にロックな黒Ｔシャツ、膝の破れたジーンズだが、身長だけは小学生な冬獅郎。

開襟シャツをズボンにＩＮした、６０年代の不良のような一角。七色に前髪を染め、なぜかネクタイ姿の弓親。

確かに死神には見えねえ。
でも、だからって普通のヒトにも見えねえ。

あぁっ、寝てやがる！

一番雑談を振りやすいヤツを、と思って見た乱菊さんは、見事にきつちりと正座しつつ居眠りしていた。隣には、馬鹿でかい買い物袋の数々。死神も買い物すると疲れんのか。

「黒崎サン」

浦原さんが俺を見る。

「なんか話してください。フリフリ下着でもホワイトシチュー牛丼でも刀でもゴーグルでも、はたまたガンダ でもないお話を」

「・・・ガンム？」

恋次と一角が同時に言った。

「ここに来た理由はそんなじゃねえ！」

眉間にシワ寄せて話をさえぎったのは冬獅郎だった。おーおー、そうだろうよ。

なんにしろ、話し始めてくれて助かった。

「崩玉のことツスよね。もちろん何でも提供しますよ、情報。」

黒崎サンにも経緯は話してありますから、どんどん言っちゃってください」

「聞きたいのは二つ。一つ目は、破面どもが、ソウル・ソサエティを襲撃する方法だ」

「え？方法って・・・」

俺は、急に仕事を始めた冬獅郎の顔を、改めて見た。

「お前も知ってんだろ。破面は、元は成仏できない、悪しき魂のこただ。」

死神が魂を浄化して、ソウル・ソサエティに導かない限りはな。

つまり、破面は独力ではソウル・ソサエティに入ることまでできねえ」

それも、そうだ。俺は妙に感心して、他の死神たちの顔を見渡した。俺と同じ顔・・・つまり「それだ！」って表情だ。

・・・絶対、こいつらも気付いてなかったな。

「当然、藍染はそれを見越して、襲撃方法を考えてるはずだ。

藍染が盗み出した崩玉に、それを可能にする力はあるのか？

もし力が無いとしたら、破面が空座町に現れる理由は、空座町にその『力』が隠されてるってことか？」

ぶっ、と浦原サンは笑った。ただ、帽子の鍔の奥の目が笑ってねえ。

「まるで、答えを見越したみたいな質問ですね」

「推測だったけどな。ここに來て確信した」

乱菊さんはいつの間にか目を覚ましてる。他の奴らの目も、一気に緊張感をはらんだ。

「井上織姫の霊圧を、何で消した？浦原喜助」

「なっ・・・」

俺は思わず、ちゃぶ台に手をついたまま上半身を起こした。

【9】アランカル・デイ2 藍染の企て

「何で井上が出てくんだよ！冬獅郎！浦原さん！」

二人は、目を見交わしたまま何も言わねえ。

でもそれは、もう分かってる、っていう者同士の沈黙で。

それが俺を苛立たせた。

「どういうことですか、日番谷隊長・・・話していただけますか」
ルキアもこの話の展開はついて聞けなかったらしく、二人の顔を見比べている。

「いい読みですね、日番谷隊長。カンもいいようだ。

質問の答えからいきましよう。知りたがってる人もいることだし」
ちらり、と浦原さんは俺とルキアを見た。

「一つ目の質問は、簡単です。

崩玉には、破面をソウル・ソサエティに侵入させるようなチカラはありません。

作ったアタシが言うんだ、それは間違いない」

「じゃあ・・・」

「ええ。だから藍染は、破面をソウル・ソサエティに侵入させる手段を講ずる必要がある。

空座町に破面がやってくるなら、そこにそのチカラがあると睨まれてるって考えるのが自然です」

「それで、井上、なのか？なんで・・・」

ふむ、と浦原さんはうなった。

「アナタも含め、石田さん、茶渡サン、井上サンは皆、どこかこれまでの型に嵌らない力を持つてる。

でも・・・その中で一番『異常』なのは、井上サンなんですよ」

「い、異常って・・・井上は、ただ傷を治す力を・・・」

「違いますね」

浦原さんは、ルキアの言葉をさえぎって続けた。

「異常も異常、神の創った理をひっくり返すような力です。

力の本質は治癒能力じゃない。起きたことを無かったことに戻す『事象の拒絶』です。

治癒しているというよりも、傷を負う前の状態に戻してるんですよ、彼女は」

「傷を治すことと、破面を精霊廷に突入させることは違うでしょ・・・」

乱菊さんが視線を宙に泳がせて言った。

恋次もぜんぜん分かってねえらしく、考えもしてねー顔してる。

「いや、待てよ・・・」

何でも拒絶できるとすれば、例えばソウル・ソサエティと虚圏を隔てている、断界はどうなる？

これも拒絶できるとすると・・・」

弓親が親指の爪を無意識に噛みながら言った。

それに、浦原さんは即答しない。ただ、ニヤリと笑った。

「事実かは分かりません。しかし、おそらく藍染はできると思っている。

消去法で言っても、他にそれができそうな人物はいないんですよ。

そこでアタシは、井上サンの周りに結界を張った。

本業の死神サンでさえ霊圧が読み取れなくなるような奴をね」

「冗談じゃねえよ！それじゃ、井上はいつ襲われるか判らねえってことじゃねえか！

なのに、何で結界だけ張って放つとくんだよ！」

「結界の中にいる限り、常人と見分けはつかねえ。

それなら下手に警備するより、ほっといたほうが無難。
特にソウル・ソサエティに出入りできない浦原喜助なら、それ以外のことはできねえよ」

冬獅郎の冷静な言葉に、うつ・・・と俺は言葉に詰まる。

確かに、俺は霊圧を消すのはかなり下手なほうだ。

「しかし、いつまでもごまかせねえだろう、そんなんじゃ」

耳に指を突っ込みながら、一角が言った。

「それを食い止めるには、ソウル・ソサエティに連れてゆく、しかない・・・」

ルキアはそういったが、その声は沈んでた。

「・・・それしかねえのか」

一番返事がほしいところで、返事をしてくれるやつは誰もいなかった。

確かにこの状況じゃ、破面が入ってこれねえソウル・ソサエティしか、井上が安全な所はねえのかもしれないねえ。

けど、井上だって普通の高校生なんだ。

学校だってあるし、好きな友達も店もこっちにある。

それを断ち切って、いつまでもとれない期間、ソウル・ソサエティに行かせるのか。

その間、きつと井上の記憶は、全ての周囲の人間から拭い去られてしまっただろう。

そして俺は、そんな井上を横目で見ながら、現世で暮らすんだろうか。

そんなことは・・・井上なら耐えられるかもしれないねえが、俺の方が耐えられねえ。

「織姫は・・・？このこと、知ってるの？」

乱菊さんの問いに、浦原さんは首を振る。

「じゃあ、とりあえず知らせなきゃ。身の振り方は自分で考えるわよ。」

あの子、ああ見えて強いわよ」

そういつて、乱菊さんは立ち上がった。

「そろそろ行ってもしょうがねえ。」

松本、朽木、一緒に井上織姫のところに来てくれ。

他の奴らはこの地域の警備にあたれ。いづどこに出てもおかしくねえぞ。

俺は後で行く、先に行け！」

「はっ！」

たるんだように見えてもそこは上下関係がはっきりしてるんだろうか。

一斉に死神達が立ち上がった。

そして、次々と姿を消した。

「なにか情報があつたらお知らせしましょう」

浦原さんは、俺と冬獅郎を見てそういつた。俺たちはチラと顔を見合わせ、頷く。

「・・・アンタの意見が聞きたい。今の精霊廷と藍染の力、どう見てる？」

「・・・五分五分、ですかね。」

藍染側も力をつけてきてるが、アナタ達も黙っちゃいけないでしょ？」

「それじゃ、いい勝負になるってことか！」

「悠長なこと言ってるな」

冬獅郎が、俺をその翡翠の目でにらみつけた。

「殺し合いになるって、言ってたんだよ。10人殺せば、こっちも10人殺されてるくらいいな」

殺す。殺される・・・

ルキアを護るため、精霊廷に乗り込んだとき、俺の周りで死人は一人も出なかった。

俺は、本当の意味で、殺し合いをしたことはないんだ。

冷静に言い放つ冬獅郎を見て、俺は自分との違いを思い知った。

「ただし、藍染が、破面の最強形態、ヴァストローデを創りださなければの話ですよ。

もしもそれが可能になってしまえば、日番谷サン・・・覚悟が必要だ」

「一気に均衡が崩れる、か」

脅すような視線を向けた浦原サンを、冬獅郎はサラリと受け流した。でもそれは、自信があるっていうよりも、むしろ・・・

「手は打ってある」

冬獅郎はそれだけ言い残すと、その場から瞬歩で姿を消した。

【10】アランカル・デイ3 織姫の決断

歩きなれた道。聞きなれた喧騒。

この道を、いつか精霊廷の死神に掴まるのでは、と常に恐れながら歩いてきた日々を思い出した。

重く、しかし心弾むようでもあった、あの日々。

それはまるで、厚い雲の下で咲く淡い桜のようであったと、私は今になると思う。

こんな風に精霊廷の上官の道案内をして、逆に追われる立場になった井上を訪れる日がくるとは思わなかった。

その時、道の向こうから歩いてきた人影に、私の足が一瞬止まりそうになる。

「どうしたの、朽木？」

後ろから歩いてきた松本副隊長が、私の背中に声をかける。

「いいえ。何でもありません」

私は笑顔を作って振り返った。

その横を、笑いさざめきながら、少女二人が行き過ぎる。

ベージュのプリーツスカート。赤いネクタイに、白いブラウス姿。

空座高校の制服だった。

長い黒髪の細身の少女と、茶色の短めの髪、背の低い少女。

二人とも、井上の同級生。

かつて、私がこの高校で生徒を装っていたときのクラスメートでもある。

私がソウル・ソサエティに帰った時点で、彼女らから私の記憶は削除されている。

まるでビリヤードの玉のように。

一瞬交差した私たちは、すぐに逆方向へと跳ね飛ばされた。
その、距離の遠さを、ふと思った。

「あー！ー！」

その時通り中に響き渡った能天気な声に、私達のはじけるように顔を上げた。

おそらくベランダから友人たちを見守っていたのであろう井上が、大きく私たちに手を振っていた。

「待ってて！」

そう言うが早いか、ベランダから部屋に入ろうとして背中を向け・
・不意にその姿が消えた。

「いったーい・・・」

小さな声が聞こえてくる。

おそらくベランダのサッシに躓いて転んだのだろう。

変わらぬな。私は思わず、微笑んでいた。

「くっちきさーん！冬獅郎くん！乱菊さーん！」

ほどなく、額の一部分を赤く腫らせた井上がマンションから飛び出してきた。

「織姫！」

松本副隊長が私の横から飛び出し、井上に抱きつこうとして・・・
手が回るより先に、互いの巨大すぎる胸がむぎゅ、とぶつかつた。
そのまま、ばついいいん、と妙な音を立てて互いが跳ね返る。

「・・・互角か」

日番谷隊長の、妙に覚めた声が聞こえた。

一瞬置いて、私はプツと噴出す。

「笑わなくなつていいでしょ、朽木さーん！」

「そうよ。確かに朽木には珍しい光景かもしれないけど」

「ほっ・・・放っておいてください！」

私は思わず、自分の胸の前に手をやって隠した。

「そんなことより・・・どうしたの、3人とも。現世に用があるの？」

井上は、ふと我に返ったように私たち3人を見比べた。

「あるんだよ。現世というより、目下の所、お前にだ」

「あ！あたし？何かしましたか？」

「・・・イヤ」

そこで日番谷隊長は、言葉を濁した。

兄様なら、ここでその身が狙われている経緯を淡々と語るところだろう。

私は、それをしない日番谷隊長に、少し親近感を感じた。

「あ、あたし・・・が」

井上は、私の話が終わった後、怖がるというよりも、ただ呆然としているようだった。

「断界って、現世とソウル・ソサエティの間にあるのと同じものだよね

・・・あたし、それに飲み込まれそうになったことはあるけど、拒絶できるなんて、考えたことなかった」

そういつて、テーブルの上のコップを握る手を見下ろした。

できる限り、浦原からの情報を包み隠さず、そのまま伝えたつもりだ。

私が捕えられた時、命がけで精霊廷に乗り込んでくれた井上に對し、隠し事は不要だと思った。

「織姫。あたし達は、あんたの意志を尊重したい。

現世に残るのか、それともソウル・ソサエティに避難するか。

今すぐ選べとはいえないけど、正直時間はあまりないわ」
松本副隊長が、真剣な目で井上の顔を見つめた。井上はコクリと頷く。

しかし、まだ頭が事態についていけないのだろう。無理も無い、と私は思う。

日番谷隊長は、後ろにあるソファーに凭れ掛かり、話が始まってからは無言で目を閉じていた。

しかし、おそらく会話や、町全体の気配に耳を澄ませている。

「いいえ。大丈夫、です」

井上は、伏せていた顔を上げた。

その表情は、短時間の間に、凜と張り詰めたものに変わっていた。

「あたし、ソウル・ソサエティに行きます」

あたしが現世に留まる限り破面はここにやってくるし、あたしが見つかれば、きっと黒崎くんや死神さんたちと戦いになる。

それに、もしも藍染・・・さんの狙い通りあたしにその力があるなら、とんでもないことが起こってしまう」

「井上、お前・・・」

「あたしは大丈夫」

大丈夫、じゃないだろう。

いつ戻ってこれるかも判らないのだぞ。

お前はこれまで生きてきた全てを、犠牲にしなければならないかもしれないのだぞ。

その時、日番谷隊長が突然顔を上げた。

「隊長？」

「少し考える猶予ができたようだ。・・・破面だ」

私はそれを聞くなり、伝令神機を懷から取り出した。

画面を見ると、同時に10箇所近い場所が点滅している。

「朽木。限定解除の申請は出してるな」

「あ、はい！浦原商店を出るときに、連絡しておきました」

「限定解除の状態で戦いたくはねーが、しょうがねえ。」

阿散井に連絡して、こっちに來させる。

見た所限定解除状態の俺らより、破面の方が力は上だ。連携しねえとやられる」

「斑目第三席、綾瀬川第五席はいかがしましょう？」

「あいつらはいいわ、タイマンが男の美学とか言うバカだから」

にべもなく松本副隊長が言い放った。

「で、でも・・・」

「あいつらはいいい」

日番谷隊長は、短く言って立ち上がった。

「今靈圧を解放するな。ここを離れるぞ」

「はい！」

「冬獅郎くん！あたしも・・・」

「來れるはずねえだろ！」

日番谷隊長が、膝立ちになった井上を一喝した。

「大丈夫よ、織姫。すぐ戻るから」

松本副隊長が織姫の頭をぽん、と叩く。

そして私たちは、不安げに見守る井上の視線を感じながら、ドアから外へと飛び出した。

【11】アランカル・デイ4 顔合わせ

死覇装をなびかせ、屋根から屋根へと跳躍する。

こちらの霊圧に気付いたのだらう、現れた中の4体が、こちらに近づいてくるのが判った。

どくん、と胸が高鳴る。

背筋の毛が一斉にゾワリと立ち上がるような、そんな悪寒が走る。

すう、と息を吸い込んだ。そして、目をつぶったままゆっくりと吐く。

だん、と屋根を蹴る足に力が戻った。

・・・もう、大丈夫だ。

「日番谷隊長！」

恋次が日番谷隊長の隣に並び、そこで隊長は脚を止めた。

私たちもその場に停止する。

「来るぞ」

日番谷隊長は、無造作に言った。

「六杖光牢を唱えろ。松本、朽木」

「はい！」

それなら私の得意技だ。

日番谷隊長も、それを知っていたのかもしれない。

私は松本副隊長と共に、「力ある言葉」を口にした。

もう少しで詠唱が終わる、まさにその時。

「見つけたぜ、死神！」

私たちの上に黒い影が差した。

なんだ、こいつらは？

初めにその姿を見たときに、心を走ったのは動揺だった。

もとは虚だった、というにはあまりにも・・・彼らの姿は、ヒトに

酷似していたからである。

これでは、まるで死神だ・・・

腰のあたりまである、長く白い上着に、白い袴に似たものを身につけている。

そして腰には、日本刀を差していた。

藍染の影響があるのかもしれないが、その姿は、白い死神のようだった。

しかし、感じる気配は、段違いに強いとは言え、間違いなく虚と同じもの。

私は動揺を抑え、自分たちの前に立った4体をにらみつけた。

中央にいるリーダー格は、長身痩躯で酷薄な小さな目、分厚い唇の男。

長い三つ編みを後ろに垂らしている。

その隣には、長い金髪に碧眼の、松本副隊長に似た色彩の男。爬虫類を思わせる金色の目をした白髪の男。

この男は、口から覗く歯が全てとがっており、どことなく虚のようだ。

そして一番隅にいるのが、黒髪で巨体の、恰幅の良い男だ。

リーダー格の男が、一步我々の方に進み出た。

「私の名は破面NO・11、シャウロン・クーファンと申します。

そちらのリーダー格は・・・羽織をまとった貴方ですか」

「日番谷冬獅郎。十番隊隊長だ」

日番谷隊長が、一歩進みでてそう言った。

さすがに場慣れしているのか、普段と全く声音も態度も変わらない。

「NO・11っていうのは何だ？破面にはNOがあるのか？」

続けて発せられたのは、素朴なと言っていい疑問。

NO・11というときに、少しだけイヤそうな顔をした。

「嫌いですかな、11という数字は」

「いけ好かねえ数字だ」

当然私たちは、十一番隊隊長の顔を思い浮かべずにはいられなかった。

「それは残念。ちなみに11番以降は、ただの生まれた順番ですよ」

「・・・朽木、恋次」

会話に隠れるような小声で、松本副隊長が私たちに声をかけた。

「しゃべってるアイツが一番強い。」

順番に、金髪、太ったやつ、かなり離れて白髪」

その蒼い瞳で、冷静に全員を見渡しながら言った。

「あ、はい！」

日番谷隊長がしゃべっている間に、全員の霊圧を見極めていたのか・

・

「そんな目的でもなければ、あの隊長が敵と雑談しないわよ。味方でもしゃべってくれないのに」

「・・・そこ、うるせーぞ」

声が聞こえたのか、チラ、と日番谷隊長が振り返る。

その時、松本副隊長は、かすかにうなずいた。

日番谷隊長も軽くうなずき、視線を前方に戻した。

シャウロンと名乗った破面は、まだ話し続けている。

「ただし。十番以下は、単なる生まれた順ではなく、力量順。
エスパーダ十刃と呼ばれるのがそれです。」

まあ、貴方たちが十刃と戦うことはないでしょうがね」

シャウロンの霊圧が、しゃべっている間に、どんどん高まってゆく。

日番谷隊長が、組んでいた腕を解いた。

「あなた方の、その貧弱な霊圧では、ね。今私たちが殺して差し上

げる！」

腰にした刃を破面たちは一斉に抜き放った。

そして、金髪の男が日番谷隊長に向かい、一足飛びに斬りつけた！

【12】アランカル・デイ5 連携攻撃

「朽木っ！」

松本副隊長が一步前に出る。

「破道の六十三！六杖光牢！！」

差し出した私たちの手の平が、発光する。

それと同時に空中に現れた十二本の光の柱が、金髪の破面の胴体に食い込み、押さえつけた。

日番谷隊長に向かって斬りつけた刃が、その額にかかった銀髪に触れるか触れないかのところで、止まった。

「こ、こいつら！」

金髪の破面は、身をよじって逃れようとする。

その力に、私たちの額から一気に汗が噴出した。

特に、松本副隊長たち副隊長以上の力は、限定により通常の20%に抑えられているはずだ。

「甘いぜ」

間髪いれず、日番谷隊長が肩に担いだ斬魂刀、氷輪丸を引き抜いた。その刃が、動きを封じられた金髪の破面を貫こうとしたとき・・・

「甘いのはそちらです」

シャウロンの手にした斬魂刀が、突然二本に分離して、巨大化したのに私たちは息を飲んだ。

「ちっ！」

日番谷隊長の振り下ろした刀と、シャウロンの刀がぶつかり合い、火花を散らす。

「もらった」

そのときには、シャウロンのもう一本の刃が、日番谷隊長の胸に迫

っていた。

「阿散井！」

私が驚いたことに、日番谷隊長はその瞬間、目を逸らして、背後の恋次を見た。

そして、刃が自分を貫く寸前、瞬歩でその姿がフツと消えた。

「逃れたか」

そのシャウロンの独白と、

「吼えろ、蛇尾丸！！」

恋次の始解の叫びが重なった。

姿を見失った日番谷隊長に、破面たちは明らかに気を取られていた。そのため、恋次の攻撃に気がつくのが一瞬だが、遅れた。

「イールフオルト！戒めを解け！」

シャウロンが、六杖光牢で押さえつけられた金髪の破面に怒鳴る。その頃には、恋次の蛇尾丸が、巨大な大蛇に姿を変え、イールフオルトと呼ばれた男に迫っていた。

「舐めるな！」

イールフオルトが齒を食いしぼり、拘束する力を跳ね飛ばそうと、霊圧を高めた。

「くっ！」

とんでもない圧力が、六杖光牢を放つ私の腕を襲った。

ここで逃げられたら終わりだ！

あと、数秒。蛇尾丸がイールフオルトを貫くまでの間、持たせなければ。

そう思った直後、太った破面が大蛇の真上に現れた。

「ナキーム！」

イールフオルトが、その姿を見て叫ぶ。

そのときには、ナキームの刃が、蛇尾丸の頭を狙って振り下ろされていた。

激しい音と共に、蛇尾丸の首の辺りが崩れ落ちる。

「ふっ、やはり弱・・・」

ナキームが、途中で言葉を途切らせた。

「舐めるな、は。こっちの台詞だ」

砕け落ちた蛇尾丸の真下で、日番谷隊長がスラリと氷輪丸を抜き放った。

「こいつ・・・！」

叫び、そのまま空中を落下しながら刃を振り下ろしたナキームと、跳躍し氷輪丸を振りかぶった日番谷隊長の体が、空中で交錯した。

ガキン！

鋭い金属音を残し、すれ違う。

その直後、血を吹いて倒れたのは、ナキームの方だった。

「まず一体」

刃に絡みついた血を一振りで払い、隊長は落下していくナキームを、感情の無い瞳で見下ろした。

強い・・・！

本来の力を80%もそぎ落とされているにも関わらず、圧倒的なその剣技に、私は一瞬見とれたほどだった。

「貴様・・・」

イルフォルトがギリ、と歯を食いしばる。

そして、爆発的に霊圧が高まったその瞬間

彼を拘束した十二本の光の柱のうち、半分ほどがなぎ払われた。

「恋次！遅いぞ！」

「判つてゐる！」

首を碎かれたはずの蛇尾丸の目が、再びギラリと輝いた。
至近距離から、イールフオルトの胸へ喰らいつく。

「ぐおおお・・・」

歯を食いしばり、なお抵抗しようとしたイールフオルトの眼前を、
灰のような白い粉がキラキラと舞った。

「唸れ、灰猫！」

一瞬、蛇尾丸の口に噛み付かれたイールフオルトの体が、灰に覆わ
れたように見えた。

そして、瞬きするほどの間に、その体が、凍りついたように動きを
止めた。

「・・・砂？」

シャウロンが怪訝そうに眉をしかめた。

風が吹いた直後、イールフオルトの全身がまるで砂のように崩れ、
蛇尾丸の口から零れ落ちたからだ。

「二体目・・・」

私たちはスツと日番谷隊長の元へ弾く。

そして一斉に斬魂刀を構え、残り2体の破面と対峙した。

【13】アランカル・デイ6 限定解除

「油断するからだ、バカどもが・・・」

シャウロンが、私たちを見て憎憎しげにつぶやいた。

「悲しまないのね。仲間が殺されたのに」

松本副隊長が、抜き身の灰猫を手に、日番谷隊長の後ろにピタリとついて言った。

「死神風情に敗北する、愚か者など知らぬ」

「・・・だから敗けるのよ、アンタ達はね」

今倒したのは、敵のNO.2とNO.3。

シャウロンがどれほど強いかは未知数だが、白髪の破面の力は、見る限りたいしたことはなさそうだ。

この戦いの勝利を、私が八割がた確信したとき・・・ニヤリ、とシヤウロンが笑った。

「勝利宣言にはまだ早いですよ、死神」

「馬鹿でかい霊圧がひとつ・・・」

日番谷隊長が、ぼつり、とそう呟いた。

私たちは構えた姿勢を崩さないまま、その霊圧を探る。

いつの間に現れたのか、私たちからは数キロ離れた上空に、その破面はただ立って様子を探っているように見えた。

霊圧は、私の見立てでも、ざっとここにいる他の破面の数倍はある。

「どこに行くかしらね・・・」

松本副隊長が呟く。

ここより南には、斑目三席と綾瀬川五席の霊圧。

そして、北には・・・こちらへ急行してくるよく知った霊圧が、ひ

とつ。

これは一護に違いない。

巨大な霊圧を持つ破面の霊圧が、突如暴発するかのように高まる。そして、北に向けて高速で移動したのがわかった。

それにすぐ気がついたのだろう。一護の霊圧がその場でストップする。

「一護・・・！」

私は思わず、そちらに視線を向ける。

まさか、1人で相手しようというのか？

あんな霊圧の破面と一護がぶつかれば、一護に勝ち目は無い！

その時。

ぞわり、と背筋に悪寒が走った。

「気がそれたな！！」

肩越しに、シャウロンが、私に向かって刀を突きつけるのが見えた。当然、刀など届かない距離。

しかし、刀の切っ先の50センチほど先で、光の球が急速に膨らんだ。

まずい・・・

「虚閃！！」

わずか10メートルも距離は無かっただろう。

光が見えただけで、かわすどころか目に留めることもできぬ。

「ルキ・・・！」

恋次の悲鳴のような声が聞こえた。

その刹那、私は黒い影が光の前に割って入るのを見た。

「ぐっ・・・」

鮮血が、私の頬に飛んだ。

「ひっ・・・がや、隊長」

日番谷隊長が、こちらに体を向け、後ろ手に構えた刀で背中の一撃を受け止め、空中で静止していた。
しかし、このような至近距離で、しかも力を抑えられた状態で、受け止められるはずが無い一撃だった。
ビリビリ空気が震え、背中に担いでいた斬魂刀の鞘が粉々に砕け散るのを、私は見た。

「隊長っ！」

松本副隊長が駆けつけようとする。

ぐらり、と日番谷隊長の体が前に倒れた。

私は、落ちてくる日番谷隊長の小柄な体を受け止める。

受け止めた拍子に、鞘を失ってするりと背中から落ちた刀止めを私は無意識に受け止める。

「・・・大丈夫」

松本副隊長は、気を失っても氷輪丸の柄を握ったままの日番谷隊長を見て、ほっと息をつく。

「これは収獲だったな。隊長なしでは、あの連携はもう望めまい」

「ふざけんじゃないわよ！」

私の前で、松本副隊長と恋次が斬魂刀を構えた。

しかし、その力は、普段の二人と比べれば、及ぶべきも無い。

その時、私の懷で伝令神機が音を立てた。

「限定解除おりたかつ！」

声も荒く私が電話に出ると、腹が立つほど冷静な声が返ってきた。

「限定解除許可が下りるには、あと半日お待ちください」

「は、半日だと？半日も・・・」

「待てるはすがねえだろうが、この馬鹿野郎っ！！」

がばっ、と唐突に私の肩の上で身を起こした日番谷隊長が、私の耳がキーンとしばらく鳴る位の大声で怒鳴りつけた。

「ひ、日番谷隊長、意識が・・・」

「こんなの聞けば意識も戻る。で！どうなんだ！」

日番谷隊長は声を荒げた。

「し、しかし、申請の許可が下りるには、まだ足りない手続きが・・・」

「唸れ、灰猫・・・」

何か言い募ろうとした伝令神機の音声を、松本副隊長の声がさえぎった。

次の瞬間、音もなく、さらさらと、砂と化した伝令神機が手のひらから流れ落ちた。

「・・・」

日番谷隊長と松本副隊長は、しばし無言で目を合わせた。

日番谷隊長は、私の肩から下へ降り立つと同時に、さらりと言った。

「許可が下りた！霊力を解放しろ！」

「え？今、そういう話の流れでしたか？日番谷たい・・・」

「いいのよ」

松本副隊長が私を制した。

そして、死覇装の胸元を少しだけくつろげると、胸元に押された隊花のマークに指をつける。

「限定解除！」

ふっ、と隊花の紋様が消えると同時に、すさまじいまでの霊圧が、3人から放たれた。

【14】アランカル・デイ7 2対2

「阿散井！お前は黒崎のところへ行け！」

「はっ！」

恋次がニヤツと笑うと、瞬歩でその場から掻き消えた。

「日番谷隊長！」

私は日番谷隊長に駆け寄る。

「私はここに残り戦わせてください。脚を引っ張った分働かせて頂きます」

「そゆことですって。隊長、下がっててください」

ふう、と日番谷隊長はため息をつく。無言で下った、ということは黙認だろう。

やはり、傷は深いのかもしれない。それを見て私は思う。

私は、一撃を放ったシャウロンに刃を向けた。

「朽木。あいつの強さはホンモノよ。気をつけな」

それを見た松本副隊長が、私を見下ろした。

「デイ・ロイ。全力でゆけ」

「ああ。皆殺しにすりゃいいんだろ」

シャウロンと、デイ・ロイという名らしい破面が視線を交わす。

そして、同時に手のひらを松本副隊長と私に向け、虚閃を放った。

「・・・松本副隊長！？」

避けようとした私は、動かない松本副隊長を見やり・・・そして、気づく。

彼女の後ろには、傷ついた日番谷隊長が控えている。

「・・・破道の三十三、蒼火墜！」

刀を持っていない左手を前に示し、松本副隊長が「力ある言葉」を叫んだ。

蒼い炎がまっすぐに噴出し、二人の破面の虚閃とぶつかり合う。

「へっ、二人分の虚閃を一人でだなんて、うぬぼれすぎだぜ」
相殺しきれなかった虚閃が、松本副隊長を襲った。

「松本　！」

叫びかけた私の動揺とは裏腹に、松本副隊長は、右手に握った灰猫を構える。

「そうでもないと思うけど？」

ヒュン、と刀を空中で一閃させ、わずか一振りで虚閃をなぎ払った。

「死ね！！」

間髪いれず、松本副隊長の斜め上の上空に、デイ・ロイの姿が現れる。

歯をむき出し、愉悦に歪んだ顔を露に、彼女に向かって斬りかかった。

「・・・」

松本副隊長は対照的に、スッと目を閉じると、その場から瞬歩で姿を消した。

「どこに・・・」

デイ・ロイがあたりを見回した、その次の瞬間。

ふっ、とデイ・ロイの背後に、松本副隊長の背中が見えた。

「遅いわね」

肩越しに振り返ったその瞳が、妖しい光を帯びる。

「くっ！」

デイ・ロイがとっさに上から振り下ろした刃を、無造作に横から払う。

その刃が、かわす先から灰に変わってゆく。

「破道の三十一。赤火砲」

その眼前に手を突き出すと同時に詠唱を唱える。

「物理的に灰にしたほうが、気持はいいか」
悲鳴を上げる間も無い。圧倒的、だった。

副隊長とは、隊長の背中を護るのが任務だ。
しかし、隊長が戦えないときには、最前に立って戦う度量も必要だと聞いていた。

松本副隊長の潔いまでの強さ。
そして戦いの最中、背後で軽く目を閉じたままだった日番谷隊長。
普段は口げんかばかりのこの二人の絆を、見た気がした。

「・・・貴様は？」

灰になって宙を舞う、デイ・ロイだったものを見やり、無表情でシヤウロンが松本副隊長を見やった。

「松本乱菊。十番隊副隊長よ」

「さすが副隊長格、大した腕だ。

しかし貴方は戦力が上がりはしないようだ。

最も弱いものを私に当てるとは、笑止！」

シヤウロンは、私にそういうと同時に、松本副隊長に虚閃を放った。

「ちっ！」

松本副隊長は体の前に斬魂刀を斜めにかざし、虚閃の軌道をそらした。

しかし次の瞬間、シヤウロンは一気に副隊長の懷まで飛び込んだ。

「死ね」

大きく刀を背後に振りかぶる。

私は、すう、と息を吸い込んだ。

「死ぬのは貴様だ！」

叫ぶと同時に、瞬歩で姿を消す。

「なにつ・・・」

シャウロンが刀を振りかぶったまま、刀に増した重みに、振り返る。その刀身に私が飛び乗ったからだ。

「舞え、袖白雪」

シャン・・・と音を立て、私が握った柄から刀身が純白にかわってゆく。

「遅い！」

シャウロンはそう怒鳴り、残った左腕で、何か攻撃をしようとしたようだった。

ようだった、というのは、その左腕が見る間に凍りついたからだ。

私の力じゃ、ない。とすると・・・

私は動揺を、一瞬で断ち切る。

「な、なんだと・・・」

「初の舞、月白！」

ふわり、と宙に舞うと、私は袖白雪を軽く一閃させ着地した。

その直後、シャウロンの体が、柱状に凍りつく。

私が刀を納めると同時に、それは粉々に砕け散った。

「終わったな」

気付けば、日番谷隊長の姿がすぐそばにあった。

「日番谷隊長！二度も助けていただいて、ありがとうございます！」

私は頭を下げた。

「知らね」

私の未熟を責めるでもなく、明らかな嘘について不器用にも顔をそらす姿に、思わず私は破顔した。

同じ流魂街の出身で、同じ氷雪系の力を持っている分、日番谷隊長と自分の差はよく分かっている。

氷雪系で最強と呼ばれる氷輪丸を携え、一気に隊長格まで上りつめ

た日番谷隊長を、遠く、遠く感じていた。

これまで、言葉を交わすことが無かったのは、私から避けていたのかもしれない。

でも。同じ目的を持ち隣に立っていてくれることを、今は素直に在り難いと思えた。

「そんなことより、阿散井と黒崎がまずいことになってる。向かうぞ」

「一角と弓親は？」

「霊圧をさぐってみるよ」

なぜか呆れたような口調で、日番谷隊長が南のほうをくいつと指す。

「なんだ、この霊圧は・・・」

私は南を見やった。

霊圧が跳ね上がりすぎてよく分からないが、あれは間違いなく斑目三席の気配だ。

松本副隊長が呆れたように言った。

「三席なのに卅解できるなんて。限定解除もかかんないし、黙ってるなんてずるすぎ」

「あれでも隠してるつもりらしいぜ。

ところで松本、お前にはそういう奥の手はねーのか？」

「あたし、隊長に全部見せてますから

・・・ちよつと、ため息で流さないでください！」

「一護と恋次のところへ行きましょう！」

私は思わず先に立って叫ぶ。ヒシヒシと、桁違いの破面の力を肌を感じていた。

【15】アランカル・デイ8 十刃

「月牙天衝！」

「狒狒王蛇尾丸！」

瞬歩でその場に降り立った瞬間、二人の声が重なるのが聞こえた。

「甘えっ！」

その直後響いた破面の声も。

「一護っ！恋次！」

駆けつけた私のすぐ横を、二つの大きな黒い影が吹っ飛ばされた。その尋常でないスピード、そして前に立つものの強大すぎる霊圧。後ろを振り向けない。視線をそらすこともできない。

「大丈夫？」

私の後ろで松本副隊長の声が聞こえた。同時に日番谷隊長の霊圧も現れる。

おそらく、吹っ飛ばされた一護と恋次の体を受け止めたのだろう。

「気をつける！あいつ強えぞ！」

咳き込みながら一護が言う。

「分かっておる……」

私は、剣先の向こう、数メートル先に立つ破面を見上げた。

蒼い髪をした、一護に似た背格好の男。

その腹の部分には、破面の証拠、拳が入るような穴が開いている。

「グリムジョー・ジャガージャック。NO・6だ」

NO・6……

ただし。十番以下は、単なる生まれた順ではなく、力量順。
エスパーダ
十刃と呼ばれるのがそれです。

シャウロン・クーファンが語った言葉を、私は思い出した。

とすると、この男は単なる破面ではなく、十刃ということか・・・確かにその霊圧は、さつき戦った10番以上の破面とは別次元だった。

「ルキア。ここは俺たちがやる」

ぐい、と肩がつかまれた。

そして、息を荒げながらも、私の先に一護が並ぶ。その横には恋次も。

「一護、恋次・・・」

私が一步下がった、その時。

「ひゃっほおおー！」

祭りのような雄叫びに思わず上を見やると、見慣れた人影が上空から降ってきた。

陽光にキラリと頭が輝く。

「うわ、まぶしっ！」

一護と恋次が目を腕で覆った。

「何がツルツパゲだ！」

その二人の首に、上から降ってきた男・・・斑目三席の腕が決まる。

「ぐおっ！」

二人が墜落した場所に、斑目三席、綾瀬川五席が収まる。

「さっきの二匹程度じゃ、全然足らねーんだよ、破面！」

穴に紐通して束ねてやるから、まとめてかかってこいや！」

「イキがいいのは嫌いじゃねえがな、どこまで持つかな」

グリムジョーと名乗った男は、口角を上げてニヤリと笑った。

そして、刀の切っ先を斑目三席に向けた、正にその時。

グリムジョーの眼前に、白い影のようなものが奔った。

「もう1人・・・だと」

「ウルキオラか！てめー、何を・・・」

私は、翻って露になったウルキオラの胸元を見、言葉を失った。そこに刻まれていたNOは、4。

「退け、グリムジョー。既に他の破面は全て死んだ。一旦戻れのご命令だ」

「てめえがすつこんでろ、ウルキオラ。見て判らねえか。俺は愉しんでんだよ」

「命令違反は、NOの剥奪に直結する。それで問題ないというなら、いつまでも戦うがいい」

二人の視線が交錯する。

同僚のようなものだと思うが、死神のそれとは違い、互いの目に全く温度は無かった。

「・・・ちっ」

やや置いて、舌打ちをしたのはグリムジョーだった。

「てめーら、命拾いしたな」

そして、抜き身の斬魂刀を鞘に収めた。

二人の背後の空が、まるで布を裂くように上下に割れた。

空の切れ目の向こうは、どんよりとした黒が広がっている。

そこで、ふっ、と気が抜けなかったか、という嘘になる。

私の精神は、なれない敵と次々対峙したことで、すでに限界を振り切れていた。

だから。

「来るぞっ！」

日番谷隊長の鋭い声が空間を貫いたとき、私はとっさに反応できなかった。

しかし、私以外は全員、その言葉に素早く反応して刀に霊圧を込めた。

「虚閃！」

それと同時に。何の前触れも無く、グリムジョーがその両腕から虚閃を放った。

さきほど私が戦った破面のそれと比べると、比較にならないほどの巨大さだ。

私の横で、霊圧がぐんつ、と膨らんだ。

「……………」

「月牙天衝！」

間髪いれず放った一護の一撃と、虚閃が空中で衝突する。

「…………一護」

振り向いた斑目三席の目が、見開かれた。

相殺された虚閃と月牙天衝の衝撃波で、みな死覇装がはためいている。

私も一護を見やり……瞠目する。

その顔半分が、虚の仮面に覆われていた。

それはほんの数秒の間のできごとで、すぐに仮面は割れ、破片となつて一護の足元に散った。

しかし、その外見も、霊圧も、まるで……

穴の向こうに立っていたグリムジョーとウルキオラは、無言で一護を見下ろした。

「…………クツ」

ニヤリ、とグリムジョーが笑みを浮かべた。

「次は殺してやるよ、死神」

そして、空の「切れ目」が、すっと細くなり、一本の黒い線になり・

・線も、空にじんで消えた。

「一護、あんた・・・」

松本副隊長が、一護に近づこうとして・・・ふと、横を気遣った。
「隊長、大丈夫ですか？」

「その・・・仮面。とりあえず他の死神には、だまっとけ・・・」
そう言った日番谷隊長の体からふっ、と力が抜けた。

そのままふわり、と民家の屋根に着地した。

おそらく、霊圧を放出して空にとどまり続けることが難しくなった
のだろう。

それに続いて、皆屋根の上に降り立った。

「オイ、大丈夫か冬獅郎？」

「すみません、私が弱いせいで・・・」

私は日番谷隊長の前で、再度頭を下げた。

確かに、一護は例外として、ほかは皆席官以上。

私が最も劣ることは、初めから理解していたつもりだった。
しかし・・・これほどまでとは。思っていなかったのだ。

「済んだことを何度も謝るな」

それに対して、日番谷隊長の言葉は短かった。

そして、何かを考えるように、視線を宙に浮かせた。

「オイ、朽木。お前まだ動けるな」

「あ、はい！」

「すぐに精霊廷に戻ってくれ。そして伝言を頼む。

井上織姫を、なるべく早くソウル・ソサエティに連れて行け、とな」

「ちょ・・・冬獅郎！」

一護がそれを聞いて詰め寄ったが、日番谷隊長の冷静な声がそれを
さえぎった。

「議論してる場合じゃねえ。

重要なのは、その仕事は必ず隊長格2名以上でやらせるってことだ。

断界内では気配は丸見えになる。

あのレベルの破面が急襲してくることも考えられる。

断界を抜けるまで数十秒もてばそれでいいが、油断はできねえ」

ぐっ、と一護がつまり、そして、黙った。

それが決して、ソウル・ソサエティの都合から出た言葉ではないことを、分かっているからだろう。

あのレベルの破面がうろろしだしたのなら、井上が襲われた時、こちらが全員揃ったとしても、護り抜ける保証はどこにもない。

それでもやるんだ、と言うには、井上の命は重すぎた。

「・・・分かりました」

私は目を閉じ、頷いた。そして、タン、と地面を蹴る。急速に屋根が遠のいた。

【16】強奪1 ピンクの目覚め

「現在、空座町には、乾燥注意報が出ております。火元には十分気をつけ・・・」

俺を眠りから引き戻したのは、女の無機質な声だった。

乾燥・・・そんなアナウンス精霊廷にあっただろうか。初めて聞いた。

精霊廷では、ひどい火事の鎮火は俺の仕事だ。

氷輪丸を一振りで大概の火事はなんとかなる。

その後の氷輪丸の機嫌の悪さにはいつも参るが。

カチ、コチ・・・と規則正しく時を刻む時計の音。

それが部屋に響き渡るくらい、あたりは静まり返っていた。

蛇口から水が滴るシンク。

カバーが取れかけた古ぼけた黒電話。

ポスターをはがした後がいくつも残る壁。

そして、誰も空間に内包しないそれらの空間が作り出す、どこか垢じみたような沈黙。

それは慣れない筈の空間でありながら、ずっと知っているみたいな懐かしさだ。

・・・慣れない？

そこで俺はやっと目を開けた。

そしてがばっと布団から起き上がる。

起き上がった右隣は窓になっていて、見ると遠くで電車が走っているのが見えた。

遠くが煙のようにかすんだ街並みが、ずっと広がっているのが見下

ろせた。

「現世・・・」

つぶやいた俺の声は、われながら寝ぼけてた。

そうだ。

俺は破面と戦って・・・背中に一発攻撃を受けたんだった。

あの後、黒崎の部屋に集ってあれこれ話してたはずだが、途中から記憶がねえ。

自分でも気がつかない間に、眠ってしまったてらしかった。

はっ、と気付いて慌てて部屋に視線を探すが、探すまでも無く、氷輪丸は見つかった。

朽木がソウル・ソサエティから調達してくれたのか、砕けたはずの鞘は新しいものに変えられていて、刀止めも前のようにくくりつけてあった。

時計を見ると、時間は午前10時時。

昨夜寝入ってしまったたはずだから、ほぼ半日近く寝てたってことか。

「に、しても・・・」

なんだこの部屋は。

カーテンはピンク。

しかも意味を成さないほど透けたレースカーテンが、空間をますます異様に見せている。

しかも俺が寝ていたベッドは、シーツも布団も全てがピンク色だ。

その上に、とどめのようにディフォルメしたキャラクターが描いてある。

絨毯はベージュ。

そしてベッドの逆の端には、机が置いてあった。

俺は何となく慌てて起き上がった。

あんなピンクのベッドにいつまでもいたら、妙な花みtainな香りが

移ってしまいそうだ。

そのとき、布団の上から何かが滑り出た。

そいつを空中で受け止めてみると、それは一枚の紙。

繰り返すのもしつこいが、またも紙の色はピンク色だ。

その色に似合わない、これでもかというくらいヘタクソな字が書かれている。

ここで待ってろ。

その紙に残されたかすかな霊圧から、その字の主が黒崎一護だと知る。

さぐってみれば、かすかに部屋の空気にも霊圧が解けている。

おそらく、俺が寝てる間に何かが起きて、他の奴は俺を置いていった、と。

起こせよ、と俺はため息をつく。

俺がいねーと、お前らはロクでもねーことばかり仕出かすじゃねえか！

に、しても。

「ここで待ってろ」の字を再び眺める。そして周りの風景も。

こんなとこで待てるか！

つか、ワザとやって人を遊んでんのか。

おれは氷輪丸をひっ掴むと、早足でドアに向かった。

背中がズキンと痛んだが、こんな冗談みたいな部屋にいるよりよっぽどマシだ。

バン、と遠慮も何もなくドアを開けた瞬間・・・俺は固まった。

ドアノブに外から触れた瞬間にドアが開かれたのだろう。

50センチほどの距離に人間の女が1人、呆然と言葉を失って立ち尽くしていた。

栗色の髪。丸い大きな瞳。

身長は俺よりもちよつと高めだが、子供だ。

「・・・黒崎一護の妹か？」

ぴくっ、とその肩が動いた。

「お兄ちゃんの、お友達？」

おそろおそろ、目を丸くしたまま尋ねてくる。

どうも疑うということを知らない子供らしい。

決して同意したくはない質問だが、ここは頷いておくほうが無難だろう。

俺はあいまいに頷き、手にした紙を少女の前に示した。

「こ・・・こで待て。ヘタクソな字だね」

妹でもそう思うのか。

「・・・おにいちゃんがこの部屋で待つように言ったの？」

「っーわけだ。邪魔したな」

俺はそのまま少女の横をすり抜けて廊下へ出た。

とにかく、アイツらの後を追うことが先決だ。

どうせ、ロクなことになってないだろう。

アイツらがどうなつても知るかと一日千回くらいは思うが、これも仕事だからしょうがねえ。

頭は完全に外に向いてた・・・そのとき、俺は急に家の中に意識を引き戻された。

腕に感触を感じてわずかに振り返ると、俺の肘を女の小さい手が掴んで引き戻していた。

「ダメだよ」

俺が何か言う前に、女がやたらきつぱりと言った。

「君、あちこち怪我してるでしょ。歩き方でわかるもん。動いちゃだめ」

「別に歩けねえほどじゃねえよ」

普段と違う歩き方をしたつもりはないが、こんな子供に気づかれるとはよっぽど俺もぼうつとしてるらしい。

俺がそういつても、女は手をはなさねえ。

「あのなら・・・」

俺が肩越しに振り返って女を見たとき。

俺の視線は一気に女を飛び越した。

「・・・なに？」

女がキョトンとして、後ろを振り返り・・・

その全身が瞬時にこわばるのが手を伝って感じられた。

女のどこまでもピンク色の部屋の窓に、泥を煮たみてえなズタボロの着物をまとった虚が、べたりと張り付いていた。

その中身のない瞳が、じっと俺たちを見つめている。

・・・にたり。

その顔に亀裂のような笑みが浮かんだ・・・

と思った瞬間、そいつは窓を何もなかったかのようにすり抜け、俺たちに向かって音もなく突進してきた。

【17】強奪2 襲来

ガッツ！

鈍い音と衝撃が俺の右腕に響いた。

俺がとつさに女の前へ出、鞘ごと顔の前にかざした氷輪丸に、そいつの歯が食らいついていた。

俺のすぐ近くに女の顔があった。

恐れるところまで思い至っていない、放心した表情を俺に向けている。

・・・待てよ。

てことはこいつ、虚が見えるのか？

黒崎の妹なら、その程度のことは当然かも知れねえが。

「・・・目え閉じてろ」

俺は左腕を女の顔の前に持っていた。

そして口の中で小さくつぶやく。

「縛動の二十の二・・・『裏鏡門』」

通常の鏡門と異なり、外からの攻撃は受け入れるが、内側から外に出ることが出来ない。『禁』に系統的に似た鬼道で、メジャーではないが敵を閉じ込めるのには重宝な術だ。

だが、こいつをこのままここに閉じ込めてもしょうがねえ。

俺は右手で『鏡門』の型を保ったまま、更に詠唱を重ねる。

「破道の三十三、蒼下墜」

その瞬間、結界内を青い炎がいつぱいに覆った。

そいつが逃げる時間どころか、悲鳴をあげる時間も残さなかった。

俺が結界を解いたとき、部屋の中にはかすかに黒い煙が流れるのみ。

縛道系と破道系の鬼道を同時に使い、効率よく敵を殺す。

年次を重ねた年寄り連中がよく使う術だ。

でも俺は、子供の頃から割りとよくこの術を使っていた。燃費がいからな。

「・・・大丈夫か」

目隠しに持つて言つてた腕をどけると、放心したままの女の顔が見えた。

放心しながらも助かったことは理解できたのだろつ、その全身から力がふつと抜けた。

「・・・っおい？」

いきなりガツクリと後ろにのけぞつたもんだから、俺は慌ててそいつの肩を掴んだ。

顔をのぞきこむと、よっぱど怖かつたのか氣を失つてやがる。

「しょうがねえな」

くによりと力を失つたそいつを担ぎ上げると、あの悪夢みたいな部屋にもどり、布団にそいつを寝かしておいた。

びくりとも動かないそいつを見下ろしながら俺は考える。

自然と手を、そいつの顔の前にかざしていた。

死神の掟のひとつ。

死神はその姿や戦闘を人間に見られた場合・または不都合が生じたときは、その人間のその件に関する記憶は消滅させること。

・・・

まあ、俺の死覇装姿を見られたわけじゃねえしな。

記憶の消滅は、ごく稀に他の記憶障害も引き起こすことがある。

俺はゆつくりと、そいつの顔の上にかざした手のひらをどけた。

とても、さつき恐怖体験をした顔とも思えねえ、平和な顔でこいつは寝ている。

仮に怖い夢になって記憶が残ったところで、あの黒崎の一族だ。うまくフォローしていくだろう。

「・・・鏡門」

両手の平を顔の前で内側に向け、小さく唱える。

空間を一時的に遮断し、内外の気配を断つ技だ。

ぽう、と両手のひらの間に、かすかに白く光る正四面体が現れる。

一瞬でふくらみ、この家を結界で覆う・・・はずが、俺は手を止めた。

「松本か？」

既に同じことをやってるやつがいる。

待てよ。

だとしたら、なぜさっきの虚は、家のすぐ傍に現れた？

「鏡門」の覆う場所は、外側からは余程の強い虚を除いては入ってこれないはず。

少なくとも、あんな雑魚が結界を突き抜けるなんてこと、あるはずがないのに。

いくら松本がボケてたっていつても、程度があるだろ？

俺は窓を開け、そこからひらりと庭に降り立った。

目の前に手をかざすと、松本が張った結界が、かすかに乳白色に光った。

「・・・解」

小さく唱えると、そのまま俺の体は、結界を壊さずにすり抜けた。その、次の瞬間。

「見つけたぜ、死神！」

野卑な叫び声と同時に、俺の頭に棍棒を振り下ろしてきた虚が二体。どちらも、中途半端に仮面が割れている。

虚、というよりも、破面にもはや近い外見だ。

「鎌鼬！」

俺はとつさに鬼道を唱えた。

それと同時に、俺の体の脇から、巨大な真空の刃が打ち出され、破面たちを一気に斬り刻んだ。

その死体が地面に落ちるときには、もう気づいていた。

結界の中はまだ弱かったが、一步外に出れば、むせ返るほどの破面の気配が、空間に満ちていた。

これじゃ、どこにどの強さの破面が、何体潜んでいるのかもわからねえ。

さつき出てきた窓を振り返ると、虚が結界をすり抜け、窓に迫ろうとしていた。

遮断する対象が多すぎて、結界が馬鹿になってしまっているのだろう。

「鏡門！」

俺は松本の結界の外側に、二重に結界を張った。これでしばらくは持つだろう。

そのときだった。

「日番谷隊長！」

凜とした声に、俺は振り返った。

朽木ルキアが隣の民家の屋根を蹴るのが見えた。

斬魂刀の柄を握り締めたままの右手が赤くなっている。

いつもきつちり着こなしている死覇装も、ところどころ汚れ、ほつれている。

この破面が出現してから、どうやら何時間もたっているらしかった。それでも疲れも見せず、きびきびとした動作で俺の隣に着地する。

「朽木！・・・一体どうなってんだ」

責めるつもりで言ったわけじゃなかったが、朽木は申し訳ありませ

ん、と頭を下げた。

「松本副隊長が、最近お疲れのようだったから、少しでもお休みに
なられたほうが良いと・・・」

「・・・いや、それはいい。それより、今何が起こってる？」
「は」

朽木は顔を上げた。

【18】強奪3 現世脱出

「私が井上の保護を依頼しに戻った時、精霊廷でも既に、日番谷隊長と同じ結論になっていました。

井上を、一刻も早く保護せよと。

京楽・浮竹両隊長が現世に來られています」

ふむ、と俺は頷いた。

正直、ここまで素早く総隊長が動いてくれるとは、意外なくらいだった。

精霊廷では、井上が齎^{もたら}しうる災厄を、それだけ真剣に捉えてるってことだ。

涅あたりが、俺達よりもっと確実な証拠を掴んだのかもしれない。

俺は、破面の気配が色濃く漂う空を見上げた。

「で、これはどうしたんだ」

「今より数時間前、突然虚圏より、何体かも分からぬ数の破面が襲来しております。

幸いどれも、昨日の破面に比べると雑魚ばかりですが・・・

霊圧が少しでもある者を見つけると、手当たり次第襲ってきます」

「雑魚ばかりつてのは、どうして分かる？この状態じゃ一つ一つの霊圧を追えねえ。

伝令神機も反応しねえだろ」

「先遣隊のメンバーが伝令神機で連絡を取りながら虚を撃退しておりますが、実際に戦った感触です」

なるほど。

俺は、朽木とは逆の考え方をしていた。

藍染は、隊長のときから無意味なことはやらねえ奴だった。

逆に言えば、全ての裏に意図が必ずあるということが、弱点にもなりかねないほどに。

雑魚しかいないと普通の奴が思うなら、藍染が「そう思わせようとしている」と思うほうが自然だ。

それならば、絶対にその裏には、糸を引いてる奴がいる。

例えば・・・昨日会った十刃レベルの奴が。

俺がそこまで考えたとき、朽木が懷に手をつ突っ込むと、着信ランプが明滅している伝令神機を取り出した。

そして耳に当てるとすぐに、それを俺に差し出してきた。

「おお日番谷くんかい。ルキアちゃんと出会えたようだね。

伝令神機、壊れちゃったんだって？」

伝令神機を耳に当てた途端、京楽の能天気な声が聞こえた。

俺はあいまいに返事をする。

都合が悪かったから壊した、なんて言おうものなら、当分ガキ扱いされる。

「今から織姫ちゃんを、ソウル・ソサエティに送るから。

彼女は藍染にとっても魅力的・・・もとい、能力が魅力的なはずだし、一刻の猶予も無い。

周辺は先遣隊メンバーが警護してくれてる。

君もすぐこちらに向かってくれ。現世に何かあったら、先遣隊の指揮を頼むよ」

「ああ、分かった。・・・気をつけてくれ」

「ああ。いやだねえ、この空模様・・・」

それだけ言って電話は切られた。

俺はため息をついて空を見上げる。

気配を探ってみれば、斑目、綾瀬川、松本、黒崎の霊圧が、破面の霊圧に混じって感じられた。

浮竹・京楽は、霊圧を隠しているんだろう、全く感じ取れなかった。一体一体は雑魚でも、これだけの数となると、どうしても死神勢は引き離されてしまう。

「いったん、井上のところへ向かうぞ」

「はい！」

黒崎の家をもう一度見上げ、結界が二重に効いているのを確認してから、俺は地面を蹴った。

ガキン！

激しく金属がぶつかり合う音に、あたしは思わず目を閉じた。

集中すれば部屋の中にも、黒崎くんたちが破面と戦う気配が追える。

乱菊さん、恋次くん、一角さん、弓親さんも、もうこれで3時間近く、戦い続けてる。

あたしは、胸の前で組み合わせた手に力を込めた。

あたしは、何も出来ない・・・

空座町に破面が現れるのは、あたしのせいかもしれないのに。

それなのに、当のあたしが、戦うことも護ることもできないなんて。

どうか、ケガしないで。

でもこんな時に、祈りがどれだけの役に立っというんだろう。

「織姫ちゃん。眉間にそんなにシワ寄せたら、可愛い顔がもつたい

ないよ」

不意に、その場には似合わない、のんびりした声が聞こえた。と同時に、あたしの眉間に指が押し当てられる。

「は……はいっ！」

あたしは慌てて目を開けると、無意識におでこを押さえた。

目の前には、少し目尻が下がった目が優しい、京楽さんの顔があった。

「そんな、気張らないの。みんなこれが仕事なんだから。そう簡単に、遅れを取ったりしないよ」

「はい」

あたしは、組み合わせた手をほどき、膝の上に下ろした。

「でも……破面の人たちが来てるのって、私のせい……なんですよね」

「違うよ。むしろ、お詫びしたいのはこちらの方だよ。ソウル・ソサエティの戦いに巻き込んでしまって、本当にすまないと思っている。」

向こうについたら、できるだけ助けになるから」

さらに、と白くて長い髪をなびかせて、浮竹さんがあたしの顔をのぞきこんだ。

浮竹さんの後ろには、「穿界門」というソウル・ソサエティへ続く和風の扉が見えていた。

門は半透明に透き通って、向こうにあたしの部屋が透けて見えるのが、不思議な感じだった。

今朝、起きたら大気には虚の気配が満ちてた。

そんな中、黒崎くんが連れて現れたのは、京楽さんと浮竹さんだった。

きっかけは何だっというんだよ、と、どこか余裕そうな表情のふた

りは言った。

破面を全部叩き返してもいいし、逃げてもいい。

ただ、破面たちの気を10秒やそこらでいい、そらしてくれと。

10秒あれば、穿界門を抜けて、あたしをソウル・ソサエティに連れて行くのは十分だから、と。

向こうについたら、か・・・

あたしは、改めて部屋を見渡した。

今が、とても大切な・・・深刻な事態だっていうのは分かってるけど、なんだか実感がわかない。

明日ごみの日だけど、出していったほうがいいよね、とか。

机の上に出しっぱなしの宿題見て、ああ、もうやらなくていいんだ、思ったり。

あたしって、何でこんな風にしか思えないんだろう。

でも、壁にかけてあるカレンダーの今月末の予定に、「たつきちゃん」と買い物」であるのを見て、チリリと胸が痛んだ。

ごめんね、たつきちゃん。相談もできなくて。

たつきちゃんならきつと肩を押してくれる。

あんたが一番正しいと思うことをやれば、それでいいって。

そう分かっても、大好きなたつきちゃんに、一目会っておきたかったよ、ホントは。

「・・・大丈夫です」

あたしは、浮竹さんに笑って見せた。

【19】強奪4 「これからよろしく」

京楽さんが、漠然と上を見ながらつぶやいた。

「にしても、たのしそーに戦ってるね、特にあの十一番隊の二人。本気で全員叩くつもりだね」

「でも、これ以上ひっぱるとこっちもタダではすまないね。

それに日番谷隊長と、朽木が来たようだ」

「ああ。そろそろかな」

ふたりは、顔を見合わせた。

「一度完璧に破面を叩くよ。そして、そのスキに君を連れて行こう。準備はいいかい？」

あたしはコクリとうなずいたけど、今更みたいに緊張してきてた。

浮竹さんと京楽さんは、顔を見合わせると、ひとつ頷いた。

浮竹さんが固く目をつぶり、大きな何かを包み込むように、腕を前に差し伸べる。

その口から、あたしの知らない、抑揚の無い言葉が流れ出した。

「南の心臓、北の瞳、西の指先、東の踵、風持ちて集い、雨払いて散れ……『かくしついでやく 掴趾追雀』！」

何が起こったのか、すぐには分からなかった。

部屋の中は、変わらずしーんと静まり返っていたから。

でも……外に集中すると、すぐに異変は感じ取れた。

あれほど暴れまわっていた破面の気配が、急に何かに動きを封じられたみたいに、止まってるのが分かった。

「今捉えたのは何体だい？浮竹」

京楽さんが、目を閉じたままの浮竹さんの肩に、手のひらを置いた。「全部で八体つてところかな？みんな良く働いてくれたみたいだね。」

これなら一気に倒せるよ」

「んー、諒解。こつちも場所を把握できた」

京楽さんは、ニヤツと笑った。

そして、左手の人差し指と中指だけを立てると、「シィッ」とする
みたいに、口の前に当てた。

その口が、短い言葉を口走った。

「廃炎」

何が起こったか、分からない。

でも、次の瞬間・・・その8つの気配が、アトカタもなく、消えた
んだ。

「・・・破面は？」

「もう大丈夫だよ、織姫ちゃん」

京楽さんは、戸惑うあたしを見る死して、微笑んだ。

なにか言おうとするその前に、あたしはこちらにやってくる気配を
感じた。

「黒崎くん・・・!」

あたしの後ろで、京楽さんと浮竹さんが顔を見合わせるのが分かつ
た。

「あー。ちょっとだけ、用事を思い出したかな」

「うん。ちょうど一分くらいかな」

「えっ?どうし・・・」

どうして、って言う前に、ガラッ!と音を立てて、後ろの窓が開
いた。

「井上っ!」

「はいっ!」

いきなり突き出された黒崎くんの顔に、あたしはびくう!とのけぞ
った。

「び・・・びっくりしたなあ、もう。びっくりしすぎてバク転する

ところだったよー!!」

あたしはなぜか慌てて、部屋に降り立った黒崎くんから少し、離れた。

「お・・・おお、すまねえ」

黒崎くんは部屋を見回して、すぐ京楽さんと浮竹さんに声をかけた。

「浮竹さん、京楽さん、どうなってんだ!!」

急に戦ってた破面が金縛りにあったと思ったら、燃えてなくなっちゃったぞ!」

良かった・・・ひどいケガしてないね。

ちょっとだけ頬とか腕に擦れたみたいな傷があるけど、全然元気だ。
「そういう鬼道を使ったからね」

京楽さんはそういうと、浮竹さんと一緒に、くるりと背を向けた。
「じゃあ僕ら、ちょっとだけはすすから。挨拶できる時間くらい、ね」

「えっ!? イエそんな、時間なんて・・・」

あたしが真っ赤になってグルグルしてる間に、二人はふわっと消えちゃった。

「えと、ええと・・・」

どうしよう。

こんな場面で言うべきとっておきの言葉なんて、映画みたいには浮かんてこないよ!

ダン!!!

「ひゃあうっ!!」

いきなり大きな音がして、あたしは飛び上がった。

おそろおそろ振り向くと・・・

「く、黒崎くん!?」

そこには、両手をじゅうたんの上についた、黒崎くんの姿があった。
下を向いてるせいで、表情は分からないけど・・・

ど、どうしよう・・・

あたしは、少しの間固まった。

「頭・・・頭が低うい！・・・なんちゃって」

ビシッ、と指差してみる。

ああ、ダメだ・・・こんなオヤジギャグじゃ、空気もなごまないよ。
なごんだってしょうがないんだけど・・・

あたしが葛藤してるのを、いつのまにか顔を上げてた黒崎くんが、
じーっと見てるのにあたしは気づいた。

「ひゃっ！」

勝手に、また飛び上がるあたしを見て、黒崎くんは、ちよつとだけ
笑った。

「お前、かわんねーな。

昔っから、俺が急に声かけるたび、悲鳴あげたり、ビックリしたり
してたろ。

俺、そんなに怖えか」

「ち・・・違うの！違う！」

あたしはブンブンと首を振ったけど・・・悲鳴あげたりビックリし
たりしてるのは確か。

黒崎くんと同じクラスになってしばらくして、あたしは、そんな自
分の態度に気づいてた。

「井上」

あの、ちよつと低めの声に耳をくすぐられる度、あたしは不自然な
くらいビックリしちゃう。

思わず悲鳴っぽい声を出した日には、耳まで赤くなるくらい。

確かに、怖いのだ。

その存在が、あたしの中で大きすぎて。

「・・・ねえ、黒崎くん」

あたしは、自分の声が、思いがけず穏やかなことに、自分でもビツクリしてた。

「楽しかったよね？」

二度と、戻れないかもしれない現世。

心底、別離の情が胸を突き上げたのは、この一瞬だった。それでも、取り乱さない理由が、わからなかった。

黒崎くんは、そんなあたしを見て・・・

「そんなこというな。また、すぐに戻ってこれる」

どこか苦しそうにそういうと、もう一度、頭を下げた。

「すまねえ、井上。お前のこと、護ってやれなくて」

ああ。

あたしは、破面に狙われる立場になったって意味じゃ、不運かもしれない。

でも、これほど大勢の死神さんが、そして黒崎くんが護ってくれるから、不幸にはならなくてすんだよ。

だからあたしは十分、護られたんだ。

「・・・大丈夫」

あたしは、不安そうに顔をあげて黒崎くんに、笑って見せた。

「だから。これからよろしくね。黒崎くん」

「・・・ああ」

やっと、黒崎くんが笑ってくれた。

【20】強奪5 No.1十刃の強襲

あたしが胸をなでおろした時だった。

「なあにが、ヨロシクじゃあ！」

バン！と部屋の戸が開いて、乱菊さんが入ってきた。
その後ろには、一角さんと弓親さんも見える。

「いつ！アンタら、いつから聞いて・・・」

「全部よ」

即座に乱菊さんが言い返した。

「ていうか、その二人！今更よろしくも何もないでしょうよ。
とつと告白済ませなさいって、じれったいわね」

「こっ・・・」

黒崎くんの表情が、カチン、と固まった。たぶんあたしの顔も。

「今が絶好のチャンスなのに、何やってんのよ！」

「ららら乱菊さん！あああたし、大丈夫だから！」

あたしは自分でも意味不明のことを言って、立ち上がった。

「そそそれより、みんな無事でよかった！」

「無事も何も、急に敵を横取りするのやめてほしいっすよ。不完全
燃烧です」

一角さんは、どこか不満そうな目で、後ろにいた京楽さんと浮竹さ
んを見やった。

弓親さんも、ジトツとした目を二人に向けてる。

「掴趾追雀で敵を補足し、廃炎で焼き払う。

そんな合わせワザが出来るなら、初めからやってくださいよ」

「いやーすまんすまん。最近ラクしようと開発した術だから、まだ
不完全でね。

敵の数が十越えるとムリなんだよ」

あんまり申し訳なさそうじゃなく、京楽さんが笑った。

「ンな力があるなら、織姫ちゃんつれてく必要あるんスか？」

「馬鹿ね一角、もう忘れたの？昨日見たヒトケタの破面の力」

「ケツ、怖気づいてんのか？」

「怖気づいてんじゃないの。織姫の安全を考えたら、連れてく必要があるって言うてんの。

お分かり？」

パンパン、と浮竹さんが手を打った。

「せっかく作り出した空白をムダには出来ない。織姫ちゃん、行くよ」

あたしの肩に、浮竹さんの大きな手のひらが置かれた。京楽さんが先に立った。

「おそらく直ぐに追加が来る。引き続き頼むよ。間違ってもこの中に寄せないように」

「ハッ」

浮竹さんの厳しい声に、その場の死神さんたちが頷いた。

あたしも立ち上がって、黒崎くんと死神さん達を振り返った。

「あたしを助けてくれて、本当にありがとございました！」
頭をできるだけ深く下げてから顔をあげると、みんな笑ってた。

やっぱり、あたしは幸せ者だ。

もう躊躇わずに、足が前に動いた。

浮竹さんの後について穿界門の中に足を踏み入れると、勝手に後ろの門が閉まった。

「急ごう。この中は、気配を悟られやすいからね」

そういつて、大股でどんどん歩いてく。

あたしは自然と小走りになった。

前に行き来した時は、断界って壁が後ろから迫ってきて、死に者狂いで走ったつけ。

まともにここを見るのは、初めてな気がする。

そして断界は、後ろから迫ってこなくても、暗くて巨大で、圧倒的だった。

こんなものをあたしがどうにかできるなんて、やっぱり何かのマチガイだよ。

「もう少しだよ、織姫ちゃん」

そう京樂さんが言って、あたしが振り向いて、

「大丈夫です」

って、言おうとした・・・その一瞬の間。

太いものが、あたしの胴体にまきついた。

「きゃ・・・！」

景色が、ぐるん、と目にも留まらない早さで回る。

上空へ引つ張り上げられたんだ、と気づいたのは、浮竹さんと京樂さんを見下ろす形になってから分かった。

「貴様！」

あたしを見上げる浮竹さんと京樂さんの表情が、見たことがないくらい険しい。

あたしは恐る恐る、後ろを見やった。

そして、男のヒトが、逞しい腕をあたしの胴に回しているのを知った。

破面！

その禍々しい気配の正体は、あたしにもすぐ分かった。

どことなく京楽さんに似た、彫りの深い顔立ち。
長い黒髪が、波打っていた。

人間の年は当てはまらないだろうけど、30代後半くらいに見えた。
白い服を着て、袴みたいなのを纏ってる姿は、まるで白い死神みたいだ。

その鎖骨のあたりに、数字が黒々と刺青されているのに、あたしは気づく。

1?

薄い唇の端が、持ち上げられる。

どうしてだか分からない。でも、それを見たとき、あたしは思った。
この男は、他の破面と次元が違う・・・!

それを下にいる浮竹さんと京楽さんに伝えようとしたとき。

ぐん、と景色が、さっき来た現世のほうに動いた。

黒崎くん。みんな・・・!

気配を、穿界門の向こうに感じる。

浮竹さんと京楽さんは、腰の刀に手をかけ、影のようにあとを追ってくる。

「だ・・・め」

バンッ、と穿界門が空けられる。

外の光が差し込んで、目がくらみそうになる。

「逃げて!!」

視界の先に見えたのは、来る前と変わらぬ、あたしの部屋。
車座になって座っていた一角さん、弓親さんが、反射的に半腰になるのが見えた。

その向こうで、同時に刀の柄に手をやったのは、朽木さん、冬獅郎くん、乱菊さん、恋次くん。
そして・・・一番奥には、黒崎くんが。

「てめえ!!!」

あたしを捕まえた男を見た黒崎くんの目が、一瞬で燃え上がった。

【21】強奪6 無貫の鉄壁

「待て黒崎！」

その破面の姿を見て、只者じゃないのに気づいたんだろう。

冬獅郎くんが黒崎くんの前に手を伸ばしたけど、間に合わなかった。
ダン！！

足を蹴ると同時に、床においてあった刀を振りかぶる。

「井上を放せっ！！」

迷いの無い動きで、一足飛びであたしを捕まえた、破面に斬りつけた。

破面は、空いている手のひらを前に向けた。それは、とても無造作なしぐさ。

その手のひらと、風を切って振り下ろされた黒崎くんの刀が触れた。
・

と、思った瞬間。

黒崎くんの刀が、液体みたいに、溶けた。

「・・・え」

黒崎くんの目が、見開かれる。

スタッ、と床に降り立った黒崎くんを、破面が感情の無い瞳で見下ろした。

「どいてろ一護！」

黒崎くんの両脇から、一角さん、弓親さんが刀を抜いて飛び出してきた。

そして、頭上からは恋次くんが、刀を大きく振りかぶるのが見えた。

「・・・困ったねえ。戦いはあんまり、好きじゃないんだけどね」
破面の、どこか間延びした声が聞こえた。

「・・・なんだと」

対照的に、一角さんの声は、啞然としてた。

三人の刃は、破面の肩と首、頭に当たっていた。

でも、破面は何事もないかのように、立ったままだった。

「バカ、逃げるのよ！」

乱菊さんの声が響いた。

でも、それは間に合わなかったみたいだった。

言葉を失った一角さんと弓親さん、恋次くんが、次の瞬間、血を吹いて倒れたから。

何をしたの？

あたしには、全く何も見えなかった・・・

血痕が部屋を濡らし、点々とあたしの頬にも飛んだ。

「イヤ・・・！」

ピクリともせず倒れ伏した、3人の体・・・手を伸ばそうにも、届かない。

「ちっ・・・」

刀を失った黒崎くんが、それでもあたしに手を伸ばそうとする。

「やめてえ！」

あたしは声を限りに叫んだ。

破面の目が・・・今度は黒崎くんに向けられたのが分かったから。

刀も無いのに、殺されちゃう！

「落ち着け！！」

「うおっ？」

その黒崎くんの肩口に黒い影が落ちて、黒崎くんの体が前のめりに倒れこんだ。

たたらを踏んで立ち直って・・・そして、自分の前に立つ小柄な影を見た。

「冬獅郎！」

「いいから下がれ！」

黒崎くんの肩を蹴って、床に飛び降りた冬獅郎くと、破面の目が1メートルくらいの距離で合った。

その前に、スイツと白銀の刃が突き出される。

「お前。何者だ」

冬獅郎くんの背後に現れた乱菊さんが、黒崎くんの肩を掴んで、引き戻した。

「3人とも、まだ致命傷じゃない。落ち着きなさい」

「ようやく話をさせてもらえそうだ」

その破面は、自分を見据える冬獅郎くと乱菊さんを交互に見るとにつこりと微笑んだ。

まるで、道端で立ち話するみたいに。それが示すのは、圧倒的な余裕だった。

対照的に、あたしの頬には冷や汗が伝った。

「俺は、十刃のスターク。NOは1だ」

黒崎くんの隣に立った朽木さんが、ハッと息を飲むのが分かった。

「十刃の中では最強、ということか？」

「まあ、そうなるね」

朽木さんの言葉に、スターク、という破面は微笑んで返した。

まるで仲間に対してしゃべってるみたい・・・ていうあたしの考えは、次の言葉で完全にさえぎられた。

「力づく、なんて考えるだけ損だよ。」

卍解も会得してないのが二人。不完全な卍解しかできない者が一人。ヴァイザード仮面の軍勢の成り損ないが一人。どうあがいたって、俺には勝てない」

「お前、ヴァストローデか」

冬獅郎くんが翳した刀に、ぽう・・・と白い光が宿った。

その綺麗な光とは裏腹に、強い霊圧が辺りに満ちる。

「違うね」

スタークの言葉に、ピクリ、と冬獅郎くんが眉を動かした。

「俺はアジューカス、中級の破面にすぎないよ。」

ヴァストローデが現れれば失脚する、しがない運命なんだ」

「・・・っ！」

乱菊さんが息を飲むのが分かった。

「ていうことは、まだヴァストローデは生まれてないんだな」

「粘るねえ、少年。でも、これ以上は教えてあげられないな」

「・・・そうか」

二人の視線が交錯する。スタークの目が、危険な光を帯びる。

「冬獅郎くん、あぶな・・・」

「卍解！」

あたしが叫んだのとほぼ同時だった。

冬獅郎くんとスタークの間に、浮竹さん・京楽さんの姿が現れた。

冬獅郎くんの霊圧に隠れて気がつかなかったんだろっ、スタークが少し驚いたような表情をするのを見た。

「もらった！」

浮竹さんが鋭く叫ぶ。両刀をつかう二人の、二対の刀が宙を滑る。

その切っ先が、スタークの胸にもぐりこもうとした、その直前

ひらり、と身を交わしたスタークが、腰に差した刀を片手で抜き放った。

「ゴメンね？」

顔の前で、ギラリ、とその刀がまぶしいくらいの光を放った。

なに？

あたしの目には、その刀身が、ブレたみたいに見えた。

まるで・・・刀身が二本、あるみたいに。

轟、という風鳴りの音を残して、刃が振り下ろされた。

「浮竹っ！京楽！！」

冬獅郎くんの、今まで聞いたことがないくらいに、緊迫した声がその場を貫いた。

え・・・

思考が止まったあたしの、目の前で。

浮竹さん、京楽さんの体が血を噴いた。

ちょうど・・・胸の左寄り。

まともに、心臓のあたりを一突き。

致命傷だってことは、何もその手の知識が無いあたしにも明らかだった。

「ば・・・ばけもの」

気付けばあたしはそう呟いてた。

スタークはあたしを見下ろして、にこりと笑った。

「化け物は君だよ、井上織姫。すぐに分かるさ」

とつさに冬獅郎くんは、二人に駆け寄ろうとした。

その首元に、容赦のない刃が据えられた。

「逃げるべきじゃあないのかい？その二人を見捨てて。

そしたら、他は助かるかもしれないよ」

「てめえ・・・っ」

ギリ、と冬獅郎くんが歯を食いしばった。

その目が、足元に広がりつつある血に、チラリと泳いだ。

「どうせ・・・生き残る気なんてないんだろ？」

ピクリ、と冬獅郎くんが顔を上げるより前に、スタークの刃が、ぐん、と前に突き出された。

冬獅郎くんの翡翠の瞳に向かって。

【22】強奪7 決別

「やらせねえ！」

動けるスターク以外の誰もが、体を強張らせていたとき。

黒崎くんが、大きく一步、踏み出した。

そして、冬獅郎くんが背負っていた刀の鞘をすばやく抜き取る。

ガキン！！！！

烈しい音と共に、スタークの刀と、黒崎くんが打ち出した鞘が交錯した。

「甘いねえ、鞘ひとつで・・・」

「正解！大紅蓮氷輪丸！！」

同時に、冬獅郎くんが声を放つ。

その衝撃で、轟音ともに、部屋が崩れ落ちた。

スタッ、と冬獅郎くんが屋根の上に飛び降りた。

背後に、乱菊さんと朽木さんも見える。

冬獅郎くんの背後で、とてつもない大きさの龍が形作られてゆく。

氷でできたそれは、生き物のように空に大きな翼を広げた。

冬獅郎くんの目は、全く揺るがずにスタークを見てる。

でも・・・きつと、頭がいい冬獅郎くんには、分かっているはず、なんだ。

「黒崎、朽木、松本。逃げろ」

「隊長！」

「これは命令だ！」

その冬獅郎くんの肩を、黒崎くんがぐつ、と掴んだ。

「俺はお前の部下じゃねえ」

「・・・お前には言っても無駄そうだな」

「ほう、まだかかってくるのか」

穏やか、とも言えるスタークさんの声が、今はとても冷徹に聞こえた。

「逃げて!!」

叫んだあたしの声に、黒崎くんは決然とした視線を返した。

「・・・井上を放せ!」

スタークは、抜き身の刀を、黒崎くんと冬獅郎くんに向けて・・・ニヤリ、と笑った。

陽光が当たっている黒い瓦屋根を、液体が滑ってゆく。ぼたり。

それは真紅の雫となり、道に落ちていく。

誰にも見えないその血痕の下を、家族連れが笑いさざめきながら通り過ぎていく。

その笑い声が、あたしの耳に、あまりにも空虚に響いた。

「スターク・・・さん」

あたしは、あたしを離れた破面の男に、話しかける。

「これ以上やるなら舌を噛みます。あたしが死んだら困るんでしょ?」

「それは困るね」

あたしが佇む瓦が、カタカタを音を立てる。それくらい、あたしの全身は震えてた。

立ってるのが、やっとなくらい。

あたしの足元には、黒崎くん、朽木さん、恋次くん。

冬獅郎くん、乱菊さん、一角さん、弓親さん。

そして、浮竹さん、京楽さん。

あたしを助けようとして最後まで戦った9人の体が、ピクリとも動かずに横たわってた。

「・・・ただし」

震えないで、あたしの足。

あたししか、皆を護れないんだ。

あたしはスタークを振り返った。

「ひとつだけ、条件があります。

もしあたしが皆の傷を治せるなら、あたしは貴方と一緒に、虚圏に行きます」

「受け入れがたい」

新しい声が、あたしたちの会話に割って入った。

あたしが振り向くと、そこにいたのは、真っ白な肌に黒い刺青をした、色素の薄い目をした新手の破面だった。

「ウルキオラか。見てたのか」

「これが俺の仕事なのでな。・・・娘。お前に交渉する権利など無い」

あたしは震える右腕を左手で押さえつけて、ウルキオラ、と呼ばれた男を見返した。

「ま、いいじゃない」

その緊張の中にぼん、と言葉を放ったのは、驚いたことにスタークだった。

「生きていたところで影響なさそうだし。

今はこの子を確実に虚圏に連れてくのが優先じゃないの？」

数秒の沈黙の後、ふう、とウルキオラはため息をついた。

「NO・1の貴方にはむかう気はない」

その言葉を受けて、スタークがあたしの顔を見る。

「言っておくが、あまり待てないよ。また援軍が来たら面倒くさい」
それは、苦戦するっていう意味じゃない。

あたしは、急ぎ足で皆のところへ向かった。

「ごめん・・・ね」

皆の傷口は、ひとつひとつ、致命傷に近いものだった。
ほうつておけば、きつとあと10分ももたないだろう。
即死じゃなかった分、まだ幸いだったんだろう。

その傷口を見るたび、あたしの心にも穴が開いていく。

あたしの、せいだ。

あたしがいなければ。こんなことにはならなかったんだ。
そして、皆があんなに必死になって止めようとしたのに、あたしは
虚圏に行くんだ。

あたしのことを、裏切り者だって、そういうのかな。

それでもいい。と思った。生きていてくれれば。

みんなのあの笑顔が戻るなら、そこにあたしがいなくてもいい。

最後に、黒崎くんの隣に、あたしは跪いた。

着物からのぞいた首から胸にかけて、体が分断されそうなくらいの
切り傷が見えて、あたしの指が震える。

目を閉じて、力を解放した。

その時。

がくん、とあたしの袖が引つ張られて、あたしは慌てて目を開けた。あたしの袖を掴んでいたのは、黒崎くんの指。

黒崎くんの顔をみたけど、意識はもどってないみたいに見える。

あたしは、そつとその指を取った。

中々離れない。

懸命にその指を離そうとしていたとき・・・思いがけないくらい唐突に、涙がこぼれた。

不意に、分かったんだ。

どうして、あれほど黒崎くんが「怖かった」のか。

それは・・・きっと、あなたの存在が私の中で大きすぎて。

それほどまでに、好きだったからだね。

二度と現世に戻ってこれなくても冷静にいられたのは、あなたに会う方法は残されていたからだね。

でも・・・

スタークと共に行けば、もうきつと、二度と黒崎くんに会えない。

黒崎くんの日常から、あたしが、消える。

「やだよ・・・」

一緒にいたい。

こんな時になって、これほどまでに重大なことを、思い出させるなんて。

「オイ、そろそろ行くぞ」

スタークの声が聞こえた。

あたしは、ぐいっと涙を拭う。

そして、髪を止めていたヘアピンをこっそりと取り、黒崎くんの手の中にすべり落とした。

「別れはいえたか」

あたしは、涙をぐつと握って、黒崎くんを見下ろして・・・立ち上

がった。

きつと、これ以上哀しいことは、あたしの人生にはもう、起こらない。

泣くことも無い。

そんな気がした。

- - - - -

この展開を一読して、「ええ、今頃（今更）？」って突っ込んでも・・・いいです（笑

【23】 陰裏の絶望1 悪夢

真綿で首を絞められるように、あたたく息苦しい夢を、延々と見ていたような気がする。

途中で薄目を開けると、俺を間近で覗き込んでる顔がぼんやりと見えた。

「日番谷くんっ！聞こえる？日番谷くん！」

「他の、やつらは・・・」

喉元から出た声は、誰の声だってくらいかすれてた。

ああ、鉛のように体が重い。

「大丈夫、大丈夫だから」

雛森。

なんで、そんな必死な声出してんだ。

大丈夫、なんだろう？

その時、俺の頭の中に、真紅がよみがえった。

閃光のように刀が奔った刹那、まるでシンメトリーの絵のように血を吹いて倒れた浮竹と京楽の姿。

俺の頬に散った、その血の赤さとぬくもりまで・・・思い、だした。

「うつ・・・」

俺はとっさに起き上がった。

ガララ、と音を立てて、人工呼吸器だの管だのが下に落ちた。腕をベッドにつこうとしたが、全く腕に力が入らない。

そのままガクリと崩れ落ちそうになるのを、華奢な腕が支えた。

「日番谷隊長！」

カーテンを開けて入ってきたのは、卯ノ花隊長だった。

「よかった・・・目が覚めたんですね。
でも、まだ動けないはず。無理をしてはいけませんよ」

俺は、また俺をベッドに寝かそうとする雛森の手を振り払った。

「卯ノ花隊長！先遣隊の他のメンバーは？黒崎は！井上織姫は？」

「誰も死んではいませんよ」

「・・・本当、か」

声が、かすれた。

でも・・・そんなはずはねえ。

黒崎も、松本も、朽木も。

目の前で倒れる所を見てる。

「井上織姫さんが、その治癒能力を使って貴方がたを助けたのです
俺のその疑問を感じ取ったように、卯ノ花隊長が穏かに言った。

「・・・井上織姫は、どこに」

「おそらく、貴方がたを助ける事と引き換えに・・・虚圏へ」

ダンッ、と音を立てて、俺は壁を殴った。

まだ癒えきっていない胸の傷が痛んだ。

日番谷くん！雛森が悲鳴をあげて、俺の腕を押さえる。

「総隊長は、すでに経緯をご存知です。

井上織姫を護れなかったことについては、不問にすると。

三隊長が正解しても傷も負わせられなかった今回の破面・・・

アジューカスの強さは、我々の予想外のものでしたから。

我々も、戦略を練り直す必要があるでしょう」

戦略。

あの實力差を埋める、どんな戦略があるっていうんだ？

そう言おうとして、俺は喉元まででかかった言葉を飲み込んだ。

相手は隊長格よりも強い。

そして我らは負けられず、死ねないのだ。

そう総隊長から聞いてもまだ、どうにかなると思ってた。

その自分の甘さと言葉の重さが、文字通り身に染みた。

「傷を負った方々は皆、この四番隊舎で眠っておられます。貴方は隊長の中では一番傷が浅かった。

とはいえ、無理をできる状態ではありません。

しばし、お休みください」

決して大きくは無く、穏やかな声。

しかし、それは絶対に逆らえないような力を持っていた。

「・・・はい。ありがとうございます」

「いいえ。命が助かって、本当に良かった」

俺が頭を下げると、卯ノ花隊長は口元に微笑を浮かべた。

そして、俺たちに一礼するとカーテンを閉めて出ていった。

「・・・日番谷くん」

顔を上げると、雛森が唇をかみ締めて俺を見ていた。

こいつは藍染に裏切られて以来、ずっとこんな顔ばかりしている。

「そんなことは藍染様に言ってくれよ」

藍染の名が、直接破面の口から出たことを思い出す。

それを伝えたら、こいつはどうするんだろうか。

振り切れるのか、それとも耐えられなくなるのか。

その顔を見てたら、それを試す気なんておきるはずがなかった。

「大丈夫だ」

俺はそう言つと、するりとベッドの下へと降りた。

足元はふらついたが、何とか歩くことはできそうだ。

「日番谷くん！寝てなさいって卯ノ花隊長が・・・」

「雛森！何度言ったらわかんた、俺は日番谷『隊長』だって・・・」
俺は雛森を振り返ってそこまで言っ、言葉を急に止めた。

「解も完全じゃない。」

部下も、仲間も護れない。

そんな無力な隊長がいていいんだろうか。

錐のように、そんな考えが胸を突いたからだ。

無言で雛森に背中を向けた俺に、手を貸そうとした雛森が呟いた。

「なんだか、様子変だよ・・・？」

「うるせ。ちょっと他の奴らの様子見にいくだけだ」

まだ、あのスターク、という破面の霊圧に当てられてるのかもしれないーな。

胸の奥の消えない疼きを感じながら、俺は足を踏み出した。

【24】 險裏の絶望2 乱菊の誓い

俺が病室の扉を開けたとき、ベッドの上の松本が、饅頭をくわえたところだった。

「え？あ、隊長！」

俺と目が合った瞬間にぼたり、と饅頭を落とし、反射的に手でそれをキャッチした。

「元気そうだな松本・・・」

「隊長、目が覚めたんですか？」

つい30分前、眠り姫みたいに寝てるところを激写・・・」

「激写ってなんだ！」

「いえ、なんでもありません」

ダメだ、今はこいつと言い争う体力も惜しい。

俺はため息をついて、後ろ手で扉を閉めた。

「座ってくださいよ隊長。右足、折れてたって卯ノ花隊長が言っていましたよ」

「使わなきゃ平気だ。それにちょっと様子見に來ただけだからいい」
確かに右足はうまく動かないが、井上織姫のおかげか四番隊のおかげか、ゆっくりなら動かせる。

さつきも、手すりを使って左足だけで跳ねてきていた。

四番隊士に見つかればすぐ戻されただろうが。

「雛森は・・・？あの子、隊長のそばを1ミリも離れないって形相で座ってましたよ」

「十番隊舎に、俺の着物を取りに行ってくれてる」

「その隙に、あたしの様子を見に來たってトコですね？」

松本は妙なところで鋭い。

「なんだか懐かしいですねー、その格好」

白い寝巻きを羽織っただけの俺を見て、松本は何が面白いのか笑い出した。

「なんでだよ？」

「流魂街の隊長ん家で、初めてまともに隊長と口利いたとき。寝巻き姿だったでしょ」

「ああ・・・」

あの時のことは、今でもはっきり覚えている。

松本は、俺が初めて出会った現役の死神だ。

斬魂刀を携え、死覇装をまとうその姿に、全く、1%も憧れの感情を抱かなかった、といえば嘘になる。

あつという間にその感情は消えうせたが、今でも松本が、俺の恩人なのは間違いないと思っている。

「傷は大丈夫なのか？・・・すまなかった、庇ってやれなくて」

松本は、俺にとってはただの部下の一人じゃない。

大笑いでもするかと思った松本は、案外まじめな顔をしていた。却って俺が面食らったくらいだ。

「あたしと朽木の傷は隊長達と比べたら、大したこと無いです。

あたしこそ、隊長の背中を護れず、申し訳ありません」

隊長、か。

破面とやりあって、相打ちで死ねと命じられる、無力な隊長ですまねーな。

どうせ・・・生き残る気なんてないんだろ？

スターク、とかいうNO.1十刃が言い残した言葉が、耳に生々しくよみがえっていた。

「・・・いや、俺はいい。お前が生き残ることを考える」

そう行つて松本に背を向けようとした時だった。

俺の眼前に突如跳んできた饅頭が、ドアに当たつてべちん、と妙な音をたてた。

「な・・・」

俺は、ぽかんとしてベッドを振り返つた。

すると、裸足のまま、寝巻きが肌蹴るのも一向に構わず、大股で俺の方に歩いてくる松本が見えた。

「松本！食い物を大事に・・・」

「饅頭なんてどうだつていいんですッ！」

まともに向かいあえば、松本は俺より40センチほど背が高い。

その迫力に俺が一步下がろうとした時、松本が俺の肩を捉え、ダン、と扉に押さえつけた。

「！おい・・・」

振り払おうとしたが、骨折したての右足に力が入らねえ。

顔を上げると、目の前に思いがけず真剣な・・・というよりも腹を立てた松本の顔があつた。

「何なんですか？」

「それはこっちの台詞だ！」

「『俺はいい』つて、どういう意味ですか！」

「・・・え？」

「死んでもいいつて、そう聞こえましたよ」

読まれてる。

俺がその言葉を口にする前に思ったことを、こいつはぼんやりとでも読み取つてる。

そう思った俺は、とつさに目を逸らした。

目を合わせれば、全てを読まれるような気がして。

「あたし隊長に、死神になりなさい、って言いましたよね。初めて会ったとき。」

その時隊長は、死神になるって誓いましたよね、あたしに」
顔に、松本の視線を感じる。

「あたしも一つ誓ったことがあるんです。」

あたしが誘った以上、絶対に死神として死なせたりしない、と」

「・・・」

俺が松本に視線を戻したとき、松本は既に身を起こし、俺に背中を向けていた。

いきなり動ける状態じゃなかったんだろう、片足を引きずっていた。

「死なないでください、隊長」

もしも俺がもつと強くて、もっと大人の男なら、絶対に死なないと返してやれるんだろうか。

どうすれば、今の俺でも、こいつの背中に、そう返してやれるんだろうか。

「不完全な正解しかできない者が一人」

その時頭をよぎったのは、スタークと名乗った破面が残した一言。

「・・・松本」

俺の声に、松本が振り返った。自分の放った言葉に自分で傷ついた、そんな目をしていた。

「お前に頼みがある」

【25】 險裏の絶望3 焰立つ

目が覚めて三日目。

俺は、カーテンの向こうに広がる隊舎棟の屋根に朝日が当たるのを見つめていた。

一番の深手を負った京楽と浮竹は、命に別状はないものの、まだ目を覚まさない。

他の先遣隊の奴らは、戦闘はまだムリだが、公務には復帰し始めていた。

俺は立ち上がると、纏っていた寝巻きをバサツと脱ぎ捨てる。裸の胸を見下ろすと、右肩から左の脇腹にかけて、袈裟懸けに斬り下ろされた傷が残っていた。

藍染に数ヶ月前やられた古傷は、左肩から袈裟懸け。その傷は狙ったかのように心臓の上で交差し、巨大な十字傷として残っていた。

貴方はまだ若いですから、こんな傷跡はすぐ消えますよ。

そう卯ノ花は言っていた。

女みたいに体に傷が残ることを、イヤだとは思わない。

傷は闘いの勲章みたいなもんだ。

でも・・・自分より圧倒的に強い敵にやられたこの傷を見ると、衝動的に絶望感が競りあがってくるのは、今の俺には避けられない。

勝てる方法は、見つけるんじゃない。創るんだ。

昨日俺を訪ねてきた黒崎が、言った言葉を俺は思い出した。

「冬獅郎。おめー、大丈夫なのか」

ガラ、と扉を開け顔を覗かせた黒崎が、俺を見て言った。

「ああ。明日には十番隊に戻る」

俺は、布団の上に広げていた書物を閉じて、黒崎を見返した。

布団の前に置かれた椅子には、雛森が深く腰掛け、うつらうつらと船をこいでいた。

黒崎の気配にも目を覚まさないなんて、よほど疲れているんだろう。

「雛森なら気にすんな。しばらく起きねーよ」

俺の声にうながされ、病室に入ってくる黒崎の足取りは、しっかりしていると言いがたい。

しかし、その引きずるような歩き方に目を奪われた俺は、正直ぎょっとして身を少し退いた。

黒崎の眼差しに、つい一週間前までは残っていた少年の甘さは、微塵も無くなっていた。

闇に光る獣の瞳のように、ギラギラと何かに飢えた、野卑な気配。その表情には、前には見られなかった孤独と影が、植えつけられていた。

たぶん、その孤独を癒せるのは、ひとりしかないのだろう。

俺は、傍で医療道具の整理をしていた看護婦に、少し手を上げて見せた。

それだけの動きですぐに分かったのだろう、看護婦は一礼して、そつと部屋を出て行った。

「・・・井上織姫を助けに、虚圏へ行くんだな」

「ああ」

ベッド脇に腰掛けた黒崎は、同時に背負っていた斬魂刀を抜き、切っ先で床を突いた。

「その斬魂刀、直ったのか」

「ああ。俺が気を失ってるうちに、直ってたらしいぜ」

それは、おそらく何が何でも井上織姫を助けに行く、という決意が

させたものだろうと思う。

斬魂刀は持ち主の魂。持ち主の命がある限り、何度でもよみがえる。

「勝てる方法はねーだろ」

No.1十刃のあの実力の前に、一矢を報いることも出来ず敗れたのは、二人とも同じだ。

「勝てる方法は、見つけるんじゃないやねえ。創るんだ」

ぐっ、と柄を握る拳に力を入れた、黒崎を俺は見つめる。

「でも、井上織姫をさらった目的が予想通りなら、あいつらは井上に危害は加えねえはずだ」

「・・・そっという問題じゃねえよ」

俯いた黒崎の表情は、その腕に隠れて見えなかったが、その声は低く沈んでいた。

「井上が、全く知らない世界で、知らない奴に囲まれて、どこかで独りでいると思うと。」

その風景を考えるだけで、俺はいてもたってもいられねえんだ」

この男は、止まらねえな。

初めからわかってはいた。

例え何があるうと、いったん決めたことは最後まで、必ず貫く。

俺が知っている黒崎はそういう奴だったし、これからもう有り続けるんだろっ。

黒崎が俺のところを尋ねてきた理由は、聞かなくてもはつきりしている。

「浦原喜助のところを、訪ねるといい」

俺はひとつ、ため息をついてから言った。

黒崎がハッとこちらを見る視線を感じる。

「山本総隊長が浦原喜助に、虚圏への入り口を創るよう命じてた。もう完成しててもおかしくねえぞ」

それは、隊長しか知らない密命。

しかし、今の黒崎には必要な情報だろう。

「サンキュな」

「用はそれだけだろ。早く行け」

黒崎は立ち上がると、チラリと俺を見た。

「冬獅郎。おめーは勝算をしっかり考えてから、それから虚圏へ来てくれよ」

「なんだそりゃ。てめーにできねえことを、俺に押し付けんな」

俺が不機嫌さを隠しもせずさういうと、黒崎は苦笑した。

「俺とお前との違いは、大切なものを奪われたか、そうじゃねえかだ。」

お前はまだ奪われてねえから、冷静でいられるはずだ」

そして、今のコイツにしては優しい目を、雛森の上に落とす。

雛森の背にかけておいた、俺の隊首羽織を見下ろした。

「井上を浚われて分かったよ。」

ヒトには、どうしても失っちゃならねえものがある。

そのの前には、てめーのプライドとか、意地とか、命とか全てがどうでもよくなるほどに」

「・・・黒崎」

「お前は護れよ。最後まで」

「お前も、だろ。まだ終わっちゃいねえんだ」

俺が言うつ、黒崎は肩越しに振り返るとニヤリと笑った。

圧倒的な劣勢には全く代わりが無いのに。

なぜだろう、その笑顔を見ると、全てがうまくいく気がした。

もうアイツは、虚圏に入っところかもしれねーな。

俺は雛森が持つてきてくれていた死覇装に袖を通した。

せいぜい三日身に付けてないはずなのに、その黒さがなんだか新鮮だった。

俺も、ボヤボヤしてられねえ。

ぎゅっ、と帯を結び、隊長羽織を死覇装の上にまとう。

「日番谷くん！」

その声に振り向くと、雛森が立っていた。

「もう。日番谷くん、乱菊さんや朽木さんよりよっぽど重傷なんだよ？」

まだ外出許可出でないじゃない」

「総隊長に面会の約束を取ってる」

俺は氷輪丸を背中に担ぎながら返事をした。

「総隊長に？なんで」

「完全な正解を会得する方法を、総隊長に聞きに行く」

「えっ？でも・・・」

雛森の声が途中で小さくなる。

俺の正解が完全なものじゃないってことを、知ってるのは雛森くらいだ。

松本にも言ってなかった。

他の隊長の中には気付いてる奴もいると思うが、あえて言うことでもねえ。

「こ、こんなタイミングでそれを聞きに行かなくても・・・」
「今だからだ」

俺はベッドの布団を直しながら答えた。

「あのスタークって破面と戦ったとき感じたのは恐怖じゃねえ。抗う気力もなくなるような『畏怖』なんだ。分かるか」

「・・・」

雛森は、気圧されたように黙っている。

「怖いのは、自分より強い奴が現れることじゃねえ。

負けることでも、殺されることでもねえ。諦めることが、何よりも怖えんだ」

「・・・だから、強くなりたいの？」

「そうだ」

「どうして？死んじやったら、何にもならないよ。

日番谷くんを必要としてる人、いっぱいいるのに」

なんでだろう。

俺はふと、雛森の真剣な顔を見てそう思った。

「うまく、言えねえけど・・・ただ。俺は、俺に矛盾したくないんだ」

雛森はしばらく黙ってた。

俺だってうまくいえないことを、どうやって雛森が理解できるだろう。

その上、戦いの向こうにいるのはあの藍染だ。

でも、雛森は俺に歩みよると、ベッドの布団に残っていた皺を伸ばし、その上に枕をポンと置いた。

「しょうがないね。卯ノ花隊長には、あたしから説明しておくから」
「・・・悪い」

俺が雛森に背中を向け、個室から出ようとした時、かすかに、雛森の声が聞こえた。

「あたしもいつか、隣にいけるように頑張るから・・・」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
必要かわかりませんが補足。

「焔立つ」の「焔」は、「ほむら」と読みます。

【26】 險裏の絶望4 氷輪丸の疑惑

約30分後。

俺は、一番隊舎に設えられた部屋で、山本総隊長と向かい合っていた。

しかし。

なんで茶室なんだ・・・？

正直、話が切り出しづらい。

俺は隊首会がいつも開かれている、総隊長のみ座る椅子がある広間を思い出した。

あの場所のほうが、雰囲気的に頭が下げやすい。

「どうじゃな、この抹茶。最近変えてみたのじゃが」

俺の思惑など露知らずか、総隊長はやたらとでかい湯呑みを俺に薦めてきた。

最近変えたも何も、総隊長の煎れた茶を飲むのは初めてだ。

まずい・・・

「で、本日は何の用で来たのじゃな」

そう思ったとき、総隊長から話を切り出してきたので俺は正直ほつとした。

湯呑みを体の脇に置くと、ダン、と指を畳について頭を下げた。

「此度の失態は、先遣隊を率いた私の責任です。申し訳・・・」

「おお、日番谷隊長。此度のことじゃがな」

ずずつ、と茶をすすりながら、総隊長は思い切り俺の話をさえぎった。

「破面が空座町に現れる原因の特定から、井上織姫の保護の指示まで、非常に迅速であった。」

力量が上回る破面を、連携で押し返した手際も見事である。

お主が隊長になるときには反対意見もあったのじゃが、押し切つてよかったと思つておる」

「は？しかし・・・」

「しかし、まだまだの処もあるの」

下げていた頭を上げて総隊長を見やると、そこには意外なくらい穏やかな総隊長の瞳があった。

「責任を自分に持つて行き過ぎる。

京楽を見よ。いつも要領よくやつておる。

浮竹も朽木も、あれでうまく責任を分散させておるのじゃ。

京楽のようになれとは言わんが、あまり正直すぎると持たんぞ」

「はぁ・・・」

「何より。隊長たるもの、頭を簡単に下げてはならぬ。

お主らは3000人が所属する護廷十三隊の頂点なのじゃ。

お主らが常に迷わず、自信に満ちておるからこそ、部下は迷わずついていけるのじゃ」

自信。

その言葉は、今の俺には少しだけ、堪える言葉だった。

ふむ、と総隊長は口の中で唸ると、黙つたままの俺に言った。

「儂に伝えることはそれだけか、日番谷隊長。

だとすると、儂はお主を見誤つていることになるのう」

「・・・総隊長はご存知のはずです。俺の卍解が、不完全だということ」

俺は意を決して、体を真つ直ぐ起こすと総隊長の目を見て言った。

卍解の会得は、隊首試験に合格して隊長になるものの必須条件。

俺は歴代でただ一人、不完全な卍解でありながら、隊首試験に合格した者のはずだった。

その理由を、俺はまだ聞かされていない。

総隊長はしばらく黙っていたが、俺がこれを切り出すのは予想していたのか、意外そうな顔はしなかった。

「総隊長。今回の戦いは、卍解を会得せずにして乗り切れるものではありません。」

卍解に至る修行のため、しばし隊長職を休職させては頂けませんか」総隊長は、それでも何も言わなかった。

代わりに、深く長いため息をついた。

「お主が、そこまで思いつめておったとは。」

お主が留守の分、隊長業務はどうするつもりじゃ」

「松本には、俺がいない間の業務の仕切りを頼んであります」

三日前、俺がそう頼んだときの松本の顔を思い出した。

普段、自分の業務もこなしきれねえくせに、あの時の松本は本当に嬉しそうだった。

隊長の力になれるなら何でもやりますよ、と言って。

ふむ、と総隊長は唸り、改めて俺を見た。

「休職については、認めよう。」

しかし・・・お主が望んでいるような結果は、望めぬかもしれんがな」

「完全な卍解は難しい、ということですか？」

「そう結論を急ぐな・・・氷輪丸を、見せてくれぬか」

その言葉に、俺は茶室の外に立てかけてあった氷輪丸を持ってくると、総隊長に手渡した。

総隊長は静かに鯉口を切り、10センチほど抜くと、その青白い刀身を見下ろした。

「・・・お主の卍解が不完全なことは、隊首試験の際、大きな議論

を巻き起こしたのじゃよ。

實力は卍解と同程度はある。しかし、それは卍解と呼ぶには未熟。結局儂が、反対意見を押し切った理由は・・・

お主には酷だが、氷輪丸で完全な卍解を引き出すこと自体が不可能かもしれない、と思ったからじゃ」

その言葉は、卍解さえ会得すればどうにか可能性はある、と思っていた俺の心に、ヒヤリと染み通った。

「総隊長。それはどういう・・・ことですか」

「儂もこのような事例は初めてでな。確実なことは言えんのじゃ。これは推論にすぎんが・・・

問題は、斬魂刀側にあるのかもしれない。

つまりお主の問題ではなく、氷輪丸が斬魂刀として不完全な可能性がある」

「そんな・・・まさか」

俺は氷輪丸を見つめたまま、次の言葉を見失って黙り込んだ。

その時、茶室の外に気配がふつと現れる。

「雀部おさかへか。どうしたのじゃ」

総隊長が茶室の向こうに声をかけると、すぐに返事が戻ってきた。

「現世の者と、死神数名が指示無しに虚圏へ潜入しました。

侵入者の名は、阿散井恋次、朽木ルキア、黒崎一護。

そして、石田雨竜、茶渡泰虎の合計5名です」

まあ当然だろうな。

俺は、最後に見た黒崎の、不敵な笑みを思い出した。

総隊長の顔を見やったが、やはり意外そうな表情はそこにはない。

「ふむ。まあ、思ったよりは早かったな。しょうがあるまい。

更木、卯ノ花、涅、朽木。以上4隊長に出陣の準備を指示しておけ」
よどみない口調を鑑かんがみて、このくらいの展開は織り込み済みだっ

たということか。

「総隊長！」

俺は膝で、総隊長の近くまでにじり寄った。

「俺も・・・井上織姫を助けに行きます」

「ならぬ」

「なぜですか！」

「お主こそなぜじゃ。一人の命で感情的になるでない」

「人一人でも・・・」

「人間のようなことを言うでない。お主は死神じゃろう!!」

総隊長の一喝が、狭い部屋の中に木霊し、俺の体はその場で凍りついた。

何より、その言葉が頭に突き刺さっていた。そう。俺は・・・死神だ。

現世とソウル・ソサエティの魂の量を同程度にコントロールし、世界を維持するのが死神の役割。

魂の一つ一つに執着するなど、死神失格の証。

俺は無言で元の場所に戻った。

「・・・申し訳ありませんでした」

「よい。今は、より多くの隊長格に、破面との戦い方を身をもって知らせる必要があるのじゃ。

できれば、ヴァストローデ級が生まれる前にな。

そしてお主には、今他にやることがある。

現世に、斬魂刀を具現化する装置を持つ人物がおる。そこへ行くがいい」

そういうと、総隊長は氷輪丸を俺に手渡した。

その刀は、いつもよりも重く感じた。

【27】パンドラ1 翡翠色の訪問者

猫の姿になって良かったことの一つは、毛色が黒いこと。

夏はとにかく、こんな弱い日差しの中で日向ぼっこするにはぴった
りじゃ。

僕は、くぁ・・・と大口を開けてアクビをすると、顎を座布団につ
けた。

店の中からは、ジン太とウルルが何やら騒いでいる。

大方、ジン太がまた、無体なことをウルルに吹っかけて困らせてい
るのだろう。

と、思ったとたん、

「ひええ！」

ジン太の悲鳴が聞こえた。

テッサイにぶら下げられたな。

その後、その場はシン、と静まり返る。時折通る車の音が、心地よ
いBGMのようじゃ。

まるで、「ヘイワなセカイ」のように。

平和じゃない、というのは良くないことじゃ。

昼寝もできぬし、おちおち日向ぼっこも出来ぬ。

しかし、突如空を走る雷光のように、消しきれぬ衝動を感じること
も、ある。

何かに牙を剥き、引き裂かなければ生きていると実感できぬ、暗く
野蛮な衝動を。

「夜一サン、ミルク飲みます〜？」

その時、台所から聞こえてきたのは、その場で最も緊張感のない音

声。

間延びしきつた、浦原喜助の声だった。

「要らぬ」

儂は短く返す。しばらくして、浦原のぺたり、ぺたりという裸足の足音が聞こえた。

家の中でも帽子を深く被り、その奥から目だけを光らせる、最悪に怪しい格好だ。

よっこいしょっと、と爺さんくさい掛け声をかけて、儂の横に胡坐を掻いた。

「生きているのか、おらぬのか・・・」

主語のない儂の独り言に、浦原が視線を向ける。

「大丈夫でしょー。黒崎サンなら死んじやいませんよ、まだ」

まだ、か。

儂は浦原の顔を見返した。

視線が空中でぶつかるが、胡散臭いばかりで真情がうかがえぬ。

長い付き合いなのに、儂はただの一度も、この男の心を覗いたと思っただことがない。

・・・まあ、人の心などに関心がない、儂の気質のせいかもしれぬが。

「山本総隊長、連絡よこしたんでしょう？」

「ああ。今朝、な」

地獄蝶から聞こえてきた、山本総隊長の声。

相変わらず不必要なまでに格式ばった声が、おかしいながらも懐かしかった。

間違いなく、精霊廷始まって以来の重大事件。どのように裁く気なのか・・・

死神だけで戦いに勝ち抜く可能性は、零に近い。

少なくとも隊長格なら、そのことは十分すぎるほどに分かっているじゃろう。

その意味で、元々この戦いは、戦う前に既に敗北しているのだ。

おそらく、この戦いで、最初の死者が出るだろう。そんな気がした。

全く・・・

精霊廷なんて、クソくらえと思っていた。関係ない、とも。

でも、あの場所には、儂のなじみの者たちが生きている。

破面ごときに殺されるには、余りにも惜しいやつらが。

「感情に流されちゃおしまいっスよ。死神が」

儂はもう、死神ではない。そう言い切るには、その言葉はあまりにも気持ちに合っていない。

儂はつかの間、黙り込む。

そう。浦原の言うとおりじゃ。儂は、今戦いに出るわけにはいかぬ。

儂には、儂の役割があるからじゃ。

「・・・お客さん、来たようッスよ。地下に直接ね」

「ああ」

儂は座布団の上で、身を起こした。

人の姿に戻り、浦原と共に、巨大な地下空間へと降り立つ。

そこで初めに目に入ったのは、銀色に輝く髪と、死覇装を纏った黒い背中だった。

隊首羽織は身につけておらぬ。

しばらく本業を休むくらいの覚悟で、ここに来ているのじゃろう。

こちらの気配には気づいているはずじゃが、儂らに背を向けたまま微動だにしない。

その視線の先には、宙に浮いた、巨大な穿界門があった。
ちょうど1日前、一護たちが虚圏に乗り込んだ、あの門だ。

「・・・気は焦るでしょうねえ。見てみぬフリしときますから、追いかけてみます？」

虚圏は砂の世界だ、アナタの能力はきつと、役に立つはずですよ」
浦原・・・そんなこと言つて、本当に行ったらどうする気じゃ。

儂が口を挟もうとした時、少年の割に低い、アルトが返した。

「大丈夫だ。冰雪系なら朽木ルキアが行った」

「でも朽木サン、席無しのヒラ隊員ですよ」

浦原がゆつくりと、少年の後ろ姿に近づく。

「あいつは弱くねえよ。場数を踏めば化けられる」

「それ聞いたら喜びますよ、朽木サン」

横に並ぶと、前を見つめたままの日番谷冬獅郎を見下ろしてニヤリと笑った。

「ここで踏ん張る覚悟、出来てるみたいッスね」

ほお。

初めて振り返った瞳にある翡翠に、儂は声を漏らす。

擦れっからし揃いの隊長の中にいるとは思えぬ、底まで澄んだ色をしていた。

奥まで見通せそうなその彩^{いろ}に、こちらのほうがドキリとしてしまう。

「ここに、斬魂刀を具現化する道具があると聞いたが、それか？」

「うむ」

儂は手にした、ほぼ等身大の白い人型に目をやった。

「これまでに、その浦原と、一護が卍解に成功した。

この道具に突き立て、具現化した斬魂刀を、屈服することだな。

お主の状況は、山本総隊長から大体は聞いておる。総隊長の頼みじや、最後まで付き合おう」

「ああ。恩に着る」

生意気盛りの少年らしい気質を、十二分に持った隊長。

その噂が嘘に思えるほど律儀に、冬獅郎は頷いた。

そして、無造作に柄に手をやると、鯉口を静かに切った。

「おう、危ないッスね」

すぐ隣にいた浦原が、とっさに後ろに下がった。不用意に立っていた儂も同様。

ただスラリ、と刀を抜き、ゆったりとした足取りでこちらに歩いてきた、それだけじゃ。

しかし、それだけでも十分に、人を圧する力があつた。

完全な卅解を会得していなくても隊長格。

同じ修行前でも、浦原や一護とは迫力が違うようじゃ。

「こりゃ、楽しみですね」

刀の切っ先が人型に突き立つ直前、浦原がニヤリと笑うのが見えた。

【28】パンドラ2 真っ向勝負

「くっ！」

儂は、爆発的に冷氣が噴出すのを見て、顔を腕で覆った。

しかし、直撃するかと思った霊圧は、儂の前にスッと現れた影に遮られた。

「マトモにこの霊圧、浴びないほうがいいッスよ」

浦原が、儂の前に立ち、「紅姫」を儂らの前で構えていた。

その体の向こうで、パキパキと音を立て、氷が一箇所に集まってゆく。

それは胴体となり、翼となり、牙となった。

幾万の氷のカケラで形作られたその体は、白から深い藍までグラデーションがかっている。

形作られると同時にキラキラと輝く姿は、幻想的なまでに美しかった。

口の部分が大きく裂けると同時に、地響きのような咆哮が木霊し、ビリビリと空気が振動した。

「なるほど。氷輪丸の本体は龍の姿ですか。冰雪系最強、と呼ばれる刀にはふさわしい」

瞳に当たる部分が真紅に染まる。その瞳が、意志を持って儂らを射るように見た。

君臨者の、高みから見下ろす視線。

しかし一瞬のうちに牙を剥き、襲い掛かってくるような激情。

一枚のカードの裏表のように、切り離せない冷と熱を合わせ持つ霊圧。

そして、斬魂刀の本体とは、持ち主の魂から生まれるという。

これが、お主の本性か。

氷輪丸を見ても微動だにせず、たたずむ冬獅郎の姿を見て、僕は心中つぶやいた。

「日番谷冬獅郎。我になんぞ用か」

「氷輪丸」の声は、咆哮と同じく、地響きや雷鳴のように低く轟いた。

「聞きたいことがある」

氷輪丸を見返す冬獅郎の髪は、冷氣に煽られて、たなびいている。

「正解には、斬魂刀との理解。そして屈服が必要だ。俺に足りないものは何だ？」

もちろん
「諸共に」

氷輪丸の答えは、短かった。

「どういうことだ！」

「貴様が真実から、目を逸らしているが為。貴様には我が『見えてはおらぬ』」

「・・・えっ？」

冬獅郎から、年相応の声が漏れたのは、よっぽど意外だったのだろう。

「・・・浦原。どういうことだ？」

僕は、横にたたずむ浦原に、小声で問いかけた。

「今の氷輪丸は本質ではない、と言っているようですね。」

ただ、『目を逸らしている』の意味は、アナタしか分かりませんね。日番谷隊長？」

振り返った冬獅郎の瞳は、いつもどおりの無表情だが、戸惑いも見える。

理由に思い至らない、そんな顔だ。

「その通りだ」

氷輪丸が、ザッ、と一歩前に出た。

それだけで、冷たい靈圧が波のように迫ってくる。

ギリリ、とその瞳に、凶暴な光が宿った。

危ない、と察したのは一瞬。

「正解できるのか否か。全ての答えを握っているのは、貴様自身だ」
それと同時に氷輪丸は、目にも留まらぬ速さで、その口から冷気を吐いた。

凄まじい速さで、地面が氷に覆われてゆく。冬獅郎が瞬歩で飛びのいた。

「遅い」

地を這う冷気の先が、舌のようにうごめいた。

それは、冬獅郎の持つ刀に巻きつくと、一気に奪い取る。
そして、その口の中に刀を飲み込んだ。

「答えを知りたければ。この刀『氷輪丸』を取り戻してみるがよい」
冬獅郎が無言で、体勢を低くする。

口元で何か呟いているように見えたが、何を言っているのかまでは、聞こえなかった。

「まずい、避ける！」

儂が叫ぶよりも速く、氷輪丸は口から氷の柱を次々と打ち出した。

「破道の三十、氷雨！」

冬獅郎の凜とした声が、同時に響いた。

「とっ！」

浦原と儂は、数十メートル離れた岩の上に避難する。

「帽子が凍っちゃいましたよ・・・」

大気が振動し、氷輪丸と冬獅郎の立つ位置の中央で、圧倒的な質量の氷がぶつかり合う。

そして、双方背後に飛び下がった。

「互角、か」

儂がそう呟いた目の前で、氷輪丸の体に異変が起きた。

霊圧を浴びたその体が、見る見る間に一回り巨大になる。

そうか・・・

氷輪丸は、冬獅郎の氷雪系の霊圧から生まれた龍。

その力を受ければ、ますます力をつけて当然だ。

「なるほど」

冬獅郎は、戦いの手を止め、軽く小首をかしげた。

戦いの最中というよりは、実験中のフラスコを前に考え込んでいるような表情だ。

「少々せこいな、この勝負・・・」

儂は苦々しい思いで口角をあげた時。浦原の飄々とした声が、静まり返った空間に響いた。

「氷輪丸は大きくなるけど、日番谷隊長は小さいままですねえ」

「・・・」

冬獅郎が、それこそ氷のような冷たい視線を、浦原によこした。

「ああ、日番谷隊長！そんな目で見られたら・・・アタシ凍っちゃいます」

バカヤロウ！

彫刻のようにビシバシと固められている浦原を見ても、同情心は起こるはずがない。

「てめえ。緊張感なくなるから、どっか行け」

もつともじゃ。

「いや、ちよつとこの空気を和やかにしようと・・・」

「だまれ」

冬獅郎と儂の声が重なった。和ませなくていいから、ちよつとは空気を読め。

「氷雪系の霊圧が一切ダメってことでしょ？ちよつとお茶でも飲ん

で仕切りなおし・・・」

「そうだよな」

更に怒りの言葉を投げつけると思ったが、冬獅郎は頷いた。
間髪射れず、右手を前にさし伸ばす。

「破道の六十、鎌鼬！」

決して軽度ではない鬼道を、無造作に放つ。

真空中で出来た刃を、相手に向けて打ち出す術じゃ。

斬魂刀でも斬り裂くと呼ばれるこの術を、受け止めるバカはいない。
氷輪丸でも例外は無いらしく、背後によける氷輪丸に詰め寄り、二
発、三発と打ち込んだ。

避け切れなかった一発が、氷輪丸の右の角にかすった。
角は砕けたが、すぐに元通り再生される。

なんで、右腕しか使わない？

左手も使えば、もっと数を撃てるだろうに。

「なるほど。冰雪系の鬼道じゃなければ、強化はされねえのか・・・
赤火砲！」

左腕に、紅い光が宿る。

二重詠唱か！

儂が思い立った直後、両手をバン、と組み合わせた。
紅い光は、あっという間に全身を包み込む。

違う。

二重詠唱は、二つの異なる術を時間差で打ち出す高等技術だ。

「これは・・・鬼道の融合か？」

「ほお。面白い術を使いますね」

帽子の鰐をクイツと指で持ち上げ、浦原が目を見張った。

冬獅郎の背後に現れたのは、三日月状の鎌鼬の刃。

ただ、そのサイズは冬獅郎の足元から、頭上にまで達する2メートル

ル近い巨大なものだ。

そして、今はその刃は、焼けた鉄のように真っ赤に色づいていた。

「じゃあ、焰ならどうだ？」

その霊圧に、氷輪丸が一步引いた。

その動きを見越していたのだろう、冬獅郎が電光石火の勢いで、その懷に飛び込んだ。

【29】パンドラ3 オーバーロード

氷輪丸が咆哮し、儂はその胸に、焰の刃が食いこんだのを見た。

「双蓮蒼火墜！！」

重ねて両手で放ったのは、炎熱系の中でも高位な、両手で蒼い焰を放つ技。

矢継ぎ早の攻撃に堪え切れなかったか、まともに受けた氷輪丸が背後に吹っ飛んだ。

ドオン！

巨大なものが岩にぶつかる轟音が響き、土煙でその姿は見えなくなる。

スタツ、と冬獅郎が軽い身のこなしで、地面に飛び降りた。

驚いたことに、息も切らせておらぬ。

「ひえー、最近の死神は、レベルあがってますねー」

確かに。浦原の声に、儂は頷かずにはいらなかった。

百年前の鬼道は、敢えて例えるなら、弓道のような面があった。

的の前に、弓を引き絞り・・・十分に引き絞ったところで、パアン、と放つ。

きちんと詠唱という「準備」を経て、100%の力を込めて撃つところが似ていた。

鬼道というのは単に威力だけでなく、放つ時の形式や美しさも問われる、一種の「芸術」とされていたのだ。

それに比べれば冬獅郎のこの戦い方は、例えるなら銃・・・それも、二挺拳銃だ。

詠唱破棄は当たり前、異なるタイプの術の融合に二重詠唱。

百年前なら間違いなく「邪道」の烙印を押されたに違いない戦い方

だ。

ただ・・・強い。

百年前の何倍もの速さで鬼道を放ちながら、本来の術の力を殺すどころか倍加させている。

「恐ろしい霊圧のキャパシティと、鬼道のセンスだけではない。かなりの実戦が必要なはずじゃ」

冬獅郎のような少年にそれほどの実戦を積ませるほどの、状況。この百年、徐々に嵩じてくる戦争の予感を背負い、皆戦ってきたのじゃろう。

そして、今が「その時」なのだ。

「刀を取ればいいんだっとな」

冬獅郎が、ふつと瞬歩でその場から消えるのを見て、儼は身を乗り出した。

「阿呆！軽々しく敵に近づくな・・・！」

そっういい終わるよりも前に、土煙の中から、次々と氷の刃が打ち出された。

その切っ先は、並の刀よりもよっぽど鋭い。

「うっ？」

そのうちの一発が、氷輪丸の直前まで迫っていた冬獅郎の胴に、叩きつけられる。

避けることなど出来るはずがない、至近距離とスピードだった。

言わんこつちやない！

小柄な姿が、背後の岩に叩きつけられる。

その氷が、背後の岩に体を縫いつけた。

「阿呆は良かったですねえ」

アッハッハッ、と呑気に笑う浦原に、儂は肩を落とした。
笑うとこじゃない。

一回、こいつの頭をかち割って、中を見てみたいものじゃ。

「ちえっ」

冬獅郎が舌打ちをすると、その体が赤く発光する。

焰が、一気に氷を押し包み、熱い水蒸気が爆発的に辺りに立ち込めた。

溶けた氷を押し分け、刀の鞘を握り締めると、一気に氷を振り払った。

水蒸気で視界が悪い中、地面に降り立ったその姿がよるめいた。

「おい、大丈夫か？」

「のぼせた・・・」

「は？」

儂は拍子抜けして、冬獅郎を見やった。

額に手をやっているせいで表情は見えないが、確かに顔が赤い。

氷に焰で対抗し続ければそうなるかもしれないが・・・

風呂上りの子供じゃあるまいし、という言葉を儂は飲み込んだ。

そういえば、子供じゃったな。

氷雪系の力を使うだけあって、本来熱には弱いのかも知れぬ。

全く。自分の力の強さに、身も心も追いついておらぬな。

この霊圧の強さ、飛び切りの暴れ馬の尻に火をつけて、その上に跨るようなものじゃろう。

それを乗りこなすだけの経験と、知恵はまだまだ、発展途上というところ。

だが・・・その二つを鍛えれば、この少年は化けるに違いない。

その間にも、氷輪丸の胸に出来た、石榴のような傷口は、元通りに

修復される。

「惜しいっスねー」

その割れ目から一瞬覗いた刀身に、浦原は惜しそうでもなく言った。そして、チラリと冬獅郎を見やる。

「氷輪丸は、鬼道を受けてもすぐ元通り修復する。

斬魂刀を持たないアナタが、どうやって倒すつもりです?」

「さて。どうするかな」

パタパタと手のひらで顔を仰ぎながら、冬獅郎が立ち上がった。

そして、チラリ、と穿界門を見やった。ニヤリ、と不遜に口角が上がる。

こんな時に笑うのか、と儂は心中驚いた。

一護の時も思ったが、最近の死神は、どこか全員イカレて来てないか?

「時間もねえし。ひとつ、賭けてみるか」

そして、照準を合わせるように、視線をぴたりと氷輪丸の前で止めた。

「おい、浦原喜助」

「はい?」

「この地下を覆ってる結界は、丈夫か?」

パシッ、と乾いた音が響き、大気が震えた。この感覚は・・・

浦原が、奴には珍しく素早い動作で、背後を振り返った。

「テッサイ! 結界の強化を頼む!」

「任せてください!」

いつの間に背後に来ていたのか、テッサイの大声がそれに返す。

「愚かな・・・鬼道は我には効かぬ。それより、次の攻撃を避ける方法を考えよ」

冬獅郎と向かい合った氷輪丸の体が、更に膨らんで見えた。

一口で冬獅郎を飲み込んでしまいそうな巨大な口が、光を放つ。

「その必要は、ねえ！」

冬獅郎の髪が、黄金色に染まると同時に、逆立った。

乾いた音と共に、その体のあちこちに、閃光が走った。

稲妻系の鬼道か！

「破道の七十六、雷吼砲！」

次の瞬間。

周囲がまばゆい光に覆われ、儂は反射的に目を閉じた。

ひゅーう、と浦原の口笛が聞こえると同時に、頬に飛んできた何かをとつさに受け止めた。

冷たい。目を開けずとも、それが氷の塊だということは判った。

無理やり目を開けた儂の視界に飛び込んできたのは、中空で動きを止めた冬獅郎と、

彼を見上げるように体を起こし、翼を広げた氷輪丸だった。

「力が拮抗してる」

浦原の言葉通りだった。押すも返すも出来ぬ、霊圧のぶつかり合い。しかし、均衡は、きつと長くは続かない。

「まだまだ・・・！」

冬獅郎が歯を食いしばると同時に、その体に走る雷光が増した。

まずい！

「やめろ！このままでは霊圧の『オーバーロード』が起こるぞ！」
霊圧の急激かつ極端な高まりにより、稀に起こるのが「オーバーロード」という現象じゃ。

限界を超えて膨張した霊圧は、その場の全員を巻き込み、暴発を起こす。

一言で言えば、それは「自爆」に近い。

冬獅郎は、儂の声にチラリとこちらを一瞥した。

「この結界から出てる！」

それはつまり、このまま暴発を止める気はないということ。

「お前……」

まさか。初めからこれが狙いか？

一歩でも退いてたまるか、という一徹なまでの負けん気を、その瞳に見た気がした。

「夜一サン、危ない！」

浦原が、儂の肩を掴み、テッサイのほうへと跳んだ。

ダン、と地面に体を叩きつけるように、テッサイの張った結界の向こうに転がり出る。

「冬獅郎……」

身を起こし、結界の壁の向こうに目を凝らした瞬間……
ぶつかり合った二つの力が、その場で大爆発を起こした。

【30】パンドラ4 MONSTER

耳をつんざくほどの轟音が周囲を鳴らし、奔った閃光に目をギョツとつぶった。

再び目を開けたとき、燃え上がる紅蓮の炎が、天井に達するまでに燃え盛っているのが見えた。

熱気が、儂らの体をじっとりと汗で濡らす。

吹き付ける風だけで、髪が燃え上がりそうなまでに、熱かった。

ひとつ、賭けてみるか。

チラリ、と冬獅郎の言葉が耳をよぎる。

「なぜだ・・・」

負けたとて、命を取られる訳ではないではないか。

それなのに、なぜこのような、捨て身の勝負に出なければならぬ？
焔に舐められる、穿界門。

わずか数十分前、この門を見つめ立ち尽くしていた、その背中を思い出した。

「生き急ぐな・・・！」

飛び出そうとした儂の肩を、浦原が強い力で引き戻した。

「浦原！このままでは・・・！」

浦原はその問いには答えず、スツと指で、二人がぶつかった辺りを指した。

「な・・・に」

爆炎の向こうに垣間見えたのは、炎の中で粉々に砕け散る、氷輪丸の姿。

その中から、炎の中でも蒼く輝く刀身が投げ出された。

あの斬魂刀は・・・！

くくくると回転していた刀身が、急に動きを止める。

「あっ！」

炎の中で、よく見えぬ。しかし、儂は確かに見た。

炎から伸びた手が、その柄をがっしりと握り締めるのを。

「霜天に座せ、氷輪丸！」

炎をも切り裂く、澄んだ一喝。斬魂刀『氷輪丸』から、白い輝きが放たれた。

「・・・ああ」

浦原は、帽子を脇に挟むと、息をついた。

「アタシは今、氷輪丸が『氷雪系最強』と呼ばれる訳が、判った気がしますよ」

「そうじゃな」

ひゅう、と大地を、乾いた風が吹き抜ける音が聞こえる。

辺りは、静まり返っている。

地下空間を呑むほどに圧倒的な質量の炎は、少年のただの一声で、幻のように消えた。

まるで、上に立つものの出現に、頭を垂れるように。

しかし、広がる空間には炎も無かったが・・・氷輪丸も、冬獅郎の姿も見えなかった。

「冬獅郎は！」

儂は慌てて、周囲を見渡した。

「・・・しまった」

その声に、儂らはハッと前方の岩上を見やる。

その死覇装のあちこちからは煙が上がり、その銀髪も白い肌も、煤で汚れている。

「龍を消しちまったら、肝心の答えが聞けねえ」

儂は、その背中を認めると、ゆっくりと足を進めて、冬獅郎に歩み寄った。

「馬鹿者が」

ピクリ、とその肩が動いた。

「いつでも死ぬ覚悟があるのは、死神として当然かもしれぬ。

しかし、ムダに命を投げ捨てる真似をするな。

総隊長に何と言われているかは知らぬが、お主の命は、そんなに軽くはないぞ」

おそらく、相打ち覚悟で敵を殺せ、と言われておるのだろう。

確かに、そう言うしかない絶望的な状況のことも、承知している。

しかし、自分よりも遥かに年下の後輩が死地に赴くのかと思うと、心が突かれたように痛んだ。

「死ぬ覚悟は、あるさ」

儂に背を向けたまま、冬獅郎がゆっくりと、取り戻した刀身を鞘に収めた。

シャツ、と涼やかな鞘ずれの音が響いた。

「でも、死んでもいいとは思ってねえ。

最期の最期まで、生き残るためにあがくと決めたんだ。だからここにも来た」

儂を振り返ったその時に、冬獅郎の頭をよぎったのは、誰だったのだろう。

ただ、儂はこの少年が、これほど大人びた優しい表情ができるとは思っていなかった。

軽い身のこなしで、冬獅郎が岩から岩へ飛び移り、こちらへ向かってきた。

ボロボロになりながらも、その霊圧は全く衰えていない。

その瞳には曇りひとつない。

足取りも、軽い。

「バケモノめ！」

儂の軽口に、冬獅郎ははじめて、少年らしい笑みを返した。

「危ない危ない。もう少しで、ここを覆う結界そのものが壊される
ところでした」

この浦原の苦笑いは、きつとホンモノだろう。そして、冬獅郎の方
に歩み寄った。

「賭けは、アナタの勝ちですよ。日番谷隊長」

「全く全く、危ないところでした！眼鏡にまたヒビが入ってしま
いました」

突然あらわれた人影が、冬獅郎の全身をすっぽりと覆い隠す。

「誰だ？」

冬獅郎が後ろを振り返った先には・・・

「おや！着物のあちこちが燃えてますな。これはいけません」
筋肉三つ編み男、テッサイがいた。

こういう男に免疫はないのか、冬獅郎がおそらく無意識に、一歩下
がる。

「誰だつて・・・」

「私が消して差し上げましょう。この鉄の筋肉で！！」
言うが早いか、テッサイは冬獅郎の背後から、ガバツ！と抱きつい
た。

その激しすぎる体格差のせいで、半ば自分を抱きしめたみたいにな
っている。

「てめっ！離せ！！」

冬獅郎の抗議の声は、テッサイの分厚い胸板に遮られた。

「あらあら。これ、写真撮って精霊廷通信編集部に送ったら、売れますかねえ」

「・・・お主、ほんとに口クなこと考えぬな」

「日番谷冬獅郎男に抱きしめられる。話題性はバッチリですよ、きつと」

「このまま放っておけば、『絞め殺される』にタイトル変更が必要じゃな・・・おおっ!!」

三分後。

「いやあ。これまで抱きつく度、皆さん色んな反応をされるんですが」

テッサイは、自分の分厚い腕を撫でさすっていた。

「噛みつかれるというのも、新鮮で良いものです」

「この変態野郎・・・!」

冬獅郎は、たつぷり十メートルは離れた岩の上に座り、恨みがましい目でテッサイを睨みつけていた。

口元を押さえている。どうやら、そうとう歯ごたえがあつたらしい。

「あちこち火傷だらけじゃないですか!ここはこの私が・・・!!」

「治さんでいい!!寄るなっ!!」

どうやらトラウマ並のダメージを与えてしまったらしい。

まあ、確かに、舐めておけば治るくらいの傷なようじゃ。放っておいても心配はあるまい。

「しかし、これは確かに斬魂刀の『屈服』。これで尚、正解できないとなると・・・」

氷輪丸が言っていた、『本質』とは何のことでしょうねえ」

よいしょ、と浦原が儼の傍らで、身を起こした時だった。

「バカどもが・・・」

その声は、どこからともなく聞こえてきた。

【31】パンドラ5 氷輪

冬獅郎が眉間に皺を寄せて、浦原を見やった。

「オイ、今俺のことバカつつつたか？」

「め、滅相もない」

浦原が手を振ったときには、冬獅郎は別の方向を見ていた。

「・・・何だ？」

少しずつ広まっていたのは、高まることで周囲を圧するような、攻撃的な霊圧ではない。

まるで自然現象のような・・・冬の朝のように冴え冴えとした空気が、周囲を覆ってゆく。

「これは面白い。霊圧が一箇所にわだかまっているみたいツスね」

浦原も、冬獅郎と同じ方向を見てつぶやいた。

肉眼では見えぬ。

しかし、霊圧が一箇所に凝り固まっていくのが、意識を研ぎ澄ませれば分かる。

その部分が、陽炎のようにゆら・・・と揺らめき、人の姿を形作ってゆく。

「・・・！」

それを見守っていた冬獅郎の目が、ゆっくりと見開かれた。

そして、脇に立てかけてあった氷輪丸を手にとると、その場から立ち上がる。

「お前・・・誰だ」

「分からぬのか」

畳み掛けるように男が問いかえす。

声音はあくまで静かで、挑発的な響きはなかった。

ヒュウツ、と一陣の風が吹き抜けたその場所には、一人の男がたたずんでいた。

まるでずっと前からそこにいたかのような、自然さで。

そこに居たのは、人間なら年のころ50代くらいの、初老の空気の漂う男だった。

生成りの着物を2枚ほどゆったりと重ね、首からは、何連も連なる長い黒数珠をかけている。

その姿は、まるで修行僧のように見えた。

口の脇や眉間など顔のあちこちに、彫刻のようにくつきりとした皺が刻まれている。

それは老いというよりも、その男の雰囲気、断固とした意思を添えているように見えた。

切れ長の瞳がゆっくりと開けられ、濃い茶色の瞳が、冬獅郎の前にひた、と据えられた。

「・・・お前が『氷輪丸』なのか？」

「当然だろう？ お前は本当は知っていたはずだ。」

我の本当の姿は、『龍ではない』ということに」

冬獅郎は、その問いには、肯とも是とも答えなかった。

答えようがない質問だったのかもしれない。

表面的には知らなくても・・・心の奥底で、知っている、ということもありえる。

ただ・・・ひとつ気になったことがあった。

冬獅郎が、男から距離をとるように、後ずさるのが見えたからだ。

その表情に浮かんでいるのは、紛れもない緊張。

圧倒的な力を持つ破面を前にしても、怯えの色を微塵も見せなかったという、この小年がだ。

それだけ、恐ろしい霊圧を持つているとは思えないが・・・
何より、この男は、冬獅郎自身の魂から生まれたもの。
つまり、冬獅郎よりも器が上回るということは、ありえないのだ。
冬獅郎自身がそれを知らぬはずはない。それなのに。

「卍解を手に入れたいか？」

男の問いに、冬獅郎の足がぴたりと止まった。

「当たり前だ！」

迷いを振り切るように、一歩大きく前に踏み出した。

「お前を『屈服』させれば、完全な卍解が手に入る。そう捉えていいんだな？」

その問いに、男は一度、黙って頷いた。

「何が、本質が違う、だ」

カシツ、と音を立て、斬魂刀を引き抜く。

「外見が違うだけで、中身は同じ。龍を屈服させたなら、お前も本質は変わらないはずだ」

冬獅郎らしくない断定の仕方だ。儂がそれを聞いて、そう思った時。男の口元が、にい、とつりあがった。

「っ！！」

とっさに、冬獅郎がその場から飛びのいた。

まるで突発的な火山の噴火のように・・・何の前触れもなく、男の霊圧が跳ね上がったからだ。

「くく・・・はははははは！！！！」

さっきまでの静謐を一瞬で見出し、狂ったように男は笑い出した。

その声は空気を、大地を震わせ、儂らは顔を腕で庇った。

「痛っ・・・」

庇った腕に鋭い痛みが走り、薄く目を開けると、決して浅くはない傷がいくつも刻まれていた。

信じられぬ・・・

霊圧だけで、儂らを斬ることができるとは・・・

隊長クラスの死神ともなれば、自分を自然に覆う霊圧だけで、軽い攻撃は跳ね返してしまうものだ。

そして目の前のこの男は、攻撃すらもしかけていないのに、だ。

「誰が、誰を屈服させるだとかくだらぬ冗談を言っておると・・・殺すぞ」

その瞳の奥に潜んでいた狂気が、唐突に露になる。

この殺気は・・・言っている言葉が本気であることを示している。

その言葉は、儂らの脇に瞬歩で現れた冬獅郎に向けられた。

その右頬が、さきほどの霊圧にやられたのだろっ、裂けて血が流れている。

「アンタら、逃げる。この戦いに巻き込むわけにはいかねえ」

当然気づく、か。どうしようもないこの実力差に。

「お主も退け！不完全な卍解だろうと、ここで犬死して零になるよりはマシじゃ！」

儂は冬獅郎の肩をガツと掴んだ。

この男を倒すことが卍解には必須だというなら、冬獅郎に卍解はまだ早い。

だが、百年経てば、この男に匹敵する力を身につけぬとも限らない。しかし、冬獅郎は儂の手を振り払った。

「今だって零と同じだっ！」

爛々と輝く碧い瞳が、儂に向けられた。

「破面からソウル・ソサエティを護れないなら、今の力は『零』なんだ。

卍解に至る道があるなら、俺はそれに賭ける」

「・・・バカ者が・・・」

こんな顔をする奴を、止めるだけムダだったことくらい分かっておる。

儂らに出来るのは・・・もし男が冬獅郎を殺そうとしたとき、護ることのみ。

「ソウル・ソサエティを護る、か」

ざつ、と足音が響き、儂らは一斉に身構える。

「真央霊術院の教科書に、そう書いてあったか？美しい言葉だ」
気づけば、その腰には、一振りの刀を帯びていた。

氷輪丸！

その刀は、今冬獅郎が構えている刀と、瓜二つ。
軽々と、慣れた手つきで男が「氷輪丸」を引き抜いた。

「ただし。そんな綺麗事を言っているうちは、我は絶対に倒せぬ」

「綺麗事、だと？」

「死神の矜持は、『終わらせる』ことだ。

敵を殲滅^{せんめつ}し、あるべきものをあるべき場所に収める。それだけだろ
う？

お前の中から我が『観てきた』風景は、いつもそうだった。

お前には違うものが映っていたのか？」

「違う」

儂は、思わず冬獅郎を見上げた。

「俺はそんなものは見ちゃいない。

いつだって終わらせるためじゃなく、続けていくために・・・生み
出すために、俺達は戦ってきたんだ」

流魂街の名もなき人々が続ける、代わり映えもしない日常を護って
ゆくために。

例え傷ついても、戦いの先で、人々が新しい生活を手にしていくた

めに。

「ふん……」

男は、むしろ満足そうに、笑みを広げた。

しかし、その瞳から見える殺気はどんどん増している。

「我はお前のそういう甘い処は嫌いではないがな。」

今更だが初対面だ、名くらい名乗っておくか。

我の名は『氷輪^{ひのわ}』」

「日番谷冬獅郎だ」

向き合った二人が、同時に体勢を低くし、斬魂刀を向け合う。

まるでシンメトリの絵のように、二人の動きは瓜二つだった。

「言葉で語る番は終わりだ。……かかってこい」

【32】パンドラ6 敵は身中に在り

「『大紅蓮氷輪丸』！」

「氷輪」に返したのは、迷いのない雄叫び。

見る間に、冬獅郎の背後に龍の姿が現れ、天空に向かって吼えた。迅雷の勢いで冬獅郎の体が宙を舞った。

氷輪も同時に、岩を蹴る。

二つの体が、影にしか見えないスピードで、すれ違う。

「冬獅郎！」

叫んだときには、二人は既に、着地していた。

どうなった！？

カラン、と刀が地面に落ちる音が響いた。

「・・・う・・・！」

ドクツ、ドクツ、と波打つ鼓動にあわせるように、肩から血が吹き出した。

「冬獅郎！」

意識が一発で吹き飛ぶような、一撃だったに違いない。

傷を手で押さえることも出来ず、冬獅郎の小さな体が、地面に沈み込もうとする。

「・・・まさか。もう終わりか？」

氷輪の体が、ひゅつとその場から掻き消える。

「ぐっ！！」

倒れこもうとした冬獅郎の腹を、その足先が蹴りつけた。

「貴様！」

儂がその場に駆けつけるよりも早く。

「それ以上は、やらせませんよ」

声と同時に、浦原の姿が上空に現れた。「紅姫」を手に、上空から

一気に氷輪に向かって斬り降ろした。
「ふん」

氷輪は、無造作に手のひらを「紅姫」に向ける。
氷輪の手に向かって刀身が吸い込まれ・・・切り裂かれる、と思った瞬間に、止まった。

「何・・・」

浦原が空中で中途半端に静止したまま、目を見開くのが見えた。

氷輪の手のひらが、乳白色の光芒で包まれている。

「これは・・・」

「浦原！」

「一撃が軽すぎる」

氷輪の拳が、浦原の腹に向けられるのを見ると同時に、儂は地を蹴った。

「くっ！」

浦原の肩を掴むと、瞬歩でその場から移動する。

その極限まで高めたスピードに着地できず、儂と浦原は地面に転がった。

「我を呼び出しておきながら、これだけのもてなしで終わる気ではないだろうな」

素早く起き上がった儂らに、氷輪が迫る。

「たりめー・・・だ」

その後ろで、冬獅郎が刀を地面につきたて、立ち上がろうとするのが見えた。

「馬鹿者！もう卅解修行どころじゃない！」

とんでもないパンドラの箱を、開けてしまったようじゃな。

問題は、一見その箱が普通の箱に見えて・・・開けてみれば化物が巣食っていたということじゃ。

殺気が、山のように迫ってくるのを感じながら、儂は身構えた。

「まだ、向かってくるか」

氷輪の聲が、エコーのように耳に届いた。

手足の感覚がない・・・

体が、重かった。というよりも、自分のものでないかのように動かぬ。

傍に、浦原の体が横たわっているのが見えた。その向こうには、冬獅郎の姿も見えた。

二人とも、意識があるとしても、朦朧としている状態じゃろう。儂らが倒れていて、尚さら向かっていく者がいるとなると・・・

「テッサイ・・・ダメじゃ、逃げる・・・」

この者は、まともじゃない。次元が、ちがう・・・

「勝てぬまでも、貴方を止める！」

テッサイの声も、苦痛に割れている。おそらく、浅からぬ傷を負っているのだろう。

「・・・く」

無理やり身を起こすと、対峙する二人が目に入った。たたずんでいる氷輪は、その着物に血のしぶきすら飛んでいない。全く、疲労しているようにも見えなかった。

これが、氷輪丸の本体・・・

こんな者を屈服することなど、絶望的ではないか。しかし・・・どうやってお帰りいただくか、だな。そう思ったときだった。

「・・・ちっ」

氷輪が、舌打ちと同時に空を仰いだ。

「タイムアウトか。残念だ」

その視線が、冬獅郎に注がれる。

ちょうど、ガツクリと首を落とし、地面にくず折れたところだった。意識は、全くない。

そうか！

儂が気づいた瞬間、氷輪の姿が、ふっ……と立ち消えた。

「……え？」

テッサイが、きよろきよろとあたりを見回し、殺気が消えたのを理解すると……その膝が、ドツと地面についた。

「夜一殿、ご無事ですか……」

「皮肉なことじゃが、冬獅郎が意識を失ったのが幸いしたようじゃ」と、いうと

「どれほど強かろうが、冬獅郎と魂を共有する者。

冬獅郎が意識を失えば、氷輪は存在できぬ」

痛む体を何とか起こしきると、その場に胡坐を掻いた。

これほど痛めつけられるのは、ここ百年な無かったというのに。

「やっと行つたつスね」

意外なくらい、ひよい、と浦原が身を起こした。

「お主……気を失ったフリをしたな？」

「そのうち消えるかなーと思ひまして」

落ちていた帽子を拾って頭に載せると、浦原は冬獅郎に向かって歩き出した。

飄々とした声とは逆に、その足取りは重く、右足を引きずっている。

「全く。とんでもないバケモノを飼ってますね」

倒れたままの冬獅郎の肩を支えると、地面から抱き起こした。

「日番谷サンが意識ある限り、氷輪もまた消えることはない」

その小柄な体を抱き上げると、ひよこひよこ体を揺らしながら、儂らのところに歩み寄ってきた。

「それでも、やるんでしょ。このヒトは」

儂は、地面にそつと降ろされた、冬獅郎の顔を見下ろした。場違いなくらい、あどけない表情で眠っておるのう・・・

「しばらくは儂らも、生傷が絶えぬな」

ため息をつくが、付き合おうと決めた以上、途中で放り出すわけにもいかぬ。

その時、ジン太の大声が地下空間に響き渡る。

「おおい！お前ら！何やってんだ！！」

まるで異世界からの声のように、その声は違和感を持って響いた。何やってる、どころじゃないのじゃが。

ボロボロになった儂らを見て、ジン太とウルルが血相を変えて走り寄ってくる。

「夜一サン？」

こんな子供の声に安心したのだろうか。急速に意識がフェイドアウトし・・・

「夜一サンッ！」

ガラにもなく慌てた浦原の声を最後に、一切の景色が闇におちていった。

【33】審判の時1 不確定要素

審判の時が、近づいている。

誰が生きるべきで、誰が死ぬべきか。

本来なら、例えば誰であろうと、他の誰かの生死を決めては、ならぬのだろう。

それが優等生の回答だ。

それでも。この戦時中においては、強いものが弱いものの全てを支配する。

「面倒くさいねえ。どーも・・・」

大きなワイングラスに、手酌でワインを注ぐ。

血のような・・・という表現は、この場合洒落にならないと思う。

天頂に立てば、断片の動きは手に取るように分かる。

次にどう動き、どの目が出るのかも。

「ただ座して結末を待つのみ、か」

結末は、もうほとんど固まっている。

ただ、確定したとまで言い切れないのは、いくつかの不確定要素があるからだ。

俺は、薄暗い壁に向かって、人差し指を差してみせる。

その先に、モニターのような画像が浮き上がったのを見て、前かがみになってそれを見据えた。

そこには、日番谷冬獅郎が眠っている姿が映し出されている。

その傍らには、鞆に収められた氷輪丸が立てかけられている。

ふむ、と俺はうなると、ワインをテーブルの上においた。

「まあ。『あれ』が斬魂刀だなんて思い込んでる以上は、大したこ

「とはないか」

これまでに例のないケースなのは間違いないと思うが、理論上はありえないことではない。

立てた人差し指を、空中で滑らせる。

日番谷冬獅郎の隣に、今度は黒崎一護の画像が映し出された。白っぽい建物の中を、一心不乱に駆けている。

若干十六歳。たった半年で、隊長と肩を並べる実力を身につけた少年。

この戦いにも、大きく絡んでくるのは間違いないと思った。

絶対的な逆境を切り開けるのは、才能ではなく、実力でさえない。何が何でも突破しようとする情熱だ。

それが、この少年を不確定要素たらしめる理由だ。

その時、もうひとつの映像が、黒崎一護の隣に現れた。

場所は、精霊廷。

山本総隊長の姿が映っていた。

その表情に、いつも部下に見せているような覇気はない。

深く物思いに沈んでいるような貌^{かお}だった。

音声からは音は聞こえないが、ぎい……と重々しい戸を開ける音が聞こえたような気がした。

薄暗い部屋の中に映し出されたものを見て、俺は目を細めた。

「ああ、山本総隊長。あんたの読みは今日も正確だな」

山本総隊長が見ていたのは……黒い布。黒い鉦。黒い装飾。黒の。黒の。

既に百年以上は使われていないはずの、隊葬……しかもこの重厚さ、隊長用に違いない。

今残された十名の隊長の顔が、俺の脳裏をよぎってゆく。

最初に死ぬ者は誰だ？

目の前に広がっているのは、体育館みたいにただっ広い、壁も床も真っ白い空間だ。

はぁ、ぜえ、と俺達の息を切らせて走る俺達の足音が、何十にもエコーになって響いている。

「黒崎！やみくもに・・・走るなって言ってるだろ！」

後ろから、息を切らせた石田の声が聞こえ、俺は振り返った。

「んなこと言っても地図なんかねえんだ、適当に走るしかね・・・」
「前っ！」

俺が言い終わるのを待たず、石田がすぐ近くの空間から現れた破面に矢を放った。

くぐもった悲鳴と共に、破面がその場から姿を消す。

「いったんこっちへ退こう！」

チャドの野太い声に目を向けると、裏地のように細い道が目に入っ

た。
返事をする余裕もなく、3人でなだれ込むようにそこへ転がり込んだ。

「んっ、とに・・・次から次から雑魚ばかり出てきやがって！」
乱れる息を整えながら、俺は悪態をついた。

「だから、見境無しに飛び込むのはやめたほうがいいって言ったじゃないか！」

「とか何とか言って石田よ、結局俺達について来たじゃねーか！」
「それは君が、イノシシみたいに回りも見ず突っ込んでいくから、しょうがなくて！」

見捨てずについてきてやってるんだ、感謝してもらいたいね」

「ああ？頼んだ覚えはねー！」

「・・・一護、石田」

どこか申し訳なさそうに、チャドが俺たちを見た。

「隠れている意味がない」

チャドが指差した先では、俺達の言い争っている声が、エコーになつて響いているところだった。

「・・・悪い」

俺達は、ムスツとした表情で黙り込む。

言い争う体力も惜しい。そんな気持ちだった。

虚圏へ侵入し、おそらく敵城だろう、この白い建物に入り込んだまでは上出来だといっていくくらいだ。

でも・・・ここまで敵の城がデカイなんて、想定外だ。

倒しても倒しても波のように襲い掛かってくる破面たちの群れに押され、今はもう、建物のどの辺にいても分らなかった。

「思ったよりデカく、思ったより弱く、思ったより多い」

「とりまとめんな！」

こんなときに、冷静にまとめられると余計ハラ立つ。

石田は、眼鏡を指で押し上げながら、俺を見上げた。

「だが、雑魚で倒せないと知れば・・・そろそろ、上位の破面が出てきてもおかしくないぞ。」

上位の破面が出てくる前に、井上さんの居場所を聞いたほうがいいのかもしいないな」

「聞くつつつてもよ、そうカンタンに、言っわけ・・・」

言いかけた俺の前で、石田が握った両手を、上に持ち上げるしぐさをした。

カツアゲかよ？

その隣で、うん、と力強く頷くチャド。

こいつら・・・

「よし黒崎、やるぞ!!」
なんでイキイキしてんだ？

「シッ！来るぞ」

チャドの声に、俺達は身を潜める。
確かに。音は全く聞こえねえが、気配が少しずつ近づいてくるのを感じる。

「二人、だな」

石田が少し緊張した面持ちで言った。
毎回思うが、なんでコイツらは、そういうことがすぐに分かるんだろ。

「しょうがねえな、俺が捕まえる」
俺は、石田とチャドの前に出た。

白い建物の中を、シュツと黒い影が飛ぶのが見えた。
捉えた！

「逃がさねえ！」
俺達の横を通り過ぎようとしたその瞬間、俺はその場から飛び出した。

その黒い影の首元だろう場所を捕まえ、自分の体重をかけて一気に地面に叩き落した。
「ぐっ！」

起き上がろうとした肩をグツと掴んで押し付ける。

「でかした黒崎!!」

石田とチャドが飛び出してきたのを、視界の隅に捉える。
「い・・・一護？」

「おうルキア・・・で、あれ？」
名を呼ばれ、とっさに返して、考えた。
ルキア？

きよろきよろとあたりを見回す。

ブルブルと、腕の下で体が震えた。

「お前は一体、何をやっておるのだ、一護!!」

「へ」

その時ようやく、俺は自分が押さえつけているのが、ルキアだということに気づいた。

「・・・」

互いの顔の距離は、50センチくらい。

両手で両肩を押さえつけ、のしかかっている姿は、まるで・・・

「一護・・・」

低い声が聞こえ、固まっていた俺は慌てて顔を上げた。

今まさに、斬魂刀を解放しようとしている赤髪の男は・・・

「てめー、ルキアに何してくれてんだ!!!!」

「ま! まで恋次!! 話せば分かる! 話せばっ!!」

「卍解っ!!」

どーん、とその場にどこか間の抜けた爆発音が響いた。

【34】審判の時2 峻烈のネリエル

「・・・だからよ。聞けよ。動きが早すぎて、顔とか体格とか見えなかったんだよ」

「そうそう。死神達が、こんなに早く来てくれると思ってなかったしね」

「・・・ウム」

俺達は順番に事情を説明した。目の前で仏頂面を作っているルキアと恋次に向かって。

「・・・ていうか何で、俺達正座させられてんだ。

「分かっておる」

ルキアはもうよい、というようにヒラヒラと手のひらを振った。

「ガキと言えども十六。色気づいても・・・」

「だから！！分かってねえ、あんた分かってねえよ！」

実年齢はとにかく、見た目は年下にさえ見えるルキアに、色気づいたとか言われたくない。

「・・・そんなことより。精霊廷が、よく君たちがココに来るのを認めたね？」

石田の何気ない言葉に、カチン、とルキアと恋次が固まった。

「認めて・・・ねーのか？」

恐る恐る聞いてみる。

考えてみたら、たった二人だけ助っ人に寄越すなんて、中途半端なことをするだろうか？

「・・・いや、しない。

自問自答するまでもなく、ルキアと恋次は、気まずそうに頷いた。

「お主ら3人だけ行かせたところで、モノの役にも立たぬと思ったのだ！」

ルキアは、キツイことをさらつと言ってのけると、懷に手をやった。そして、50センチ四方くらいの紙を取り出し、俺達の前に広げてみせる。

「なんだこりゃ？」

何気なく見下ろして・・・ハッ、と気づく。

「これは！」

石田が身を乗り出して、食い入るようにそれを見下ろした。

「虚圏の地図か！どうやって手に入れたんだ？」

「なに、兄様の机の上に偶然広げてあるのを見つけてな。お借りしてきたのだ」

それって、盗んだんじゃないか？そう思ったが、言わないでおく。大体、白哉にしたところで・・・わざと広げておいたように思えるぞ。

少なくとも、絶対偶然じゃねーよ。

俺は、もはや本人達以外は全員信じている「白哉、妹溺愛説」を思い出していた。

「なんにしる良かった！どこに行けばいいのか、正直困ってたんだ」
石田は、早くも自分たちがいるところを見つけたらしく、指で道を追っている。

「ここが中心部分か・・・！」

「中心部分に井上が幽閉されている可能性が高い。少なくとも、中央に行けば何か分かるはずだ」

「・・・だな」

「とにかく！ピクニックじゃあるまいし、こんなところで地図広げてても始まらねえ」

恋次が、ルキアと石田の会話を遮ると立ち上がった。

「そういえば、急に虚が攻めてこなくなったな」

俺の呑気な口調に、ルキアが俺を睨み上げた。

「通してくれる気になった、とても思うか？むしろこの沈黙は・・・」

「
そこまでしか、ルキアは言い募ることができなかった。

カツ、カツ、と硬質な音が、ゆっくりと建物の奥の方から、聞こえてきていた。

「……蹄^{ひづめ}？」

ルキアが怪訝そうに、眉をひそめて奥の方を見やる。

「動物もいるのか」

動物好きのチャドが身を乗り出したが……多分、チャドの期待通りのモノはでてこない気がした。

「……ンツ？」

やわらかい香りが、鼻腔をくすぐる。

視線の先で、翠のやわらかな髪が、空気に流れた。

「お、女？」

薄暗くて全容は見えないが、部屋の向こう……100メートル以上離れたその場所に、女の顔が浮かび上がった。

その表情はよく見えねえが、深い翠色の髪を持つ、色白の女だ。

鼻から両頬にかけて横一文字に、ピンクのペイントが施されている。淡い緑の瞳が、俺達をまっすぐに見つめていた。

カツ。

もう一度音が響いたとき……俺達は息を飲んだ。

「じ……人獣？」

その女の腹から下は、ヒトの足ではなく。カモシカを思わせる、4本の足がついていたのだ。

まるで神話に出てくる神獣のようだ……と俺は場違いなことを思った。

黒い尾が、風になびいている姿は、確かに神々しくさえあった。

「あなた方が、ここに侵入した死神ね」

大人の女を思わせる、穏やかな声が周囲によく通った。

「お前たちが捕らえた、仲間を取り戻しに来ただけだ!」

俺が怒鳴り返しても、女は涼しげな瞳を向けるだけだった。

「私の名は、ネリエル。階級は5。」

これ以上部下を失う訳にはいかないわ。だから、この区域を取りまとめる、私がここへ来た」

「NO・5十刃・・・!」

確か、恋次と俺でかかって、一太刀も浴びせられなかったグリムジョーが、NO・6だと言っていた。

そいつより、更に上だったのか？

ルキアと恋次が、同時に斬魂刀を構えた。

だが、ネリエルと名乗った女が手にしているモノに気づき・・・目を見開いた。

「何だあれは・・・槍、か？」

女の体高くらいの長さはゆうにある、巨大な槍。

馬鹿でかいドリルみたいな刃先が、中央の持ち手をはさんで、両方に取り付けられていた。

「石田! 行け!! 同じ槍だろ!!」

「って・・・あんなモンと一緒にしないでくれ!」

石田があせった口調で怒鳴った瞬間、ネリエルが、大きく槍を背後に構えて振りかぶり・・・

俺達が身構えるよりも早く、その槍を投げつけた!

「うおっ!」

「あぶねえ!」

俺はとつさに石田とチャドを突き飛ばし、自分も地面に転がった。崖が崩れたような烈しい轟音に振り返ると、巨大な建物の白い壁に

ぽっかりと穴があき、青空と砂漠が見えていた。

ありえねえ……！

瓦礫と化したその場で、ルキアと恋次が身を起こすのが見えた。しかし二人とも、まるで天災に出くわしたかのように、呆然自失の表情だ。

「死ぬか、退くか。ふたつに一つよ」

「いや……押し通る！」

俺は立ち上がり、斬魂刀を構えた。

俺は、井上を助けるためにここまで来たんだ。

目的を果たすまでは止まらないし、止まることなんて出来ない。

「……命を大切に使えと、教えてもらわなかったのかしら？」

「ああ。大事に使ってるさ。最善の結末のために」

ただ、生き長らえることに興味はねーんだ。

自分がやると決めたことを、貫いて初めて、生きていけると言えるんじゃないだろうか。

ハッピーエンド

「最善の結末……？」

ネリエルは、俺の言葉をゆっくりと反芻した。

「分かっているじゃないわね。刀を向け合った以上、ハッピーエンドは誰の上にも訪れない。」

待つのは、バッドエンドだけよ。私達にとっても、貴方たちにとってもね」

「……破面から、そんな言葉を聞くとは思ってなかったな」

俺は本心からそう言った。

戦いの目的は、相手を殺すことだ。

例え殺すことを望んでいなくても、でも結局はそうになってしまうんだ。

他人を殺し、傷つけてでも護りたい自分の願い。

それを叶えた果ての、ハッピーエンドなんて、確かに自己満足にすぎないのかもしれない。
それでも。

井上・・・

俺はその時、満面の笑顔を浮かべて俺に手を振った、井上を思い出した。

「それでも尚戦うのは、私達がそれしか、生きる術を持たないからどこか狂っているからよ」

「違う！」

俺は、どこか静謐せいひつな光をたたえた、ネリエルの瞳を見返した。

「そりゃ、全てを同時に護る神様みたいにはなれねーよ。でも、一人くらいはこの手で護る。」

そのために俺は戦ってるんだ！」

- - - - -

補足。

ネリエルの設定は、原作とは全然違いますので、あしからず。

【35】審判の時3 夜一、瀟靈廷へ

瀟靈廷は、現世と同じく快晴だった。気候はぐんと春めき、時折照りつける強い日差しは、初夏の兆しさえ見える。

「三百環のお買い上げになります！」

ニツコリ笑った甘味処の娘から胡麻団子を受け取り、口に放り込みながら歩く。

呑気なもんじゃのう。

百年も経てば、この四楓院夜一の顔も忘れられるのか、通りを大手を振って歩いても誰も気にしない。すれ違う貴族達も人々も、平和そのものの顔で笑いさざめきながら歩いておる。儂が刑に処された死神の逃亡を幫助し、五大貴族の権利を剥奪の上、追放された罪人であつてもじゃ。それだけ、儂が追放されてから百年、平和だったということだろう。……風前の灯、としか言えぬが。

「聞いたか。今日、また臨時の隊首会があつたらしいぞ」

その時に聞こえた死神の会話に、儂は耳を澄ませた。

「またかよ？」

「ああ。これは噂だが、隊長自ら虚圏に出征されるそうだ」

「いきなり隊長が？」

やはり、全くの平和、と云うわけにはいかんか。どうやら、まだ一般の人々や貴族には今回の戦争の話は全く耳に入っておらぬが、さすがに死神の間には広がり始めているようじゃ。具体的な話を欠く、「不安」という形で。ならば事実を知らせればよい、という訳にもいかぬし。平隊士から見れば、雲の上のような存在の隊長格が、戦つても勝てぬ相手がいるなど想像がつかぬだろう。結局は、後がない隊長が一番苦勞しているのかもしれない。

そう思っている間にも、死神達の会話は嫌でも耳に入ってくる。

「どーすんだよ。いまや隊長9人しかいねーんだぜ。次の隊長が選出されるって話もねえし」

「9人？ 10人じゃないのかよ？」

「日番谷隊長だよ。二週間前から休職してて、松本副隊長が隊長代理だぜ」

「まじかよ？ こんなヤバイ空気の人に休職なんて、まるで逃げた……みたいじゃねえか？」

途中から声が潜められ、よく聞こえなかったが……僕は思わずそちらを振り返る。確かに傍から見れば、日番谷の行動は臆病風に吹かれたようにも見えるだろう。しかしそうではないことを、僕は一番知ることができる立場にいる。言い返してやるのはたやすいが、日番谷がそれを僕に望むとはとても思えぬ。

その時、

「もう一回言ってみろ、比嘉！」

ひととき大きな声が響き、通りの人間が全員ぎよっとして振り返った。一人の死神が、もう一人の胸倉を掴み、詰め寄っているところだった。

「日番谷隊長は、我ら十番隊が唯一、命を預けると決めた方だ！ 言っておくぞ。仲間である死神に斬られなくては、十番隊士の前で日番谷隊長を侮辱するな！」

「やめろ、山城！」

山城と呼ばれた男は、荒く息を吐きながらも胸倉を放した。

「日番谷隊長は、必ず戻ってきてくださる。俺はそう信じてる」

「……悪かったよ」

他の隊士に支えられて立ち上がった、胸倉を取られていた比嘉という男は、唇をぎゅっと噛んで山城に頭を下げた。

「俺だって、自分の隊長を誇りに思ってる。侮辱されたらただではおかないくらいにな。お前の気持ちを押し量ってやれなくて、悪かった」

……どうやら、儂がとやかく言う必要はなさそうじゃな。少しだけ肩が軽くなった気分で、儂は先を急ぐ。

お主は、ひとりではないぞ。

死神達から離れてただ一人修行に向う、あの小さな背中を思い出した。

微笑んだ時、大通りの突き当たりに、「一」を大きく炭書きされた巨大な門が見えた。

この門を見るのも、久しぶりじゃ。まさか、追放されて百年も経つて、正門から再訪する日が来るとは思っていなかったが。

「何者だ？」

感慨に浸る間もなく門番に誰何され、少々辟易する。名乗るのは容易いが、余計もめそうじゃ。さて、どうするか、と思ったとき、扉が内側から押し開けられた。

「四楓院夜一。このような処で何をしている」

「……白哉」

門の内側に佇んでいたのは、薄絹の肩掛ショールを風にたなびかせて立つ、朽木白哉だった。漆黒のその瞳からは、全く感情が読めぬ。難しい男に出合ったわ、と儂はため息をついた。

「そこを通してくれぬか、白哉。総隊長にご報告したいことがあるのだ」

「お通しして差し上げてください」

涼やかな声が聞こえた。決して大きな声ではないが、その場に良く通った。

「烈……」

「ご機嫌よう、夜一さん」

につこりと微笑を浮かべて、その場に現れたのは卯ノ花烈、四番隊隊長だった。その笑顔は、前回最後に会った時、儂がソウル・ソサエティを裏切る前と、全く変わらぬ。

「はっ！」

門番たちが一斉に両脇に退き、儂は門内へと足を踏み入れる。

「また、四番隊にもお立ち寄りくださいな。積もる話をしましょう」すれ違いざまに卯ノ花は笑顔のままそう言つと、隊長羽織を翻し背中を見せた。

その後に、白哉。さらにその後から、更木、涅が現れ、儂にちらりと視線を向けてから、門の外へ出て行つた。

これが臨時の隊首会、とやらか？

その割には、他の隊長の霊圧を近くに感じぬ。日番谷が言うには、浮竹と京楽の二人は二週間前の時点では、まだ病床にあつたらしいが。儂は、近く感じる強大な霊圧に向かって歩みを進めた。廊下の突き当たりにある、巨大な扉に手をかけ、押し開いた。西日が差し込むなか、その姿は黒く見えた。

【36】審判の時4 夜一と総隊長の密談

「……四楓院夜一か。直接話すのは久しぶりじゃな」

「確かにお久しぶりですな。山本総隊長殿」

逆行の中で見る山本総隊長は、驚くほど全く変わっていないかった。死覇装姿は細身に見えるが、着物の下は鋼のような筋肉で覆われているに違いない。一歩近づぐことに、押さえられぬ霊圧にこちらが圧せられる思いをする。まさに、二千年以上この瀟霊廷の死神たちを束ねてきた、隊長の中の隊長に相応しい風格だった。総隊長は、ふと窓から、外のほうに視線をそらせた。

「卯ノ花。朽木。更木。渥。この4名を、そろそろ虚圏に派遣しようと思うてな。今、直接命を下した所じゃ」

「……やはり」

僕は、さきほどすれ違った4人の姿を思い出した。命の危険があることは知っておるだろうに、全く普段と変わらぬ。卯ノ花など、逆に機嫌が良く見えたくらいだ。

「虚圏に向かった一護達は、やはり苦戦を？」

「涅隊長が、虚園内の霊圧を探っており。十刃とまともに交戦しておるようじゃな、霊圧が徐々に小さくなっており。……最早、一刻の猶予もない。黒崎一護の力は、まだ失えん」

総隊長にそう言わせるなどとは、一護もやるようになったものじゃ。僕はそう思いながら、総隊長と並んで外の景色に目をやった。今この瞬間も、破面と戦っておるのか……

「それより四楓院よ。本来追放された身であるお主が、この地に何用じゃ。百年経とうが、立場は変わらぬぞ」
その視線が冷酷に突き刺さる。

「理由によつては、この儂自らが処罰を与える。そのつもりで、今の今まで見逃していたのじゃ」

儂はそれに対して、余裕の笑みを返した。

「脅しかの？ 総隊長殿。それなら、もっと若い者に使うべきじゃの。儂くらいの年になると鈍くてかなわぬ」

「脅してはないと思ひ知りたいのか？」

「まあ、そうお怒りなさるな。たまには、可愛い孫の話をするのも悪くはあるまい」

総隊長はしばし鋭い眼光のまま儂を見据えていたが、やがてふむ、と顎鬚を捻った。

「……日番谷隊長のことじゃの」

「はい」

儂は頷いた。

「正確には日番谷自身ではなく、『氷輪丸』の本体のことじゃが」

「一体何事じゃ」

「……最近の斬魂刀の本体は、鬼道まで使いこなすようになったのじゃな。ご存知じゃったかの？」

注意深く、総隊長の表情の変化を見守りつつ続ける。思ったとおり、老隊長は怪訝な顔をした。

「何を言つておる。お主も知らぬわけではあるまい。鬼道を使えるのは、修行を受けた正規の死神以外にはおらぬ。斬魂刀の本体が鬼道を使うなどありえぬ」

「本当に？」

儂が畳み掛けるように問いかけると、総隊長は儂を、その炯炯と輝く瞳で見据えてきた。

「……まさか」

「そのまさかじゃよ。氷輪丸の本体は『氷輪』と名乗った。その鬼道、剣術、瞬歩、どれをとっても超一流じゃ。何しろ隊長である日

番谷が手も足も出なかったのじゃからな。それらの術が死神しか持ちえぬというのなら……『氷輪』は死神じゃ、間違いない」

総隊長はいったん黙ったが、その表情の中に、今まではなかった不快が見て取れる。

「氷輪丸の内部に、他の死神の魂が棲みついている、とても言う気かの？ ……にわかには信じがたい」

儂は頷いた。信じられぬのも無理はない、と思う。儂とて二週間前、浦原にその証拠を見せられるまでは、夢にも考えてはいなかったのだから。

二週間前。

「やれやれ。全く、ヒドイ目に遭いましたね。死ぬかと思いました」
とても死にそうには思えぬ飄々とした声で、浦原はパソコンに向っていた。

「一体何を調べておるのじゃ？」

昏々と眠る日番谷に布団をかぶせ、儂は振り返った。明かりを落とした部屋の中で浦原の顔だけがモニターの光で照らされ、はつきりいつて胡散臭い。

「いやねえ。やっぱり色々オカシイじゃないですか、あの氷輪サンとやら」

こつちを見た浦原の表情に、儂は心底呆れてため息をついた。こんな時に、なんでそんなに嬉しそうなんじゃ、お前は。

「何かヘンだなーと思って、霊圧のサンプルを採ってきたんですよ。日番谷サンと、初めて出てきた氷龍、そして氷輪サン」

「……あの緊迫した場面で、どうやってそんなモン採取したんじゃ」「そりゃま、アタシは科学者ですからね」

どうせ、儂やテッサイがやられている間に、せっせと霊圧を集めていたのだろつ。そこまで嬉しそうにサンプルをパソコンに入力して

いるのを見ると、キレる気にもなれぬ。

「そんなもの比較せんでも、答えはひとつじゃろ。日番谷の斬魂刀が『氷輪丸』で、『氷輪丸』の本体が氷龍と氷輪なのだから、霊圧は3つとも一緒に決まっておる」

「まーまー、結論出すのは、こいつをポーンと押すまで待つてくださいよ」

そういいながら浦原は、パソコンのエンターキーを押した。モニターに変化が起こったのは一秒も経たない間だった。次々に現れる英文に、儂は首を傾げる。

「何と書いてあるのだ？ 浦原」

その呼びかけに、浦原は答ええないまま画面に見入っている。横から覗き込むと、その表情が明らかに強張っていた。顎を人差し指で擦りながら、何か考え込んでいる。

「おい、説明しろ」

「……氷輪サンと氷輪丸……氷龍の霊圧は、100%一致です。しかし日番谷サンと氷輪サン、そして日番谷サンと氷龍の一致率は、それぞれ87.6%。……これがどういうことか、分かります？」

儂は思わず振り返り、スースーと寝息を立てている日番谷の顔を見ている。いつもの眉間の皺がない彼は、年相応にあどけない寝顔を見せている。儂は、無意識に拳を握りしめていた。そんな、そんなはずはない。

「氷輪サンが死神なら、氷輪丸は彼の斬魂刀です。しかし何らかの事情で、彼は己の斬魂刀と一体化してしまっている。日番谷さんは偶然、その斬魂刀を手に入れただけです」

「……」

儂は無言のまま、日番谷の布団にいざり寄った。浦原が、儂の背中に声をかける。

「そつとしといてあげましょう。目が覚めたら……って、ええ!？」

浦原の言葉は、ブーンという乾いた音に掻き消された。儂が布団を引き剥がして日番谷の襟元を掴み、思いつきりビンタを食らわせたからじゃ。

「痛つてえ！？」

さすがに寝起きは大人の振りではできぬのか、子供まるだしの声で日番谷が叫ぶ。頬を押さえるのにかまわず、その肩を揺さぶった。

「お前！ 『氷輪丸』がお前の斬魂刀ではないなど、どういうことだ！」

「は？ 何……」

「お前はそれを知っていたのか？ どこで手に入れたのだ、氷輪丸を！」

もしもそうなら。この少年は、他人の斬魂刀で卍解を得ようとしていたことになる。だとしたら、日番谷を見込んで送り出した総隊長も、協力した儂らもいい笑いものじゃ。

「……」

日番谷はキョトンと目を見開いたまま、固まってしまった。その表情を見て、儂の手から力が抜ける。

「……どうやら、ホントに覚えがないみたいですよ」

儂の肩を、後ろから浦原がぽんと叩いた。

「……どこで手に入れたって……覚えて、ねえよ」

しばらくの沈黙の後、日番谷は呟くように言った。

「ばあちゃんに拾われた時、俺はもう『氷輪丸』を持っていたらしいんだから。それ以前の記憶は、俺にはねえ」

長い、沈黙が落ちた。格子窓から部屋の床に差し込んだ影が長くなるのが分かるほどの時間の後、総隊長はため息をついた。

「前兆は、あつたのじゃよ」

浦原と儂の推論を肯定する、重い一言だった。

「初めて日番谷冬獅郎が氷輪丸を振るうのを見て気づいておった。なぜ、あの少年と刀の霊圧は微妙に異なるのかと。本当に本人の斬魂刀なのかと疑念を持った」

「本人にはそのことは？」

「敢えて黙っておった。仮に本人の斬魂刀でないなら、卍解は不可能。じゃから、不完全な卍解ながらも儂は隊長に推したのじゃ。そんな事情を言えるはずもない」

「……苦い、言葉だった。」

まるで死の病に冒され、生きる治療法を模索していた直後に、やはりそれは無理だったと宣告するようなものじゃ。

「……日番谷隊長は、何と」

「それが……」

儂は指先で頬をぼりぼりと搔いた。

「あまり気にしておらぬようです」

「……何？ 状況は飲み込めておるのだろうか」

「それよりも、氷輪から戦いの術を身につけようと夢中なようじゃ」
「……」

しばらくの沈黙の後。ふおっふおっ、と総隊長は顎鬚を揺らして笑い出した。

「頼もしいのう。案外卍解よりも強い力を身につけるかも知れぬの」

「ただ、ひとつだけ儂に調べて欲しいことがあると、言っております」

「何と？」

「自分は年こそ若いが、著名な死神は書物を読んで、全て知っている。それでも『氷輪』などという名は知らぬ。もちろん名前を変えている可能性はあるが、氷雪系でそこまで強い力を持った者がいたのか？ と。そもそも氷輪丸は、氷雪系最強の斬魂刀、と呼ばれていたからの」

「『氷輪』とは何者なのか調べたい、ということか」

「本来なら大霊書回廊で自分が調べたいところだがその余裕がないと。儂が閲覧を許されぬなら、誰かに命じて調べさせてはくれぬか？」

「……」

すぐに、構わぬと返事が戻ってくるものだと思っていた。しかし総隊長は、しばらく沈黙を守った後、首を横に振った。

「その必要はない」

「総隊長？」

「『氷輪』という者が何者か、儂には薄々見当がついておるのじゃ。

……そ奴は確かに、死神じゃ。日番谷隊長にはそう伝えよ」

「はい。じゃが……」

「儂が知っておる、というだけでは証拠にならぬか」

「いや、そういう訳では」

儂はそこで口ごもった。確かに、二千年を生きる総隊長は死神の生き字引のようなものだ。下手に大霊書回廊を調べるよりも正確な情報、その脳の中にはしまいこまれているのかも知れぬ。

しかし、ここまで断じられる理由は何だ？

その答えを与えられる前に、儂はその場を後にした。

「戻ったぞ、浦原」

儂は、浦原商店の地下で岩山の上に座っている背中に声をかけた。

「おかえりなさい」

ニヤツと笑い、浦原が肩越しに儂を振り返る。その隣に、ジン太の赤い頭とウルルの黒い頭も見えた。

「おいウルル、ジン太、そんな処にいては流れ弾が当たるぞ。奴らの戦いは本人等でもコントロールできておらん」

「いや、そうとも言えないですよ」

「ん？」

「見ての通りっスよ」

浦原は、剣戟が響き渡る岩下を指差した。夢中になって見入っているジン太が声を上げる。

「すげえ……勝てるんじゃないか、今度は！」

「……なに？」

その声に、僕は浦原が指差したほうを見下ろした。

ガキンツ、とひときわ大きな金属音と共に火花が散り、二人の体が飛び離れた。

「霜天に座せ……」

中空に飛びのいた日番谷が斬魂刀をくると体の前で一回転させた。刀の軌跡が円を描く。

「氷輪丸！」

同時に、その円が青白く発行し、唐突に牙を剥いた氷龍が現れる。地面に着地した氷輪に、至近距離から襲い掛かった。

「心臓に悪い戦い方だ」

さすがの氷輪もそれを受ける気はしなかったか、背後に飛び下がった。

「てめえに心臓なんかあんのか？」

氷輪の背中が、ダン、と音を立てて背後で待ち構えていた日番谷にぶつかった。氷輪が振り向いた先に、刀の柄尻を向けた日番谷が迫る。

「じゃあ、成仏しろ！」

「ちっ！」

氷輪が振り向きざまに氷輪丸の一閃を放った。続けざまに膝蹴りを胸に放つ。日番谷はそれを同時に避けると、背後に着地した。

「おお、惜しい！」

ジン太の声に、儂と浦原は思わず顔を見合わせた。

「時に夜一サン、目的は果たしました？ 『氷輪』 って死神は存在しましたか？」

儂は頷き、総隊長の言葉を伝えた。ふむ、と浦原は唸る。

「まア、総隊長がそう言うなら間違いないでしょうね。死神は死ぬ姿が消え、二度と戻ることはない。……てことは、あの氷輪サンは生きてるんでしょうかね？ さっきご丁寧に自分で心臓の話されてましたが」

「言葉のアヤじゃろ、あんなのは。しかし日番谷が氷輪を成仏させたら、氷輪丸はどうなるんじゃ？」

「ああ、そりゃ消えるでしょうねえ。氷輪丸が氷輪サンの斬魂刀だつて言うなら」

ポン、と煙管を置いて、今思いついたかのように浦原は言った。のんびり話してる場合か。

「試す気にはならぬの」

「さすがにね」

「……呑気すぎじゃぞ、お主」

「ま、そう簡単に倒されたりしませんよ。今のとこ一太刀も食らってないですからね。……おおっと」

見下ろした浦原が、目を見張った。

ふわり、と降り立った日番谷の周囲に、バチツと霊圧が弾ける。足の部分を中心に、風が吹いたかのように土が巻き上げられた。

「霊圧の磁場、か」

儂はそれを見て、呟いた。何度か見たことがある。高まる霊圧が頂点にまで達したとき、その中心点に稀に現れる現象だ。

「正解の前兆でもあるらしいですが……残念ながらそれはないでしょうね」

浦原がそう言った時、ちつ、と日番谷が舌打ちするのが聞こえた。同時に背後に飛び下がる。氷輪丸を握ったその腕に血管が浮き出し、細かく痙攣しているのが見えた。

「そろそろ、限界みたいですねえ。助けに入りますか」

浦原が「紅姫」を手に、腰を上げる。しかし、ん？ と眉を上げた。対する氷輪も後を追うことなく、あっさりと刀を退いたからだ。

「なんで最初の時みてえに、ボコボコになるまでやらねーんだよ？ つまんねー」

ジン太が不平そうに口を尖らせる。その肩をポン、とウルルが叩いた。

「冬獅郎くん勝てなかったから、賭けはまたあたしの勝ちだね……300円」

「コラア！ 冬獅郎！ 弁償しろ！」

「うるせえ、人を賭けに使うんじゃないよ……」

話をする気にもなれない、と日番谷は呆れ顔で二人を見上げた。

「ンだよ、やる気がア？」

「ジン太じゃ絶対に勝てませんって」

いきり立ったジン太の肩を、浦原がやれやれと押さえる。

「オイ！」

「……なんだよ」

いきなり声をあげてギラリ、と睨んだ日番谷を、ジン太がやや怖気づきながら返す。

「……メシ時になったら呼んでくれ」

そして、くると背中を向けて歩き出す。氷輪がその後を追うのを見て、儼らは顔を見合わせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6286d/>

BLEACH in DAWN - 夜明け前 -

2010年10月9日10時43分発行